山岳

第二十八年
第一號

山岳

第二十八年第一號

目次

（第二十八年第一號　昭和八年四月）

口繪（高原）

本欄

山岳文學に就いて　田部重治　一頁
景觀描寫としての山岳寫眞　田中薫　一四
東郡大山塊（紀行と覺え書）　鹿野忠雄　三七

雜錄

ティロールの冬　田中薫　八七
マッターホルンの北壁　吉澤一郎　一〇〇
裏川と大日嶽（飯豐山塊）　鈴木岩雄　一一四
春の藥師岳より針の木越え　島田武時　一四五
臺灣の山岳漫談（一）　沼井鐵太郎　一五二

遭難顚末一束

富士山に於ける土屋勇氏の遭難報告（内田勇三）　一六九頁
菅沼に於けるドイツ技師の遭難報告（塚本閑治）　一七一
藏王山に於ける柏源一郎氏の遭難顚末聞書（額田　敏）　一七四

會　報

會務報告（一七八）理事事務分擔決定（一七九）會則の細則一部變更（一七九）昭和七年度會員大會（一七九）第五十七回小集會記事（一八〇）第五十八回小集會記事（一八三）新入會員紹介（一八六）退會者（一八八）會員計報（一八八）「山岳」投稿規定（一八八）日本山岳會會則（一八九）

圖　版

乘鞍岳最高點東面下より視角略々百度の展望　田中　薫　三四―五頁
西に向つてザールバッハの村とヒンテルグレムタールの奥を望む　田中　薫　八八―九
ウィルデンカールスコーゲルの尾根より北西北にシュピールベルグホルンを望む　田中　薫　九八―九
藥師岳より望む劍立山群峯　島田武時　一四一―五

挿　圖

東郡大山塊憶測圖　七六頁
ザールバッハ附近略圖　九三
マッターホルンの北壁　一〇六
裏川略圖　一四〇
クル溪谷略圖　一八二

高　　原

山岳文學に就いて

田部重治

現在の山岳文學について云はんとするのが、此の論の目的ではなく、山岳文學とは如何なるものであるべきかを明かにするのが、主なる動機である。此の論をすすめるに先立ち、先づ文學とは如何なる場合に於ても、文字を以て綴られ、讀まるべきものであると云ふ事實を忘れてはならない。文學を論ずる人のよくやりがちな誤りは、文學は讀むべきものであると云ふ事實を忘れて、舞臺に現はれた劇や繪畫などの性質と不知不識の間に混同することである。

文學に取つて最も特殊の事實は、それは繪畫や音樂とは異り、官能的な表現の形式によらないで、觀念に直接に訴へる言語の組立であると云ふことである。一寸考へると、言語は文字によつて現はされるが故に、文學も繪畫と同じやうに官能的形式を基礎としてゐるかのやうに思はれる。しかし繪畫の官能的な意味と文字の官能的な意味とは全然異つてゐる。繪畫のもつてゐる官能的形式は、それ自身で價値批判の對象となるものであるが、文學のもつてゐる官能的形式は、何等價値批判の對象となるものではない。もつと平易に云ふと、繪畫の官能的な形式

卽ち色彩や線の組立は、繪畫其の物の本質であり、其の巧拙は繪畫の價値に影響を及ぼすけれども、文學の官能的形式卽ち文字は言語の符號に過ぎないものであつて、其の官能的な巧拙は文學とは無關係のものである。

又、音樂との相違を考へても同樣のことが云はれるやうに思ふ。音樂は音響の藝術である。從つて音樂に於ては音響の抑揚や性質は此の藝術の內質を形作るものであり、其の意味に於て音樂は官能的形式による藝術であるが、文學に於ては、詩の如き比較的、音響をやかましく考へる方面もあるが、音響の概念はほんの附屬的なものであり、響く言語の調子は音樂的な感じを與ふることによつて文學の効果を高めはするが、其以外に言語のもつ思想的價値が文學としては大きな意義を持ち、それは音調とは全然、異なれるものである。從つて音樂的作品は音響と云ふ官能的要素のもつ價値が直接に作品の價値を上下することは出來るが、文學的作品の場合に於ては、其の朗讀の音樂的價値は、文學としては附隨的な要素であるに過ぎない。

從つて文學の作品は舞臺にのせてよいとか、映畫としてよいとか、また、朗讀して音樂的な感じがするとかは、勿論、決して惡いことではないが、それは第二義的であつて、文學としての第一義的な特質は、先づ讀まるべきものであり、觀念に直接訴へて快感を起すべきものであり、官能的形式によるものでないと云ふことである。

そして文學の最も興味あることは、それは言語と云ふ獨特の形態によつて繪畫や音樂のもつ情調を與ふることが出來ることである。それは時には繪畫的な描寫を試みることが出來、時には音樂的な調子を與ふることも出來る。そして更に是等の官能的な藝術のなすことの出來ない自由な複雜な表現をすることが出來る。

先づこれだけのことを頭に入れて置いて、山岳の文學とは如何なるものであるかを考へて見ると、それには極めて大ざつぱに山岳を海岸地方と對立せしめて、ほんの山岳地方とか內地の意味に考へて、信州や甲州に起つた

文學を山岳文學と云ふ風に解釋する人もあるやうである。勿論、それも無意味なことではなく、文學の作品を夫等のあらはれた地方に分けて、其の特長を見ることは必ず興味深いことに相違ない。しかし玆で取扱はんとするのは、さう云ふ問題ではなく、もつと狹義に見た山岳それ自身の文學であつて、山岳は文學に於てどう取扱はれなくてはならぬか、山岳の文學はどう云ふものでなければならぬかと云ふことである。

そこで吾々は山が作品に現はれるとすれば、如何なる種類の作品に現はれるか、又、如何樣に現はれなくてはならぬかを順次に考へて見たいと思ふ。そこで先づ山が小說に於て現はれ得るかどうかを考へて見たいと思ふ。

山をどこまでも文字通りに小說の中に織り込まなければならぬとすれば、殆んど山の小說と云ふものゝ存在を否定しなければならないことになつて來る。山を本當に小說の中に入れるとすれば、それは登山中の出來事の範圍に限られることになつて來る。さうした小說は極めて僅かな可能性の範圍にとどまり、極めて稀にさう云ふものゝ材料もよいが、繰り返されるに至つて陳腐になり、遂には材料が無くなる。山は決して海の樣に生活の行はれるところでなくして、登山は人生の極めて一小部分を占めるに過ぎないものであり、出來事の範圍は狹く、そこから想像される問題の種類も少なく、無理をすれば不自然なものとなる恐れがある。其の意味に於て海の生活は文字通りに海の生活ではあるが、山の生活は決して海のやうに包容的ではなく、若し生活が山にあるとすれば、それは低い山か、さもなければ山から離れた麓の生活である。海は廣く人生を包容するに反し、山は往々にして人生を排除すると云ふ考へはここから來て居る。從つて常識的に考へた山の生活は麓の村の生活であり、そこに行はれる牧歌的生活であり、素朴的な生活であり、山に圍まれた村々によつて營まれる生活と云ふことになつて來る。そして決して嚴格な意味に於て、登山家の慾求する高山を取り入れたる人生ではない。若しさうした

高山を取り入れることが前に述べた登山の出來事でないとすれば、それは斯の如き山を背景とした村落に於て行はれる生活の出來事でなければならない。

さう云ふ牧歌的な文學、さうした麓の生活を題材とした文學は、昔から決して乏しくはなかつた。古典文學の初めから、さうした文學は文學の可なり大きな要素となつてゐる。小說に於てもさうした材料は決して乏しくない。さうした山の麓に於ける牧歌的な素朴的な人間の間にある葛藤などは過去に於ても題材であつたし、又、將來に於ても題材であり得ることは慥かである。しかし此の文學に於ける特長として、矢張り、そこに現はされた人間は、山の影響をうけた山の人らしい感情や意志の持主でなければならない。近代的なすばしつこい人間では何としても背景となつてゐる山との調和が見られない。假りに斯う云ふ大自然の間にも近代的な思想が這入つて、それが爲めに過去の素朴さが失はれる場合を描くことも決して排すべきではないが、それは一つの除外例として描かるべきで、決して一般的な場合として考へらるべきではない。其の點に於ても海の文學と山の文學との著しい對立を認めることが出來る。

結局、小說に於ける山の文學は、殆んど田園文學と餘り變らないものであり、文字通りに於ての山を取り入れた小說は、極めて少ない山の出來事や挿話と云ふことになつて來る。前者の場合は決して材料の貧弱さを訴ふるには至らないが、後者に於ては必ず材料の貧弱さを痛感する結果になり、時には映畵の材料としては面白いかも知れないが、讀むものとしては、決して面白くないと云ふ結果を招き易い。しかし嚴格な意味に於ては山の小說はそれでなくてはならないと云ふ惱みがある。

劇に於てはどうか。此の方面に於ても、畧〻小說に於けると同じと見ることが出來る。時としては、小說に於

けるよりも面白い場面を見せることが出來るかも知れないが、それも限られてゐると見なければならない。そして材料の範圍は麓の村落から取られる時には、登山の出來事から取られる時よりも、遙かに廣いことも、小說に於けると變りはない。

次に詩に於ける山はどうか。過去に於て嚴格な意味に於て、山を直接に取入れた文學は、詩、特に抒情詩であつたと云つて差支ない。山は詩に於て題材になり得ること、それが繪畫に於て材料になると、何等異なるところがない。山は紀行文以外に文學の材料となつてゐるのは、此の方面に於て最も多い。それは歐洲に於ても東洋に於ても共通の現象である。山は此の方面に於て歌はるべき好材料であることは、他の自然界の現象と變るところはない。

山を歌ふことは、人間が自然を對象とすることであるが故に、小說に於けるやうに人間と人間との交涉ではなくて、人間と無言の山との交涉であるが故に、そこには劇的な葛藤もなければ、劇的な對立もない。どこまでも、山を歌ひ、山の壯嚴さを發揮し、其の變幻、神秘の表現であり描寫でなければならない。

山が抒情詩の最もよい材料であることは異存のないところであるが、山を歌ふことに最も有効な仕方は何であるかを玆に少しく考へて見たいと思ふ。吾々は山を見、其の莊嚴なる姿に打たれて、最もよく誘惑されることは、山を繪畫的に多くの官能的事實を並べることである。文學と繪畫との區別は旣に述べたことであるが、繪畫的美にあこがれを感ずる人は、ややもすれば斯の如き美の表現は、形態をくど〳〵しく繪畫的に述べることにあると思ふ。文學は元來、音樂のやうに時間的ではなく、繪畫のやうに靜的でもない。繪畫的描寫の美の觀念を直ちに翻譯して文學に於ても繪畫的に空間的に色彩や形態を並べようとすることは誤つてゐる。自然美を現はす文學を實際の例について見るに、靜的な描寫をする人と動的な叙述をする人とはあるが、前者を選ぶ場合でも多くの優

れたる作品に於ける實例は、暗示的であり省略的であり比喩的である。そして動的な描寫を取る場合には、最も中心的な現象によつて狙ふ自然の偉大さを高めるやうな手段を取る。例へば富士山を歌ふとすれば、吾々は先づ富士の姿を考へ、其の色彩を思ひ、どこまでが雪に蔽はれてゐるかを云はなくては氣が濟まないやうに思ふ。ところが山部赤人は次のやうに動的に歌ふことにより此の山の描寫に一新境を開いてゐる。

わたる日のかげもかくろひ
照る月の光も見えず
白雲もいゆきはばかり
時じくぞ雪は降りける。

文學は既に述べたやうに繪畫のやうな空間的な藝術ではなく、官能的な藝術でもないが故に、そして直接に觀念に訴ふるものであるが故に、自然が作家の氣持に與へた影響を歌ふことによつて効果いちじるしいものがある。斯の如きは文學獨特の境地であると云はなければならない。例へばワーヅワースの虹の歌などがそれである。

My heart leaps up when I behold
A rainbow in the sky;
So was it when my life began;

So is it now I am a man :
So be it when I shall grow old,
Or let me die!
The child is father of the man ;
And I could wish my days to be
Bound each to each by natural piety.

「私の心は躍る、
虹の空にかかるを見る時、
私のいのちの始めにさなりき。
私が今大人にしてさなり、
私が老ひたる時もさあれ、
さもなければ死ぬがまし。
子供は大人の父なり、
願はくばわが一日一日は
自然の愛により結ばれんことを。

俳句により歌はれた自然は最もよく文學に於ての正統な表現をもつてゐる。それは暗示的である點に於て、直截である點に於て文學的な表現の最もよい方面を狙つてゐる。其の故は此の形式が最も中心的なものを取つて他を暗示せしむるに好都合な形式をもつてゐるからであると見ることが出來る。芭蕉や一茶の句に自然を歌つたものに優れたものの多いのは其の故である。

歐洲の詩人たちが如何に自然を歌つたかを見ることに可なり參考になり得ることがある。テニスンが「イーノック・アーデン」(Enoch Arden) の中にイーノックが絶海の孤島に救ひの船を待ちつつ暮すところがある。彼は此の熱帶の孤島の有樣を描寫するに可なり繪畫的な描寫を以てしてゐるにも拘はらず、平凡なる作家が色彩や形態の美を以て讀者をうるさいと思はせるやうな手段を取らないで、それを動的に取扱ふことによつて、自然を活かしてゐること赤人の富士の歌と同じところがある。即ち彼は此の島の最も特長のある自然を描き、刻々、うつり行く樣態を見せることによつて、文學の最も特質ある境地を捉へてゐるやうに思はれる。キーツは英國の最も官能的な詩人であつた。彼は自然を描寫する場合にさぞ色彩や形態の美を以て讀者を飽かしめることと想像させるに間違ひない。しかし事實は之に反して、彼の自然描寫は最も法則に叶つたものである。彼は「つれなき婦人」(La belle Dame sans Merci) に於て荒涼たる冬の湖水を次のやうに歌つてゐる。

The sedge has wither'd from the lake,
And no birds sing.

菅は湖水より枯れて

鳥も鳴かぬ。

彼の代表作とも云ふべき「聖アグネスの逮夜」(The Eve of St. Agnes) に現はれた描寫は決して自然に就てではない。しかし此の描寫は自然に關する場合にも參考になることが多いと思ふ。誰でもキーツを讀んだ人は、また、此の詩を讀んだ人でも、キーツは此の詩の美はしい主人公を魅惑的に描寫してゐることを思ふて、其の繪畫的な描寫の言葉を見出さんことを希ふ。ところが仔細に調べると、斯の如き直接的な主人公の描寫は殆んどないのに更に驚く。しかも吾々は此の詩を讀むと美はしい主人公の姿が髣髴として月光に浮び、中世的な雰圍氣のなかに夢のやうにたゞよへることを感じ、キーツの描寫の非凡でないことに嘆美の聲を發する。つまりキーツは主人公のマデラインの美はしさを直接的に描寫することをせず、雰圍氣の美はしい描寫と、巧妙なる比喩と、彼女の一擧一動とを叙述することによつて、彼女を美はしく表現することに成功したのである。

文學によつて表現されたものは、眼に直接訴へるのではなくして、觀念に直接訴へるものであることを考へる時、繪畫の如く空間にある姿によつて訴へる繪畫と、文學とは如何に相違するものであるかを感ずるであらう。嘗て伊太利の文藝復興期の畫家ボッティチェルリがダンテの「神曲」の地獄篇の微細畫をかいた。ペーターは之に對して文學と繪畫との印象の相違を述べ、文學の作品により受けた印象を繪畫に移さんが爲めには、調子をゆるめなければグローテスクな作品を現出するに至ることを云ひ、ボッティチェルリも此の弊害に陷入つてゐることを云つてゐるのは蓋し至言であると云はなければならない。

日本の詩に現はれた自然は全く優れたものであり、文學として必然的な道を辿つてゐるものであるが、山の詩

として數へられるものは多くは短歌若くは俳句の方面に限られ、長歌の方面には餘り多くない。又、歐洲文學に於ても、山岳詩はあるべくして、事實、他の自然界の方面に比較して少ないと見て差支へない。つまり日本に於ては長詩が起つた歴史が餘り永くないために、未だ充分に山の詩として推賞すべきものが生ぜず、歐洲に於ては抒情詩が盛んであつた時分には、割合に山に對する興味が少なく、山に關する興味が旺盛になつた時分には、詩に對する嗜好は昔日ほど旺んでないと云ふことにもよつてゐると思ふ。しかし山に對する詩作的方面は最も新しい自然界の方面であり、最も有望な方面であり、それを歌ふ詩は、最も暗示的な力强いものであり、時には靜的な描寫をとるが、其の時には最も印象的な一面を取つて他を暗示するか、時には赤人の場合の如く、動的な描寫をとるかで、それは文學固有の描寫法に叶ふべきで、決して繪畫的な空間的藝術の精神を直譯してはならないと思ふ。

最後に來るものは紀行文である。之は現今山岳文學として產出せられる最も分量の多いものである。之は果して文學の領域に屬するものであるか、若し屬するとすれば如何なる條件によつて屬せしめられるかが問題になつて來る。

紀行文は最も多く寫實的な、或る意味に於ては報告的な記述であり、若し文學の特有性は作家の創作に存し、作家の創造による構成によるものであるとすれば、紀行文は殆んど文學に屬する資格を失ふことになるかも知れない。しかし事實に於て純寫實なるものは論理的に存在することが出來ない。嘗て獨逸の三人の畫家が同一の自然を髮一すぢも洩すことなく寫實して見たが、結局は三つの異なれる畫が出來上つたと云はれるやうに、結局は個人の情緒によつて作品は彩どられるのが事實である。特に言語による表現は、一層、さうした傾向をもつてゐ

る。

紀行文は決して自然を直寫すること全部ではなくして、多くの時間的な出來事をもつてゐる。言語による是等の表現は、繪畫とは全く趣を異にしてゐる。又、繪畫が自然をうつすことは、比較的、寫實的と云ひ得るが、言語によつて自然をうつすことは寫實とは云ひ得られない程に象徴的であると見ることが出來る。そして言語による自然の描寫は、遙かに寫實的でなく主觀的であるが故に、人間による相違が甚だしくそれに加ふるに事件の叙述は、自然の描寫以上に個人によつて相違をもたらす。

この理由によつて紀行文は純寫實であり得ないこと繪畫以上であるが、更にそれ以上に紀行文は純寫實であり得ない現由がある。紀行文は時間的經過をもつ事件の叙述でなければならない。さうとすれば繪畫のやうに空間的描寫と異なり、紀行文の時間的描寫は、過去の出來事を叙述することが多くの場合に於て事實になつて來る。多くの場合に於て吾々は紀行文を書く時には、過去の自己を再現する。そしてさう云ふ場合に最も大きな働きをするものは、印象の記憶でなければならない。しかしこの印象の記憶なるものは決して自己の經驗を純粹に寫實したものではない。吾々は旅をした記憶は人によつて色々に現はれるが、自然を愛し旅を好む人間には、多くの苦しい經驗は洗ひ去られて、樂しいものと變化させられるのは、個人の主觀的な感情の働きによるものであることを最もよく證明する。さうした場合に最も間違ひのない寫實的事實は、時間的、空間的な事實だけであつて、是等の事實から生み出される感情や印象は、全く紀行文を書く人の現在の感情によつて左右される。例へば最も解り易い例を取つて云ふと、吾々は冬に於て冬を考へる場合と、夏になつて冬を考へる時とは、感情が非常に相違してゐる。冬に於ては冬の寒さが身にこたへる。しかし夏に於て冬を考へると非常に涼しいよい氣持を覺え

る。其の故は夏に於ては吾々は夏と云ふ現實を通じて冬を見るからである。吾々は往々にして過去の苦しい經驗を愉快に感ずるのは、現在を通じて過去を見てゐるのであつて、決して過去を寫實してゐるのではないからである。記憶はさうした意味に於て文學者に取つて大きな役を演ずる。實際に於て生々した記憶をもち、活きた印象をもつ人は文學者に多いのは、這般の消息を物語るものでなければならない。或意味に於ては生々した記憶をもつてゐるものは、文學者の資格をもつ人に多いとも云ふことが出來る。

以上の意味に於て紀行文は決して登山の寫實でなくして、作者の個性によつて創作されたものであると見ることが出來る。ただ時間的、空間的な描寫をのみ主とする紀行文は、文學としての價値が少ないことになつて來る。しかし紀行文に於て時間、空間的要素が必要でもあり、且つそれを避けることの出來ないものであるが故に、それを基礎とした上に作者の印象や創造が働かなければならない。以上は紀行文の文學として成立し得る論理的基礎であるが、紀行文の價値、文學的作品としての價値は、如何なる要素によるかの問題が必要になつて來る。

紀行文が文學的作品であるとすれば、それは文學としてもつ一般的法則を遵守しなければならない。そして決して繪畫的描寫のみに耽らないようにしなければならない。そして或時は動的に或時は暗示的なそして直截な比喩的な描寫を試みなければならない。勿論、紀行文は散文でないが故に、抒情詩に於けるが如き嚴格な制約を要しない。しかし藝術的良心を以つて一字一句をもかりそめにしないと云ふ態度は必要である。其の意味に於て吾吾はフランスのフローベルの創作的態度を想ひ起す。フローベルは彼の姪の記憶によれば一つの形容詞を入れる際にも其の適當であるかないかに苦心し、其のもつ響や心像の適不適を考ふることに心を費やしたと云はれる。そして彼は自己の文章を心ゆくまで訂正し簡潔にしたと云はれる。このやうにして彼の「ボヴァリー夫人」は出來

上つた。吾々は斯の如き作家が日本に於ても決して少くないと思ふ。このやうに訂正したか、しないかは分らないが、吾々は藤村の自然描寫、例へば八ヶ岳裾野の荒凉たる景色の描寫などに學ぶべきものゝ多いことを見出す。吾々は眼に映ずるすべてのものを選擇なく煩雜に描寫せんとする態度は決してよくないものであり、そして散文に於ても言語の響き、聯想を尊重しなければならないことを感ずる。斯の如き藝術的良心をもつて書かれた紀行文に於てのみ、文學としての價値が見出される。

斯くして山岳文學は主に抒情詩と紀行文とに限られるべきものであり、小說に於ては主題の範圍は可なり限られ、劇に於ても等しく限られるものであることを斷言し得る。そして其の意味に於て山の小說や劇は、海の小說や劇よりも小さい領域をもつものであることを信ずる。從つて、由來、山の文學は詩と紀行文とが多く、小說や劇に於て少ないのは當然のことであり、何等不思議でないことを信じなければならないと思ふ。

扉について

扉の寫眞『高原』は秋の美ヶ原であり角田吉夫氏の撮影にかゝるもの。二人の前方は田部重治氏である。

（編　者）

景觀描寫としての山岳寫眞

田中　薫

〔第一部〕

一、山岳寫眞の美しさ

雜誌『霧の旅』(第八年、二十二號、昭和二年二月)に「山岳寫眞の話」と題し武田久吉博士が山岳寫眞に就いて有益な指示をされた。

これは恐らく我國に於ける山岳寫眞の劃期的な文獻として何時迄も思ひ出されるものと思ふ。その當時はまだ一般登山家の寫眞術が幼稚であつたのと、その觀賞に於て所謂藝術寫眞が全盛を極め、暗調或は軟調の繪畫的なものが喜ばれてゐたので、武田博士の說かれるフィルターの理論等を判らうとする人は極く少數に限られてゐた。それで、一般には餘り反響が無かつたと云へるが、それだけ此の一文は啓蒙的價値が高かつたのである。私もそれよりずつと以前から山の寫眞を寫してゐながら、ガンマーフィルターとかGフィルターとか云ふ類に手を出す事は何んとなく臆劫に思はれた。

實を云ふと、之は臆劫であつたからでなく、本當の良い山岳寫眞が如何なるものであるか未だ判つてゐなかつ

たのである。從つてそれまで觀賞し馴れた繪畫に近いものを美しいと見、繪畫的、印象的なもの以上に深く求める所が無かつた事に依る。

山岳寫眞とは何かと云ふ點に就き、武田博士は「假令雪、霧の變幻はあらうとも何れの山と云ふ事が明瞭に判り、出來得べくんば位置と季節とを正しく知りたいもの……」と述べて居られる。(前掲「霧の旅」參照)

斯うした說明的に完全な寫眞が果して山岳寫眞の全部であるか否かは斷言出來ないが、從來焦點の固い、一から十まで寫し盡した樣な寫眞が高級品でないと見られてゐたのは大なる誤であつたのである。

元來山岳寫眞は一般的には趣味寫眞であるから、美しいもの、觀賞の對照となり得るものでなければならない。之を決するものは美の標準であるが、此の標準が最近大變遂つて來た事は、新しい山岳寫眞が生れ出る根本の契機である。

自然觀賞の自由が擴大された結果、近來自然描寫の手段としての寫眞の立場は、極めて自由でなければならぬと云ふ思想が行はれる樣になり、所謂藝術寫眞なるものも面目を一新した感がある。

まして說明的或は記錄的價値を多く認む可き山岳寫眞にあつては、美しさの標準がその目的たる記錄の完全さ自體に存すると云ふ風に見られる樣になつた事は當然の事である。

浪漫派の作者がヴェリト等を用ひて山の襞を故意に單純化し或は山體の全貌を避け、「山肌の一部を花や木や岩角の背景として平面的に取り扱つたり」(武田氏)するに對して、合理的な自然派は完全體の寫實主義として現れてゐる。

偶然眼に入つた自然の美しい一部を活寫する事も自然派の仕事ではあらうが、部分の卽興的描寫は決して純粹

なる完全なる記錄とは云はれない。

ギリシヤ、ローマの美術が美は斯くある可しと前提し、それに到達するやう合理的に構圖された樣に、山岳の描寫もこれは何山なりと云ふ前提があり、その美しさの自然科學的根據も判つてをつて、然る上でこの前提を生す可く合理的な描寫法が工夫せられねば本當でない。

斯うして生れた完全なドッシリとした說明畫が、漸く美しいと云はれる樣になつたのは何んと云つても時代の力である。

二、實用と趣味

一般登山家に於ける山岳寫眞は研究資料ではなくて趣味である。だから美しいとか懷しいとか兎も角その印畫は愛翫の對照となる可きものである。ところがその趣味の印畫が霞の樣なものでなく、完全な實體記錄であるとなれば、之は同時に研究資料でもあり得るのである。娛樂家の弄ぶものと學者のいぢるものとが同一物であることは萬事に好都合である。結局人間の趣味が實用の目的に合致し、所謂「用の美」を見出す事になるのである。

「山岳」誌上の挿圖は昔から說明的なるを尊重して來てゐる。併し長い間に矢張り上述の變遷は認められるもので、雲や霧を避けて忠實に寫したものやパノラマ風に寫したものが、近年著しく多くなつてゐる事は明かである。昔の「高山深谷」時代の山岳寫眞が今尙ほ懷しまれつゝあるにも拘らず、而も彼の道を踏む作家は次第に減じつゝあるのである。

近年に於ける山岳寫眞集の中、武田久吉、小林義秀兩氏著「富士山」や冠松次郎氏著「日本アルプス大觀」等

は實に出色で且つ斯界を指導するものであらう。

三、超肉眼的描寫

說明が徹底するとアラが見えて來る樣に、說明寫眞も行き屆くと肉眼で見えぬものまで現れ、肉眼で感じ得ぬ感じまで現れる事になる。近代人の探究慾は趣味寫眞の上にも現れて、この種のアラの見える寫眞を却つて美しいと云ふ樣になつた。

軍事上必要とされた赤外寫眞が、趣味家の弄ぶものとなつたのは此の傾向の現れと見られる。ラッテンのGフィルター以上の濃度を持つ所謂コントラストフィルターに依つて、肉眼の能く及ばぬ程の遠景を撮影する事が山岳寫眞家の間に行はれ出した。新聞流に云へば一九三三年の山岳寫眞の動向は斷然赤外寫眞である。

四、景觀學への寫眞

沈默の山脈、鬱々たる原始林、悠々たる大河の流れ等々の風景は原始景 (Urlandschaft) と呼ばれる。その自然の中に人が來り住んだ。人口、聚落、營造、樣々の人爲が分布して自然の間に織り込まれる。政治、經濟、產業等々の諸機構が自然の隅々まで行き亙る。

此の有樣を鳥となつて中空より瞰る。するともうこれは原始景とは丸で異つた文化景 (Kulturlandschaft) である。斯る景觀の地域關係等を取扱ふ學が、近年著しく擡頭して來た景觀學 (Landschaftkunde) なるものである。

景觀の取扱ひには分析もあり綜合もあるが、記錄描寫の方法として最も有力なるものは高所より撮影した寫眞

である。航空寫眞や山上よりの俯瞰寫眞等が尊ばれる所以である。近年現れた此の種の寫眞集の中最も好評を博してゐるもの二三を左に擧げて置く。

小田内通敏著　日本風土と生活形態、航空寫眞による人文地理的研究、(鐵塔書院、昭和六年)

Nikolaus Creutzburg : Kultur im Spiegel der Landschaft. (Leipzig 1930)

George R. Johnson : Peru from the Air. (American Geographical Society, 1930)

Comitato Geografico Nationale Italiano : Essay of an Atlas of Italian Landscape. Published in occasion of the International Geographical Congress, Cambridge, 1928. (Touring Club Italiano, Milano, 1928)

Emmanuel de Martonne : Les Grandes Régions de la France. (各冊 Payot, Paris 1926—27.)

これ等に依つて景觀寫眞とは、如何なるものなるか、そしてそれが如何なる說明に役立つかが判ると思ふし、又技術上から見て如何なる高さから如何なる角度に寫す可きか等といふ事が明かになると思ふ。

一般に言はるゝ處によれば、測地の目的で行はれる航空寫眞の樣に眞上からの撮影は、山岳を全く地圖の如き平面に描寫するから、高低を知るに不便であり山岳寫眞の感が出ない。理想的には空中より四十五度位の俯角を以つて撮影されたものが良いと云はれる。

地形圖を見取圖式に飜譯して而も正確さを保たせたものに、ブロック・ダイヤグラム (Block diagram) 又は地理學的圖形 (Geographical diagram) と稱せらるゝものがあり、地形學の說明に多く用ひられてゐるが、之が四十五度位の俯角を以つて作られる處を見れば、寫眞に於ても同樣のものが良い筈である。

但しこれは地形説明を主とした場合の話であつて、山岳寫眞としてはこれでは既に山を平に寫し過ぎてゐる。又實際山上から寫す場合は勿論こんな急角度はとれないのである。航空寫眞には航空乾板が用ひられ、二三倍の黄色フィルターが用ひられる。我陸地測量部の測地用航空寫眞は此の程度のものであるらしい。或は赤外乾板に增感法を施して瞬間撮影を行つてゐる。

山上より三脚を立てゝ靜寫する場合はタイムの撮影を行ひ得るから、赤外乾板に赤色の濃厚なフィルターをかけて一秒とか二秒とかいふ露出を行ふ。さうすると足許から百粁位の遠方までそれこそ一木一草餘す處なくと云ひ度い程克明に描寫され、景觀の外貌は遺憾なく記錄される。

これは云ふまでもなく赤色フィルターに依り短波長の紫外線乃至可視光を遮斷し、長波長の光線のみに依つて撮影する結果、肉眼的色價以上に表現され、且つ遠景も近景も寫度が略〻同一となるにより、印畫に露出の過不足による濃淡を現さぬ等の特色を有するからである。

山岳地に於いてこれを試みれば林相は明瞭に記錄され、遠山の地形が陰影を施した地圖の樣に現れ出る。

但し赤外寫眞は全整色（パンクロマティック）以上に過度に色價をコントロールしてゐるものであつて、色價の上で不自然感を生ずる點は多少忍ばねばならぬ。

我國の山岳は今日までに殆んど餘す處なく撮影し盡されてゐる。併しそれは餘りに部分的である。穗高や劍の岩壁とか大きくてせい〻〻富士や乘鞍の一山のみが寫されてゐるに止り、山脈寫眞等は稀である。日本アルプス全體とか、更に數個の山脈の雄大な排列、日本の地形は斯くの如しと示し得る樣な寫眞は殆んど寫されてをらない。

私は先頃霧ヶ峰の車山の上に立つて實に雄大な日本的景觀に接した。日本北アルプス、南アルプス、木曾山脈に加へて北は妙高山から淺間、八ヶ岳、富士の諸火山を加へて餘す處なく見え渡つた。私はこれを全體として記錄したい希望にもえたが、それは私に赤外線寫眞の手段あればこそであつて、手段あるが故にこの美に打たれたとも言へよう。事實今まで斯くも強くパノラマに心惹かれた例はなかつたのである。

私は日本の山岳は今や廣地域の全體として、景觀的に見直さる可き時代に入つたことを感ずる。斷層崖は斷層崖らしく、地壘山脈は地壘山脈らしく、盆地の所在、都市の介在、裾野の栽培景、人文の山地へ分け登つて來る有樣、更にこれ等の四季の變化等は人生の持つ風景として充分の價値を持つものと云へよう。

國立公園等と云ふものも斯うした意味で美しさが認められ、今度我國に於ても愈ゝ設置せられるに至つた事を喜ぶ可きである。これに原始景を求めるは誤であつて、山野、林泉、山民の生活等、その全機構を觀賞すべきものである。

アメリカの國立公園や、スキスを全體として見た場合等、皆此の類である。原始景觀の美しさの價値高き事は云ふまでもない。故に現今日本で問題となつてゐる國立公園の設備は、既に原始景を失つた地方に於て文化景を出來るだけ其の初期の狀態に止めんとする企に過ぎない。スキス等にもその例があるが、原始景の絕對的保存も又國立公園の重大なる使命でなければならない。我國に於ても千島の一島位は是非共原始景國立公園として指定されたいものと思ふ。

五、山岳記錄の再吟味

今まで述べた處に依つても山岳寫眞と山の見方とに關する私の見解の大體を知つて戴くことが出來たと思ふ。

そこで山岳の一般的記錄とは如何なるものであるかを再吟味し、寫眞との關係を明かにする必要を感ずるのである。それは山岳寫眞は屢〻山岳記錄の挿圖として用ひられ、補助的、修飾的の役目を果すものだからである。

此の事は自ら稿を新にして論ず可きであるが充分に練つたものでないから、山岳寫眞研究の一部として簡單に述べて見たいと思ふ。

いつたい登高の精神の中には高きより廣きを展望する慾望が力强く働いてゐる。頂上に近づいた時息の切れるのも構はず自然に歩度の早まるのは、普通日本の山では此の慾望の働きと思はれる。高きに登つて初めて他山の高きを知るといふ樣な教訓めいた事も事實我々が感ずる處である。

此の展望の慾望を科學的に發展せしめると、結局地形の觀察に到達するのである。故に地形學が發達せぬ以前から登山家の興味は地貌にあつた。

實際地形學が獨立科學として認められる樣になつたのは比較的新しい事で、地表面の比較形態學と云ふ考へが普及してからの事である。古くは地形は地質の表層部として取扱はれた。故に歐洲でも山岳の風景を科學的に說明する場合は、多く地質及び地帶構造上の知識に依つたのである。Lord Avebury の「英國の風景」や「瑞西の風景」等は此の例である。

これと同時に他方には登山家が多趣味と根氣とに依つて、苟くも山岳に關する限り悉くを記載すると云ふ態度があつて、それが登山記に現れてゐる。その中でも山誌、登山術、地質、地形、動植物、山民の生活、傳說、挿話、繪畫、文藝等を取り上げたものが多いのである。

Edited by John Ball : Peaks, Passes, and Glaciers. A Series of Excursions by Members of the Alpine Club. 1859 の如き英國山岳會創立當時の古しものから Deutscher und Österreichischer Alpenverein : Die Erschliessung der Ostalpen 1894 を經て W. A. B. Coolidge : Alpine Studies 1912. に至るまで十九世紀中葉以後の大抵の登山家は此の種の態度を取つて居り、その著述の風格の相異は結局著者の趣味の偏性によるに過ぎぬと思はれる。

斯る態度はクーリッヂの「山岳研究」Alpine Studies であり、今西錦司氏の云はゝ通り（會報昭和八年一月號）山誌 Orography ではないのである。

山誌と云ふのは山岳に關する單なる羅列的記載を指し、學でない場合多く、高頭式氏の「日本山嶽志」の如きを擧ぐ可きであらう。

山岳研究が學的發展を遂げるとすれば、その本來の性質上自然科學、文化科學の總ての分科に觸れるが故に、山岳學といふ新なる一つの綜合科學の成立を認める事の可能が豫想される。

Alpenkunde はその一つの既成品であつて、山岳學の主要部を占めて良いものであると思はれる。アルペンクンデは歐洲に於て最も熱意ある青年登山家、少壯學徒に依つて發達し、今もその研究の過程にあるもので、山を對照とする自然科學と登山術との相關的研究である。そしてその知識と、經驗とがヒマラヤや極地の探檢に利用されてゐるのである。

但しこれは高山を主とする研究で、人間にとつて困難なる登山術を要する場合にのみ發達し、且つ又人文地理的方面の研究を餘り取り入れぬ點等より見て、一般的に山岳學と呼ぶ譯には行かぬものである。高山學と呼べば

寧ろ妥當であるだらう。

我國の如く高山學の對照となる程の六ケ敷しい山を持たず、而も中山性の山岳が普遍的に分布してゐる處では、一般的山岳學の要求は自然要望せらるべきものであらう。

今西氏が指摘された樣に我々は海洋學に對して、山岳學なるものを直ちに想像することが出來るのであるが、文字の對立のみで直ちにその內容の存立を決する譯には行かないのである。果して山岳學なるものは存立し得るであらうか。此の事に就いて少しく考へて見たい。

海洋學 Oceanography は文字上の對立から見れば山誌 Orography と同一視される。併し事實に於て山誌は前に述べた樣なものであり、海洋學は現今では寧ろ「海の物理學」である。湖沼學 Limnology 河川學 Potamology 等も物理學、化學、生物學を主としてをり、寧ろ其の初期に於て却つて綜合的研究をなし、後、次第に深く一部を掘りさげてゐる傾向がある。

陸水學が此の點綜合研究の學の如く思はれる事は筆者も今西氏に同感であるが、此の學も人爲の研究としては、水產養殖、水力電氣、一般水利事業等の方面を加味する他、我々が山岳を懷しむ樣な意味に於て、果して陸水の姿を心の表面に浮び上らせるが如き綜合研究が行はれるか否か疑はしい。

海洋學の Meereskunde なる語は高山學 Alpenkunde と字の上で對立する。併し內容は前述の如くで、對立的でない。

要するに以上列擧した一見山岳學に類似する如き諸學は、何れも登山行爲の如き人生の一般趣味行爲、スポーツ精神、肉體の勞働を伴つてゐないものである。その人的要素は、研究行爲以外に存在しないものである。故に

特別の必要なき限り綜合研究とはなり難く、假令なり得たとしても、今西氏の言をかりて云へば、海洋學を研究しても「……その海洋と、私達の眼に映り頭に畫く海とは、全く似もつかないものになつてしまう」のである。

山岳學は登山行爲（そこに山に對する思慕と追想とがある）を中心としてのみ發達し得る獨特無類のものでなければならない。强いて類を求むれば廣義の高山學があるばかりである。

さらば方法論は如何と云ふに、此處で此の項の最初に述べた地形學に立歸らねばならない。展望慾から展望學の要望が起り、地形學の發達に伴つて山頂よりの地形學的觀察の興味が擡頭した。

地形學の取扱ふ自然景觀の中に、人口、居住、生産、政治、經濟、交通等の機構が織り込まれ、殊に山地には、山麓の居住景、扇狀地や、山谷の栽培景、炭燒や樵夫や、牧夫の人生等が見られ、これ等を全體として新なる文化景觀が生れる。そしてこれを取扱ふものが景觀學である事は前項で述べた通りである。景觀學は本來展望性の學であるから、展望慾を持つ登山に關係深かる可きは明かである。

私は景觀學的觀察方法を以つて山岳學の方法論を解決せんとするものではない。山岳學には又非展望性の分析が必要である。只、今まで山岳觀に於て殆んど顧みられなかつた景觀學の方面を取り入れる事が、山岳學への一基石を置く仕事であり、少くとも我國の山岳觀の行詰りを打解する一方法であると信ずるものである。

そして私は登山家の情操と景觀學の客觀性との間を縫ふ糸として近代的山岳寫眞の價値を認めるものである。

〔第二部〕

一、私の山岳コントラスト撮影

私は近來此の景觀の記錄と趣味の山岳寫眞の兩方面から、コントラスト撮影法を試み愉快なる結果を得つゝある。此の際これに就いて二三私の經驗を記して同好の士の指示を得たいと思ふ。

先づ理論や一般的記述は專門の書物に讓らう。此の爲めには幸、日本山岳會理事で寫眞家なる額田敏氏の「山岳寫眞のうつし方」(玄文社、昭和七年十二月)がある。此の他、佐和九郎氏著「露出の祕訣」(アルス。昭和五年)及び「整色寫眞の研究」(アルス。昭和七年)等が大いに參考となることだけを記すに止めて置かう。そして此處には私の拙い工夫のみを列擧する事とする。

二、フィルム及び乾板

今までにコントラスト撮影用として私の試みたものは、アグファのパンフィルム——ロール並にパック(全整色)。同イソクローム・フィルム——ロール並にパック(優整色)。イーストマン製ライカ用パンクロマティクロール・フィルム(全整色)。イルフォート製パンクロマティック・フィルム——パック(全整色)。同パンクロマティック乾板(全整色)。イーストマン製エックストリーム・レッド・センシティブ乾板(赤末線感性)。東洋赤外乾板(赤末線感性)。オリエンタル製パンクロマティック乾板(全整色)等である。

何れも手札判が最も得易く取扱ひ易いので、カメラは使ひ古したレフレックスと交換にヘリアF、四・五附のフォクトレンデル乾板パック兼用蛇腹二段伸の中古品を手に入れて用ひてゐる。以前には私は山ではロールフィ

ルムもの以外は殆んど用ひなかつたのである。

整色性の強い事ではアグファのパンフィルムは、イルフォードのパンクロマティック・フィルムに勝つてゐると思ふが後者には肉乘の良いといふ美點がある。これはたしか一九二九年私の滯英中に創製された樣に記憶するが、パックは構造に不手際があつてか、引紙が途中で離脫してフィルムが動かない等の失態が數回あつた。今は勿論改良されてゐるであらうから實によい材料と思ふがどういふものか日本の市場に來てゐない。アグファのパンフィルムは名刺判以下は多いが手札は目下中々手に入らない不便がある。

アグファのイソクロームは全整色性ではないが、中々良い感光性を持ち日本の市場に豐富な點も好都合である。又フィルターに對する露出倍率も割合に小さく高速度露出に堪へる點も良い。イーストマン製ヴェリクロームは之に次いで良いがコントラスト撮影材料とは云へまい。

乾板ではイルフォードのパンクロマティックが廣く行はれてゐるが非常に良い。國產のオリエンタル製はポートレイト・オルソ乾板（優整色）の方は好評だが、パンクロマティックの方はまだ不評である。

赤末線乃至赤外線乾板では數種ある樣だが、私はイーストマンのエックストリーム・レッドと東洋赤外乾板の二種しか用ひた事がない。前者は非常に良いが新鮮を得るに難い。生命の短い此の種の材料はどうしても國產に待ちたい。私は輸入されたばかりといふ品を取り寄せて用ひたが、それでも時に周緣にカブリ又はムラを生ずるものが澤山あつた。古いものは感光度もおちてゐる筈である。

撮影の時周緣三分位は切りすてる覺悟で餘裕を殘して撮影すべきである。パノラマ撮影の時は少くとも四分位隣接畫を重複させて寫さねば安心出來ない。

東洋赤外は新鮮な點は良い。併し陸軍の奬勵に依つて近年製出の機運に至つたばかりのもので未だ充分滿足すべき材料とは云へない。斑點を生ずる事がよくあるしコントラストも充分と云へぬ。將來の大成を期待する次第である。

三、フィルター

理研のウルトラヂン、アグファ、イルフォード等種々あるが、私は同一製造所の品を用ひたい爲め最も製品の豐富なラッテン・フィルターを用ひてゐる。

ラッテン製品百二十余種に就いての詳しい説明は左の書を參照せられたい。

Wratten Light Filters. (Eastman Kodak Co., Rochester, New York)

私は數ある中よりK_1、K_3、G、T、A、F、X_1の七種を選んでゐる、尤もK_3は近年製造を中止したから今後はK_2を以つて之に代へて良いと思ふ。

感光材料の發達に從つてフィルターの種類に變動あるは當然である。

佐和九郎氏に依れば右記七種のフィルターの倍率は左の如くである。私は之に從つて略ゝ成功してゐるからその儘掲げて置く。

	パンクロ全整色	イソクロ整色	ヴェリクローム級優整色	普通フィルム並整色	人工光パンクロ
ラッテンK1（6號）	二・〇	二・〇	四・〇	五・〇	一・三
ラッテンK3（9號）	四・五	六・〇	一一・六	一五・〇	二・五
ラッテンG（15號）	五・〇	八・〇	一六・〇	二四・〇	三・〇
ラッテンT（16號）	六・〇	九・〇	二〇・〇	三〇・〇	四・〇
ラッテンA（25號）	一二・〇				六・〇
ラッテンF（29號）	二五・〇				一〇・〇
ラッテンX1	四・〇				四・〇

普通山岳用としてGは便利なフィルターである。イーストマン社の説明書でも山岳用としてGを推賞してゐるし前記武田博士の一文の挿圖もGが用ひられてゐる。

X_1は新製品で綠色のものである。近時パンクロマティック乾板の綠色感度が強くなつたので、此の性質を利用すべく生れたもの。倍率の小さいのが利點である。

四、フィルターと乾板との組合せ

整色性の程度に依る乾板の種類とフィルターとの組合せは被寫體の性質、色彩、遠近等の條件に依つて定まる。

（イ）不自然感を起させぬ程度に於て夏山の森林、山肌、雲影、雪山を寫すにはイソクロームにK_3を用ふる。快晴、遠景ならば1/25秒以上で寫せるから便利である。同時にこれが手持撮影の限度でもある。

（ロ）一般山岳地撮影、人物ある場合等はイソクロームにK_1を用ふる。私は平時K_1のゼラチン製を圓形に切り抜きレンズの間に入れっぱなしにして置く。まことに便利である。露出倍率は二倍だから手持撮影自由で仕事が早い。

（ハ）不自然感を忍んでも説明上の必要から林相、山肌、雲影、雪山の表面、遠山等を寫すにはイソクローム又はパンクロマティックにG又はTを用ふる。三脚を立て最も丁寧に寫す。

（ニ）林相、紅花、極遠景、俯瞰地形等の撮影には赤外乾板にA又はFを用ふる。大抵Aで滿足の結果が得られる。Fをかけてもさまで著しい効果は認められない。それ故R（70號）等は試みたことがない。

五、赤外寫眞と引伸印畫

赤外寫眞の原板は甚だ硬調に出來上る。それ故これから良好な引伸印畫を作る事は中々困難である。特に引伸を目的とする時はロジナルでタンク現像でもすれば比較的好結果が得られる。赤外乾板は普通乾板より粒子が粗い事も一原因である。同一畫面に陰影の多い時はその陰影は引伸し印畫ではハイライトのディテールを出す犧牲となり漆黑となつて現れ甚だ醜いものである。私の考へでは赤外寫眞は引伸を行はぬのを原則としたい。故に手札判を採用してゐるのである。

六、露出時間

全く初歩の人には無理であるが多少寫し馴れた人ならばフィルター無しの場合の露出時間を想定し、これを所要のフィルターの倍數に依つて變化させて行けば簡單である。全く機械的の仕事で上手下手はない。

フィルターの倍數表は大抵の寫眞書に出てゐるのを用ひれば良いが、フィルター乾板の組合せの上で完全なものはないから、自分の經驗を以つて表を作るか作例を覺書しておけば之に越した事はない。

赤外乾板に對するフィルターの完全な倍數表は私は見た事がない。それ故人の經驗や自分の作例に就いて個々に注意してゐる。東洋赤外乾板の説明書には左の如く記してある。

フィルター無しで寫したのでは普通乾板と何等選ぶ所がない。

フィルターはラッテン十五號(G)。十六號。二十一號乃至二十九號。アグファ五號。理研五號。六號。七號。或はこれ等に相當するものであれば何んでも宜敷しい。就中ラッテン十六號(フラヴァジンT)。二十一號(モノブロモフルヲレッシン)。二十二號(E2)。二十八號(シネレッド)等は赤末線をよく透過せしむるを以つて至極適當である。露出は以上何れのフィルターを使用するも普通赤札乾板の二十倍乃至三十倍を要す。即ち晴天、レンズの絞りF、四・五にて普通の開景に對し約十分の一秒乃至十五分の一秒である。ラッテン八十八號(ウッド氏の赤外線フィルター)又は理研八號では約一秒である。

之はイーストマンのエックストリーム・レッド・センシティブ乾板に對しても適用出來る樣である。私は前述の如く赤末線乾板に對しては殆んどAのみを用ひるから、それだけに就いて云ふと遠景撮影に於て二十倍見當が

毎時も適當であつて三十倍は過度となる場合が多い。尤も露出過度は不足よりはよいもので臭素加里で押へて徐々に現像すればさまで差支はない。

それから注意すべきは紫外線乃至短波可視光線が遮斷されてゐる事であるから、遠景も近景も略〻同一の露出を要求してゐることである。遠景の普通撮影の場合の露出時間を基礎として露出を行へば、近景も殆んど露出不足とならず自然に適當の濃淡で現れて來る。又晴天と曇天の場合の露出時間の差は普通寫眞の場合より少ない樣である。俯瞰地形の撮影の時、雲影の多いのは成る可く避けたい。そして日光直射の部分を標準として露出を變へる樣にする。

結果から見て日光を背にして寫す場合が最も良い。次に明い雲である。逆光線は赤外寫眞では不結果を來す事が多い。陰影が多くなつて說明性を失ふ。

七、現　像

タンク現像が良いと思ふが私は未だ研究中だから皿現像を主としてゐる。エックストリーム・レッド乾板を現像するにオリエンタル製MQ現像藥で約三分位を適當とする樣である。五分以上は現像過度となる。

普通の乾板やフィルムだと少し裏面に黑影が窺はれる位まで押した方が、密着燒原板としては肉乘が良いものであるが、此の乾板では畫像が少しでも裏面から窺はれる時は既に現像過度である。全く裏面が白い中、時間が來たらサッサと引上げて處理せねばならぬ。

パノラマ撮影の原板はタンク現像により均一に現像すべきものであらう。何れにせよもと〳〵赤外寫眞はコン

トラストを要求するものであるから、タンクにもMQを用ひればよくわざ〳〵軟調藥を用ふ必要はあるまい。ロジナルは可成軟調に仕上げる事が出來る。

安全光はラッテンの三類、パンクロマティック用の濃綠色硝子を用ふれば都合がよい。最初少時ずつと遠ざけて取扱ひさへすれば後現像の進行程度は此の安全光に近づけて透視しても事實上差支はない。

七、撮影の工夫二三

山で乾板を取扱ふ事は昔は何人もやつた事であるがフィルム寫眞術の發達の爲め現代の人は却つてこれに不馴である。事實多少面倒である故一應熟練してをく必要がある。

（イ）光線の漏洩

手提カメラでは乾板取枠は大抵金屬製片面か木製兩面である。そして何れも蓋は引き放つ事の出來るものである。普通蓋を引き放たず露出を行へば光線の漏洩はないものとされてゐるが絶對信用のおけるものではない。まして多少古くなつた取枠に於てをやである。原因は主として口元の毛が擦り切れるとかネルとか云ふ事であるが常に之を更新させてをく事は實行困難である。手札型以下の原板では少しでも光線を引けば致命傷となる事を考へる時、ロールフィルムか組立暗函の引き放てない取枠以外は信用せぬ事が安全である。

赤外寫眞撮影等の爲めに三脚を立てゝ引蓋を抜き光線の具合（遠景撮影には日射の平均を待つ事が多く、山地では無影等の良き變化を待つ事が多いから一層此の事を痛感させられる。

私は黑羽二重に赤絹を縫ひ合せて風呂敷樣のものを作り置き、これをカメラに被せて露出を行ふことにしてゐ

る。黒布の一端に紐をつけてカメラの前方に結ぶ様にすれば風の爲めに吹き飛ばされる事は防げる。

パックフォールダーに對しても同様黒布を用ふるが安全である。併しフィルム寫眞家は手早い撮影を希望する者であるから別の工夫を要する。ホールダーの蓋を引き抜き、その口元を万瘡膏で塞いでをく。絶對安全である。焦點硝子をのぞく事は出來ぬが距離は距離計を別に備へて計れば良い。一々引蓋を拔く手數もはぶけ万一拔く事を忘れる虞もなくなる。

(ロ)乾板交換袋

市販のものは大抵赤窓や眼穴がつけてある。之ではパンクロマティックや赤外乾板は取扱へぬ。買つて來たらこれ等の個所を全部塞いで用ふる。手さぐりで充分交換出來るものである。フィルム、乾板類は一切此の袋に入れてルックサックに收める事とすれば散逸せず中味も保護されて良い。

(ハ)三　脚

金屬製五段六段伸しのものもあるが繼ぎの多いものは支持力が弱い。木製も一時大いに愛用されツアイスイーコン製のもの等中々良いと思つたが重量も決して小でなく支持力も強いとは云はれない。三段伸し位の金屬製の單純なものが良い樣である。

山では灌木、雜草等の中に立てる爲め丈高い程便利である。併し雪中等ではよくもぐるから丈高い三脚でも實際は低いものになつてしまふ。で私は雪山には輕い極く短いものを持つて行く事にしてゐる。金屬製二段伸し、疊んで六寸位、伸して一尺五寸位のもので卓上用の三脚であらう。支持力は甚だ強く、强風に對してもカメラの動搖は殆んど感ぜられない。

高所の開景撮影には雪上にルックサックを成る可く平につぶして置くその上に此の三脚を立てゝ撮影する。或は岩上の小面に立てる。極めて安定である。

(ニ)雲　台

三脚の頭頂に附けてカメラの回轉台となるもの。これは無論無くてすむ。粗惡なものなら無い方が良い。私は先年ベルリンで大變良いものを見付けたから使つてゐる。ツアイス・イーコンのデュオタール(Zeiss Ikon Duotar)である。金屬製で堅牢無比、二個の齒車に支えられ螺線に依つて前後左右のアオリが自由に出來カメラを直下に向けるも支持力は變らない。(植物撮影には是非必要の事である)

岩上の小平面で三脚の立場の一つしかない樣な時、雲台によつて位置を變へられる事は實に想像以上の便利がある。パノラマ撮影の時は勿論の事である。

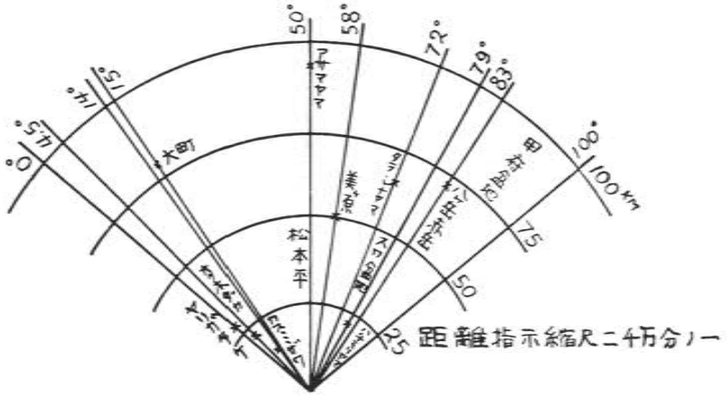
(ホ)フィルター

フィルターはラッテンのゼラチン製は大型一枚一圓五十錢位のもので、之を圓型に切り拔きレンズの間に入れて用ふれば極めて安價に用を達する事が出來る。私はK_1等は此の式にしてレンズに入れ放しとなし一般撮影を行つてゐる。併し度々出し入れするとゼラチン面を毀損する處がある。雪中雨中等で取り落しでもしたらおしまひである。故に硝子貼合せに如くはない。

信用ある寫眞店にてバルサムで手形面を持つ二枚の硝子に貼合させる。製造所で貼合せたものは非常に高價であるが內地でさせれば三圓位で出來る。別に金屬製の支持枠を作り此の硝子貼フィルターを數種取り代へて用ふると便利である。

乗鞍岳最高點東面下方より視角略百度の展望

田中　薫



フィルター枠螺込式、差込式、被せ式等あるが差込式は落ち易く危險である。

八、カメラの種類

名刺、手札判位の乾板の使へるもの一個。レンズはF、四・五位のもの。之はゆつくり落付いて寫すに用ひルックサックに收めて行く。別に卽興的に寫す目的で極小型を用意する。正副二個携帶が先づ遺憾なき所であらう。

正機としては英國のニューマンガーディヤやアダムスやシンクレヤ製等數百圓もするものがあり、學術探檢用に用ひられてゐる。凝つた人は之でなければいけない樣にも云ふ。併し私は百五十圓位までゞ買へるドイツのゲルツ、ツアイス・イーコン、ホクト・レンデル製等で充分滿足な結果が得られると思ふ。レンズは英國製も中々良いが引伸しを常套手段とする今日では描寫力の尖銳を尊び、テッサーF、四・五。ダゴールF、六・八。ドグマーF、四・五。ヘリアF、四・五等が普通によいと思ふ。

單玉として用ひられる用途の多いものもあるが感光材料の進歩した今日、レンズで凝るより乾板フィルムで凝る方が効果が多い。

テッサーにはディスタール・レンズをつけて約二倍大の望遠効果が得られるが此の程度なら引伸しで間に合ふ。三倍か三倍半位の倍率の爲めにわざ〳〵重い望遠レンズを用意するも如何かと思ふ。微粒子乾板、フィルムと微粒子現像とが得られる今日隨分引伸しも自由に出來るからである。副機としてはライカのD型や最近出たコンテックス等を第一に擧げねばなるまい。ライカは首に吊す革鞄に入れて上衣の襟の中にかけて行けば如何なる岩攀

り、スキー滑走中にも妨げあるまい。以前アトム・カメラを兵士の彈藥函型の鞄に入れてバンドに吊した事等思ふと隔世の感がある。ライカ望遠レンズ用の距離計は別に買つて持つてゐても何かに便利である。

ベスト・カメラ位で我慢する人にも今のベストは決して昔のベストではない。フィルムにはイソクロームもヴェリクロームも、パンフィルムもあるのだから充分良い引伸ばし原板を作る事が出來る。

插圖說明

本年一月二日乘鞍岳、位ヶ原上部の急斜面上よりのパノラマ撮影である。ヘリア附ホクトレンデル・カメラ。正午、快晴、ラッテンAフィルター、エックストリーム・レッド・センシティブ乾板、絞りF9、$\frac{1}{50}$秒露出、岩上に小型三脚を立てゝ寫す。乾板は稍古く周緣三分位切捨て。

此の圖に於て技法上最も注意す可きは左半分と右半分の調子が異る事である。右半分は逆光線に近い狀況を餘儀なくされてゐる。故に甚だしく度强くなり陰影部のディテールが失はれてゐる。赤外寫眞に於て最も六ケしい事はこの欠點を緩和する事であると思ふ。

（昭和八年一月）

東郡大山塊（紀行と覺え書）

鹿野忠雄

本篇は一九三一年の夏に行つた此の山系への山旅の紀行を發表し、且從來の考證觀察の結果を一先づ記錄する。

紀行　東郡大山塊の縱走

覺え書　東郡大山塊の領域――地質地形學的觀察――動植物の觀察――附近蕃人との關係――山名其の他の地名――登路

東郡大山塊の縱走

一九三一年九月一日、郡大社のブヌン族蕃人フンレブ・タケシチバナン、バッケ・タケシタルマン、リ・タケシタランの三人を連れて郡大駐在所を出發、三日を費して、東郡大山（一一八九五尺）、ウタベ山（約一一五〇〇尺）、東巒大山（一一四三六尺）、リ、ヤハ山（一一三五六尺）、リハシバン山（一一〇七三尺）、マショゾカン山（一〇七一二尺）の諸峯（東郡大山を除くの他は何れも初登頂）に登攀して、マシタルン駐在所に拔けた。本篇は其の紀行である。

一、まへがき

此の人間の小さな存在を以て山の意慾は如何して之れを窺知し得よう。然し所謂世の知識から遠ざかり人の訪

れない事を以て、若し假りに山の不遇とするならば、台灣に於て東郡大山程惠まれない山群は又とないであらう。高距に於ては其の南に隣する秀姑巒山脈に少しく劣るとは云へ、一萬一千尺を拔いて二千尺に迫る雄峯は指折り算へても優に十指に餘る。東郡大、東巒大山の名は已に台灣に興味を持つ山岳家に有名である。然し新高山頂より東北の方に望まれる此の脈々たる山波の中に、其の怒れる波頭の樣に尖立する諸峯の名を正確に指呼し得る者は恐らくないであらう。夫れ程其處は分つて居ない。夫れ程其處には數多くの未知峯がある。僕は此の領域の暗黑の原因を其の深奥さと交通不便とに歸さないわけにいかない。秀姑巒山脈が有名な玉里横斷道路に其の山腹を横切らるゝとは異り、此の山塊に近い道路と云へばイバホから無双に通ずる此の山塊をめぐる警羅道路を擧げる事が出來る許りである。而して夫れも比較的近年の開鑿に係るものである。加ふるに此の山塊を我がもの顔に割據するマシタルン、郡大、イバホ等奥蕃の諸蕃社——彼のラホアレ一派に合流した郡大社脱出蕃の故郷である事を考へると、滔々として勃興した台灣に於ける登山風潮から未だに取り殘されて居るのも無理もない事と思はれる。

秀姑巒山脈の縱走を終つて無双に歸り着いた日、先づ第一に僕の貪慾な登行慾の對象となつたものは勿論此の山塊であつた。人訪れない、あくまで原始な此の廣大な未開の山地よ！眼近かに打ち眺めた郡大山や秀姑巒山脈よりの展望の素晴らしさよ！想像に違はず期待を裏切らず、其處には少なからぬ巨峯があつた。影淋しい清淨な山の姿があつた。其の頭を昏迷の雲に卷かせて沈默の中に喚びかける無音の惑はしの言葉よ！奥深き山の青く粧ふ其の色の牽引力よ！初めから斯くあらんと思つて居た樣に、間もなく僕は如何とも逃れられぬ此の山塊の囚人（メシウド）となつた。

山行の準備はもどかしくも整つて東郡大山へ出發の朝は來た。然し私かに案じて居た樣に、前日の妖異な夕燒けは天候の惡變を豫兆するものであつた。床を蹶る前に早くも雨戸を斜めに叩く雨の音が、之れは駄目だと直感させる。戸を開けると早朝から樹木はザワ〳〵とざわめいて居た。東郡大山の方、東の空からは眞黑い雨雲が溢れる樣に飛んで來る。後から〳〵とやつて來る。雲脚早い疾風に乘つて、而して來れば凄いぞと、不安な之れからの登攀者を脅しながら。同行の蕃人は此の天候と知つてか、時間になるのに一向に現れない。此處でさえ風雨は斯くの通りだ。高い山では其の激しさは如何ばかり甚いものであらう。

日は過ぎた。貴重な時は增大する僕の憂鬱を知らぬ顏に、一日々々と過ぎて行つた。然し中央山脈の彼方から流れ來る暗雲は、衰へるどころか日毎に其の量を增して行く。絕えず其の裾からは驟雨氣味な小雨を撒き落しながら。而して今では夕毎に輝いた彼の無氣味な何か地變の前兆でもある樣な怪しい夕燒けも消えて、それからと云ふもの雨の霏々として閉ざす夕暮を何度迎へた事であらうか？來る日も來る日も雨に明けて雨に暮れた。山上の光榮に面接する事が出來るのは何時の事であらうか？恰も無盡藏であるかの樣に雨雲を生み出す事をやめようとしない彼方の空を見上げては、唯うらめしい溜息をもらすばかりであつた。淋しく寄る窓邊からは、籠を背負つて畠仕事へと小雨の中を出掛けて行く蕃人の女が眼に映る。然し男達は三度の飯より好きな狩にも出ないのか、駐在所に銃と彈藥を借りに來る者は一人もない。之れはおかしい如何したのかと暗い蕃屋を訪ねれば、ガヤ〳〵騷がしい酒盛りの中からフンレブが振り向いて、山は荒れて居る、東風が吹いて居る間は山行等は思ひもよらない、まあ之れでもいかがと、飲みかけの杯に粟酒を波々と注いで差し向ける。外は相變らずの雨模樣、軒下までヒタ〳〵と押し寄せた白雲が氣まぐれに退くと、郡大山續きの山腹には海鼠の樣に圍つた白雲が、此の數日

來動かうともしないで居る。

斯んな日が夫れから又數日過ぎた。切角の休暇も之れでは勿體ないと、雨の中の蕃社を巡る。其の中にも雲は相變らず東から。夫れでも遠いカトグラン社に着いた頃には、天候は變ると見えて雲は反對に流れ出した。占め〳〵之れは有難いと急ぎ歸路を辿る途中から、陽は早くも雲間をもれて輝き出す。然し何と云ふ因果なのか、明日こそ東郡大山へ出發と心勇んで郡大社に歸つて見ると、熱望の山行は意外な突發事に斷念せねばならなかつた。夫れは丹大社蕃人の暴動である。丹大社と云へば東郡大山の丁度山陰に當るブヌン族の奥蕃であるが、平生事毎に此方の意に反し當局が神經過敏になつて居る處へもつて來て、今度の事件である。當局が周章てるのも無理もない。朝からけたゝましい電話が喧しく鳴り響く。遂に非常召集だ。銃を擔ぎ武裝した警備員が緊張した顏で集つて來る。夜になると丹大社へと急行する應援隊の松明の火。其の火の行列が遠しく山の蔭に消えると、夜の蕃社は又一入寂寥とする。事の起りは何とか云ふ蕃人が警備員と果し合ひ、「此の二三日中に汝の首を貰ふから覺悟をしろ」と啖呵を切つて山に逃れたが、何時も仲が惡いところへ此の事件なので、蕃社の者は殺氣立つて駐在所を包圍したと云ふのである。斯うなると困るのは第三者の僕自身だ。初めから斯う來るだらうと覺悟はして居たものゝ、間もなくかゝつた電話は登山中止の勸告否命令だ。うつかり東郡大山へ登らうものなら、自暴になつた蕃人は如何な事をするか分らない。是非思ひ切つて吳れと云ふ。山は廣い、たつた一人や二人の狼見たいな蕃人が逃亡したからと云つて、そんなに周章てるにも當らないのであるが、若しもの事があると當局の責任になるから是非やめて吳れと云はれて見ると、つれない仕打も出來かねる。別に强がりを云ふわけではないが、蕃人が恐ろしくては蕃地歩きはやめるに如かずである。そんなら當局の意に反して出掛けたと云ふ證明書を遺して行くから、

やつて呉れと郡守をよび出して請願する。蕃地内の交渉は一にも押し、二にも押しである。然し何時も失敗した事のない此の奥の手も、此の場合には駄目であつた。誰でも次の様な返答をされたら、夫れでも斷つてと云ふわけにいくだらうか？「貴方は自分から好んで危險に入るのだ。然し關係のない同行者はどうなるのだ」。

皮肉なもので、雲は遠退いて何日ぶりかに空は晴れ上つた。見上げればまばゆい程の青天井に、東郡大山の山頂へと續く西尾根が長々と高まつて行く。此の事件さへなければ、彼の尾根を登るのだが！斯くては今年彼の山頂に立つ日は來ないのか？殘念な事限りない。然し天候以外に蕃情に支配せられるのは、台灣山行に忍ばねばならぬ條件である。

僕は氣を取り直して新高へと旅立つた。そして南山、南玉山の登攀から遲く新高駐在所へ歸り着いた夜、殆んど諦めて居た東郡大山行きの許可を得たのであつた。そして夫れも警備員の護衛なしと云ふ氣樂さである。僕は跳上つて喜んだ。そして新高の山行が終る早々、郡大社へと急いだのだつた。五時過ぎ九里の道を飛ばして久しぶりに歸つて見ると、フンレブが蕃社の門口に待つて居て、明日は山へ行けると微笑みかける。

其の日は何時になく靜かな夕を迎へる事が出來た。湯上りの快い身體を夕風に吹かせながら戸外に出ると、郡大溪の深い谷間から匍ひ上つて來る夕闇が、今日の太陽の名殘りを今吹き消さうとして居る。穩かな一日の終りは西の空を茜色に染めて居る。平和な其の色と光り、それは前に仰いだ無氣味な荒模樣の警告でない。

二、郡大社出發

今日は八月卅一日、明けて見ると空はドンヨリ曇つて居る。空は高く幸にして山の方に雨雲は見當らないが、

古綿の様な雲が一面に重り合つて唯醫大山の方に少し切れ目が見える。二百十日を明日に控えた天候は決して安心は出來ない。然し美しい昨夕の夕燒けを思ふと、餘り甚い天候になるとも思へない。今日は斷然出發と心に固く誓つても、事情の分らぬ未知の山行の前には天候の氣になるのは仕方がない。

それでも飯を濟ませて山行の支度をして居ると、約束を違へず六時にはフンレブが元氣な顏をしてやつて來た。天候は如何かと尋ねると、大した事はないだらうと云ふ。フンレブ姓はタケシチバナン、年は二十五才位、丈は低いがブヌンの蕃人らしい頑丈な體軀、そして此の地方切つての利け者丈あつてキビ〳〵した物の云ひ振り、日本語も可なり使へる先覺者である。そして彼は毎年一回蕃社で開かれる武術競技には常に首位を占める勇者であると云ふ。間もなくパッケ、リ、の二人も連れ立つて顏を見せる。

今度の山行は二氏族以上の狩獵區域に亘るので、其の全部を知つて居る蕃人は探してもない。そんなわけで初めから行き當りばつたりやつて見ようと云ふ腹なので、荷厄介なものは皆省いて輕裝する。三、四日分の食糧と何時も忘れない直弓と數本の矢。鹿狩りも結構だが餘りに暇をつぶしては困るので、銃は割愛して僅かに一挺。それに万壽の一升壜が岩元廣氏の御好意から添えられる。

斯くして我々が郡大社を出發したのは六時四十分であつた。駐在所の裏手から直ぐ西尾根をグン〳〵登り出す。幸な事には天氣は好くなるらしい。陰氣な雲間をもれて一條の輝かしい朝の陽光が頭上に落ちると思ふ中にも、雲は次第に割れて其の奥からひろがり出る青空の大海。我々の一歩々々と近づきつゝある其の先きは、惜しくも諦めて居た東郡大山だ。毎日〳〵窓邊から空しく仰いだ彼の尾根を我々は今辿りつゝあるのだ。然う思ふと登り許りの暑い茅戸の登りにも、僕の心は輕く足は自ら早まつて來る樣にさえ思はれる。

間もなく現れた畠には粟が黄色く實つて、數人の蕃人が夫れを收穫するに忙しい。我々の姿を認めて粟を苅り取る手を休め、訝かし氣に見返る其の眼には何れも異邦者への懐疑が宿つて居る。フンレブとの間に交はされる立話數分。我々は又同じ尾根を默々として辿る。空は益々晴れて來た。東郡大山に懸つた雲が依然として動かうとせず、夫れが少しく氣になるが、郡大山から鵬大山へかけての西空は一片の雲もない紺碧に輝き、漲り渡る陽光に山と谷は今しがたとは打つて變つた陽明さに照らし出される。然し已に夏も盛りを過ぎた力ない陽ざしである。草叢の中には内地の秋を思はせるフヂバカマ、カハラナデシコ、ツリガネニンジン等がほゝえましく淡色の花瓣を着けて、降りかゝる暖光を胸一パイに吸つて居る。

蕃社を出發してから一時間(七時四十分)、やうやく現れ出したアベマキの木蔭に、足を投げ出して初めての少憩を取つた。そして暖い空氣に紫煙の輪をふかす恍惚の一時。「ウサビヘ」と叫び出すフンレブに教へられるまでもなく、早くも僕は群聳する叢峯の中に新高の連峯を探し出して居た。今日も新高は晴である。水々しい空に主山を圍んで北山は其の双峯を中天に抜き、東山は突兀たる岩塔を其の左に際立たす。此の東郡大山塊をやるために、惜しい別れを告げたのは、ツイ昨日の事であつた。西南に斷ち割られた郡大溪を隔てゝ其の彼方に聳く樣に望まれる新高は、何物にも代へ難い愛着を僕の胸に蘇らせる。

心配した天候も今では大した事はない樣だ。何時まで斯うしても居られないので、早々腰を持ち上げ尙も明るい寂漠の中をひたすら進んで行つた。幾ら登り續けても疲勞を覺えぬ獸の樣な早い足取りは、一歩々々と我々を高きに運んで、其の中にも知らぬ間に高距は增して居た。顧れば郡大溪の縱谷は遙か彼方に隔り、郡大社最奥の小社パラモアンの耕作地の描く斑點も早くも足下に深く落ち込んで、今では何處を見渡しても全く人煙を離れた

原始な山と谷のたゞずまひ、遠く霞むイバダン社の段丘が別な世界でゞもある様に望まれる。九時二十分、今度はアベマキと入れ代つたケヤキの木蔭に腰を下して、少し許りの休息を取る。

東郡大山の頂上までには未だ距離がある。然し今まで遠かつた此の山塊の主脈はもう隨分近まつた。そしてホンコー渓を隔てゝは、リヽヤハ山から眞西に伸びる長い尾根が眼の前に望まれる。之れに就て我々の注意を喚び起すのは、階段狀をなして低落する其の特異な地形である。尙も眸を凝らせば、二段、三段、夫れは明かに階段をなして落ちて居る。然う云へば今まで我々の取つた郡大尾根にも、明かな急斜と緩斜の交互する坂路を辿つて來た事を思ひ出す。夫れは山麓階と認む可きものではあるまいか？此の事實は此の山塊の成立を考へるに重要な材料を提供するものであらうと思はれた。尙面白い事は其の尾根の森林帶である。南斜面は蕃人が火をかけて燒いたため滑かな茅戸に禿げて居るが、北斜面は今でも尙劃然と原生林が殘つて居る。之れは恐らく此の地方の卓越風に關係あるものであらう。

未だ時雨れるには早い朝の時刻なのに、登り來る道すがら望みを囑した青空も、何の頼りにもならないのか、陽は何時ともなく蔓る雲に覆はれて、今まで眠る獸の毛並の樣に黃色っぽく光つて居た茅戸の山肌も、今では暗い色に陰り出した。矢張り天候は駄目なのか！いくら山に雲は附き物でも初めての展望を封じられるのは困つたものだと浮かない顏をして居ると、何か蜜蜂の群でも唸る樣な異樣な聲が何處からともなく聽えて來た。之れは一たい如何したのかと首かしげて耳をすます其の方角は確かに東稽大から落ちるイバホ尾根。双眼鏡のピントを合して注意すると、蕃犬を連れた何十人かの蕃人が黑い團りになつて動いて居るのがすぐ分る。大きな谷一つ隔てゝも蕃人の聲は隨分遠くまで聽えるものである。フンレブに尋ねるとイバホ社の蕃人達だと云ふ。日本人からは

全然手の及ばない此の奥深い山地も、蕃人達には丁度自分の家の庭園か牧場の様に氣易く親しまれて居るのだ。耳をすますと朝の靜かな空氣の中に獸逐ふ異國的なメロディーは更に谷を越えて傳つて來る。そして尙も長い餘韻を引いて仲々に途絶えようとしなかつた。此處に自由な狩獵の日がある、此處に我々の樂しい生活があると恰も僕の胸に囁きかけでもする樣に。僕は一瞬間何物をも打ち忘れて此の聲音に聽き入つて居た。そして今更の樣に彼等蕃人の何等拘束のない奔放な生活を思ふのであつた。

三、ウシゴンの小屋

益々陰氣になつて來る天候に我々はゆつくりする暇もなく立上つた。そして暗い雲に追ひ立てられて先きを急ぐ。東郡大山の頂上は隆まる尾根の向ふに未だ姿を見せないが、其の中にも尾根はやがてやうやく狹く、露れ出る岩、其の蔭に生え揃ふニヒタカマンネンギクやニヒタカシラタマの白い實が、もう可なり登つた事を感ぜさせる。今まで遠く仰いだウワベの鞍部も、深く刻れた谷の突き當りに左程遠くない。そしてまばらに立つニヒタカゴヱウが彼の北の國を思はせる瀟洒な針葉を其の枝に揭げ出して居た。時計を見ると十時を過ぎる事正に十分。もう一萬尺近い高距であらう。

切角喜んで居た晴天も當てにならない山の天候の例にもれず、谷間からは濛々と立昇る白雲が肌寒い濕氣を運んで來て、四邊は數間先きも見えない陰欝な垂れ幕を張りまはされた。そして其の裾からは驟雨氣味な雨までが落ちて來た。でも氣まぐれな山の雲である。少し待てば晴れるだらうと松の木蔭に寄り添つて、憂欝な時をパイプの煙にまぎらはす。切角此處までやつて來ても東郡大山には遂に緣がないのか？之れで空しく引き上げては少

なくとも今夏此の山へ登るのは先づ望みがない。次第に濡れて行くマントの襟を立てながら、降りしきる雨をうらめし氣に眺めて居ても、次第に募つて來る雨勢は何時衰へるとも思はれない。之れでは何とか身の處置を考へねばならないが、之から先きに水はなく、あつても其處は未だ程遠いウワベの小屋まで行かねばならないとのフンレブの言葉に、我々は之れ以上の進行を斷念して、近くに避難所を求めるより他なくなつた。郡大社に歸るのは一番安全な方法だが、此處から少し戻つた處に水があるとの話に、兎に角其處に逃げ込む事を考へた。三人に相談すると即座に贊成。ほんとに斯んな日は小屋にもぐり込んで赤い火でも眺めて居るのが一番好い。未だ正午にもならない今頃から小屋に納つて終ふのは勿體ないが、濡れ鼠は如何にも憐れなので、雨の中を小走りに元來た徑を引き返す。

十五分も後戻りして、それから急なビアクトガン溪の斜面を丈高いニヒタカヤダケの籔に惱みながら又十分も下ると、危く見落して終ひそうな破れ小屋が、ヤダケの中に埋もれて居た。此處が然うかと尋ねるまでもなく、フンレブは荷物を投げ出し、腰の蕃刀を揮つて四邊の籔を拂ひ出す。其處は全く甚い籔だ。斯んな處に水があるとは思へないので、一體水は何處にあるのかと訝り顏に聞き質すと、パッケがゴソ〳〵籔を押し分けて、やがて大木の空洞を探し出し中を覗き込んで安心々々と笑顏を作る。見れば永年の雨水が褐色に淀んで眞黑くなる程ボウフラがわいて居る。何んだ溜り水ぢやないか！之れで飯を炊くのかと少なからず淋しい氣分に滅入つたが、何が何でも之れより他に水はない。斯んな事に辟易しては蕃人との道行は出來るものでないと、强ひて氣を取り直して小屋の修繕にかゝる事にした。

四邊はニヒタカトドマツの密林である。そして夜にでもなれば、ムサヽビが群れ飛びそうな原生林の幽寂さで

ある。そして立罩めた暗い濃霧がそれを更に淋しいものにして居る。我々は其の妖氣を追ひ散らしでもする樣に、丁々の音を林間に木魂させながら、蕃刀を揮つて立木を倒した。屋根を葺く可く松皮を剝した。今夜の寢床を柔かくしようとヤダケの蓆を澤山に用意した。斯くして皆大童になつて働いた甲斐あつて原始な勞働はやがて終り、見違へる樣に廣々とした新らしい小屋の中に納まる事が出來た時は、三時を少しまはつて居た。

外をすかして見ると暗い霧は依然として林の中に陰鬱である。待ち構へて居た樣に起される焚火の火。僕はやうやく燃えついた赤い火に手をかざして蹲ると、初めて山の持つ靜かな味はひに身をまかす事が出來た。そして深い霧の海に息づくトドマツの木立をシンミリ眺めながら、行く先きの山旅を思つた。

夕飯を終つても霧はまだそのまゝである。眼に見えぬ其の底からキンバネホイビイが身を切る樣な聲で絕叫するのが聞える。そしてやうやく夫れが鳴きやんだ頃には、木立も籔も霧も皆な一樣な闇に沈んで行つて、焚火丈が殊更明るく感じられた。斯くして山行の第一日は終り、其の夜は明日の天候を氣づかひながら横になるのであつた。

四、東郡大山の登頂

未だ五時前と云ふのに眼を覺ますと、傍にはもう暖い火が起されパチ〳〵と火花を立てゝフンレブが朝飯の用意をして居る。恐る〳〵外を窺ふと未だ明けない森の中に、相變らず狹霧は退かない樣であるが、深とした靜かな氣配では心配した程の事はない樣だ。其の中に消え殘つた闇が取り拂はれると、曇り日の朝空に其の劃空線を優美に引いて三角形に聳え立つ山がある。未だディテールの判然しない山肌を蒼黑い同じ色に煙らせて谷の向ふ側

に此方を凝視めて居る山がある。夫れは之れから眼指す東郡大山の朝の姿であつた。

昨日は雨天のためとは云へ餘りにも伸び過ぎた。今日こそは是が非でも强行しなければならないと云ふ昨夕からの焦慮は、無意識の中に我々四人を急き立てゝ、溜り水に茶色に色づいた美味さうな飯も祿に味ふ暇もなく荷物を纏めて此の小屋を後にした。時正に六時十分。

朝露にぐつしより濡れてヤダケの籔から匍ひ上り昨日の尾根に立つて見ると、今日の天氣は一體如何なのか、夫れは甚だ思はしくない。鈍色に沈む空の下に吹き通ふ風は寒く、雲は朝から動いて居る。然し之れから目指す此の山塊の山々が暗雲の包圍から逃れて居るのが、せめてもの幸である。兎に角やれる處までやつて見ようと、そのまゝ尾根を足にまかせて登り續ける。其のうちに昨日雨を除けた地點も通り過ぎ、ニヒタカゴエウの下蔭をくぐつて尙も行けば、尾根はやがて急に胸突く急斜に代り出し、我々の辿る狩獵路は二條に分れた。一本はそのまゝ尾根を登りつめて東郡大山の山頂めがけて續いて居るが、他の一本は山腹の懸崖を右手にからんで行くのが見える。そして其處からはホンコー溪のドンヅマリがウワベの鞍部の眞下に刳り込んで居るのを、もう眼近かに望む事が出來た。後の狩獵路はウワベに通じて居るのだとフンレブが敎へて呉れる。

我々一行は其處に暫時の休息を取つた。そして之れから先きの行程を考へた。時計を見るともう七時。でも今日の陽光は未だ訪れず、肌寒い早朝の靜けさの中に、松の枝に先刻から止つて動かふとしないニヒタカキクイタダキの細い聲が聽える。空を仰ぐと雲は切れて居るが餘り感心しない雲行である。然し昨日一日を棒に振つて終つた事を考へると、今日は如何しても頑張らなければならない樣にも思はれる。いくら愼重さを要する山だと云つても、之れ位の天候に愚圖ついて居ては仕樣がないではないか！えいまゝよ！荒れたら荒れたで如何にかなる

だらうと、默りこくつて居る蕃人達に斷然登行を宣言する。三人同じ樣に重い荷物を背負つて行つたのでは行程が捗らない事を慮つて、パッケとリヽに荷物を全部與けて此處からウワベの鞍部にまはし、僕とフンレブは輕裝して東郡大、東巒大山の登頂に向ふ事に定めた。

簡單な身のまはりのものと一挺の銃と云つた輕いいで立ちで、二人が此處を出發したのは夫れから三十分の後であつた。尾根の傾斜は登るに連れて急である。露岩の數も增して來た。ビヤクシンの枝も益々甚くなつて來た。そして足元の草叢にはニヒタカシラタマの白珊瑚の樣な實が重く頭を垂れて居る。ニヒタカフウロの花瓣はもう散つて終つて居る。露繁き尾根を傳つて行く中に、我々二人は全くのぐしょ濡れになつて居た。

急な登攀の最中にも我々の眼を囚へるものは、左に展開される雄大な山の姿である。東郡大山から北に連る高原狀の廣々とした茅戸の擴りの彼方に、東巒大山がウタベ山を前に置いて突き立つて居る。そして其の胸元までにはビアクトガン溪に處女林の美を誇るニヒタカトドマツの純林が伸び上つて居た。右手を顧るとリヽヤハ山からホンコー社に落ちる尾根が益々明瞭に見えて來た。そして其の背後からは此の山塊中での險峰と見られるマショゾカン山の特徵ある山頂附近の岩壁が覗いて居る。もう陽は昇つたらう。空は淡青に色づき、雲間をもれた明光がスカイラインをまぶしく緣取り出した。然し陽の裏に當る此の斜面は朝の陽明から取り殘されて、未だ淺黃色に煙つて居る。

徑は尙も登つてニヒタカビヤクシンの古雅な立木をくぐる。蘚苔に被はれた岩壁を攀ぢた。アザミの蘇に驚かされて綠濃い草叢を拔けた。そして尙も錯節するシャクナゲの枝を泳いで登る中に、山頂から吹き下して來る突風はやがて我々二人を暗い雲の帳の中に閉ぢ込めて終つた。斯くしてやうやく喘ぐ急斜から逃れ樂な步みに息をつ

いだ時には、我々は可なり廣い草原の上に出て居た。そして其處には、さゝやかな濕原ぢみた凹地も見える。

遠望による東郡大山の頂上は確かに突兀たる岩山であつた。こんな平がある樣には思へなかつた。然し後を振り返ると我々の立つ地點は急落する懸崖の崖際で、其處からは脚下に夷伏する多くの山々が意外にも多く折り重つて居るのが見下された。此處が東郡大山の頂上近い事は明かである。然し夫れにしても最高點は何處であらうか？蔓雲は此の高原狀の平を果しも知らぬ樣な廣いものに見せて居る。

突然流動する雲が薄らいで、東南の方には高さ二百尺許りの小山が迫る樣に現れた。彼處が夫れに違ひないと雨混りに吹きつけて來る烈風を冒して眞直に平を横切り近寄つて見ると、ビヤクシンとシャクナゲの密生に守られた要塞の樣な岩塊、夫れが正しく其の絶頂である事を示す樣に見えた。フンレブと僕は息もつかせず其の岩壁を攀ぢ登つた。そして執拗なビヤクシンの抵抗を忍んで其の上に立つて見ると、四邊には之れに比肩する隆起は何等見當らない。時正に八時三十五分。此處が東郡大山（一一八九五尺）の絶頂である事はもう疑ふ餘地がない。

其處は全く狹い突起であつた。僅かに數人を載せるに過ぎない其の山頂はビヤクシンの藪に被はれて、灰色の粘板岩が覗いて居る許りである。云ひ傳へに據れば、東郡大山には山林課の人達が登られた筈である。然し此の山頂には其の當時の紀念物と思はれるものは何も見當らない。其處には下界の香を思はせるものは何もない。二人は今日の登頂の形見として、唯邦人の辿り着いたさゝやかな紀念として、山頂の粘板岩の岩片を二三拾つて、ケールンにも足りない小さな積石を殘した。

雲は依然として山頂に悲壯である。風は益々烈しさを增して一向に衰へようともしない。横なぐりに吹きつける雨滴を兩頰に受けながら、之れから行動すべき四圍の地勢を是非見たいものと流動する雲の行方を追つて十五

分も待つて見たが、夫れは遂に無駄に終つた。唯東方の雲が突然舞ひ上ると、脚下には地形圖に記入されて居ない大崩塊地が崩れ落ちて居て、其のガレの無氣味な色をした斜面を、雨滴を集めて流れ下るドス黒い水が奔下するのを恐ろしく見下す事が出來る許りであつた。何時まで待ちわびて居ても仕方がない。雨に叩かれ風に吹かれたまゝでヂッとして居るのは應へるし、又先きの事も心配なので早々出發の用意をする。

五、ウタベと東巒大山の登頂

先づ之れで東郡大山の登頂も終つた。次にはウタベ山と東巒大山がある。フンレブが曾て來た事のあるのは此處までである。之れから先きは我々の判斷によつて其の進路を定めなければならない。吹きすさぶ風雨に天候の少しでも安らかれと祈りながら、前の平を斜めに横切つて東北端に出て見ると、一本の細い狩獵路は此の山背の東北部をまいて立ち罩める雲霧に其の行手をぼかし乍ら、北へ北へと夢の樣に續いて居る。フンレブに聞けば夫れがイバホ社蕃人の狩獵路であると云ふ。

之れを傳つて行けば同社の狩獵區域である東巒大山へは比較的容易く近寄る事が出來る筈である。二人は斯う思ふと、塞されては開き退いては迫る雲の晴れ間から、絶えず四邊の地勢に氣を配りながら全速力で進んで行つた。徑は程よい傾斜を以て下へ下へと降る。彼の二峰を極めてウワベの鞍部に歸り着くには餘程急がねばならない。夫れに此の惡天候、一刻も猶餘がならない樣な氣分に急き立てられて二人は半分驅ける樣な足取りでドン〳〵足を伸ばした。低く下つて行く爲めか、其の中にも雲は薄らぎ風は稍々凪いで來る樣に見える。そして斯う氣づいた時には二人はウタベ山と東郡大山との間に抱かれた鞍部の裾に來て終つて居た。

其處は天氣ならば一週間も、いや夫れ以上も寢ころんでも居たい樣な長閑な牧場を思はせる草原であつた。滑らかなタカネスヽキの短生は快い四邊のスロープを一層美しく穩かに裝つて、形容すれば兎でも喜戯して居そうな、放牧された牛でも鳴きそうな平和な一角をなして居る。そして左手に緩かに落ち込んで行く斜面はビアクトガン溪の源頭に盡き、その谷は美しい原生林の綠に欝々と被はれて郡大溪の幹谷へと合流して居た。そして右手の斜面は又之れ以上ユッタリした草原を展開し、其の彼方には清らかな溪聲を囁やかせる谷川が湧き出して東北へと流れ、其の周圍は男らしいトドマツの純林が逞しい幹を生え揃はして、夫れは全くいたわられた庭園の樣な整ひを見せて居た。此處は蕃稱ウタベと云ひ、フンレブに仍ればイバホ社蕃人の狩獵小屋がトドマツ林中にあると云ふ。

空を仰ぐと雲軍の動亂は未だ靜まらない。そして亂雲の動きは相變らず急である。そして其の中に俄に明るくなつたのに反射的に再び眼を向けると、深海の樣な蒼さを湛へた青空が途切れ途切れに現れ出して居る。尙も遠退く雲の潮、行く手の灰色の幕が取り拂はれると、我々の頭上には已にウタベ山の彼の圓味のある然し何處かに魁偉な性格を潜ませる瘤ばつた姿が近まつて居た。そして我々はもう其の斜面へとかゝつて居るのであつた。

二人の足は自ら早まつた。唯山頂を目指し好い加減に見當をつけて眞直に足を伸した。風は相變らず烈しく、タカネスヽキの穗は白っぽく波打ち、まぶしい程ギラ〳〵した白雲は無氣味な陽に光つて天空を過ぎて行く。そして絕えず薄黑い雲影を茅戸の斜面に落しながら。我々は尙も夢中になつて登り續けた。

此の登行は夫れから尙も十五分も續いたらうか、長い樣に思へる此の急坂もやうやく極まる時に近づいた。そして間もなく青く雲の退いた北の空を背景として緩かなスロープに輝く草山、夫れが此の山の頂上であつた。そ

して更に高きを求めれば、其の茅戸からぬっくと頭を擡げて臥牛の様に蟠る大岩塊、夫れが此の山の最高點であつた。我々は期せずして草場を驅け拔け岩にかぢり付き、絡まるビヤクシンの枝を引き掴んで其の山頂（約一一五〇〇尺）に立つた。時正に九時五十三分。少しく空腹を覺えたのでフンレブから貰つた燒芋を嚙り、形ばかりのケールンを積んだ。此の岩は確かにモナドノックである。

之れで第二峯の登攀を果す事が出來た。次は第三の東鞍大山の登頂へ。其の山は如何かと西北の空を振り向けば、五〇〇尺許りの鞍部を隔てゝ夫れは親しく對座して居る。そして此處から見ると其の山頂までは飛びつけそうな程近い。

其の時雲は少し晴れて來た。そして丹大山から大石公、關門山に至る紛糾する連嶺の曲折を望んだが、時間に囚はれた二人は夫れを眺める暇もなく立上つた。そして東鞍大山目指して斜面を驅け下りた。二人は進んだ。そして鞍部に辿り着き又登り續けた。風と雲は前と尙も變らない。烈風に引き裂かれた雲の間からは眼を射る光線が瀧の様に落下する。それから三十分、我々の行手に頂上は近かつた。間もなく東北の方向に岩の露れた三角錐を望んで足を早め、最高點（一一四三六尺）に着いたのは十時三十八分の事であつた。一片の斷雲が飛んで來て山頂は又暗くなつた。二人は其の中にも岩を運んで、さゝやかなケールンを積んだ。今日の行程は邦人として最初の登攀だとフンレブが敎へて呉れる。

幸にも山神の屁護に與つてか、僕は待望の此の三峯の登頂を果す事が出來た。私かな歡びが僕の胸に充滿する。そして甚い風や冷たい雲も感ぜずに出發以來の勞働に疲勞した身體を此の山頂に休めた。處で之れから歸りの問題である。バッケとリ、の二人はウワベの鞍部で待ちわびて居るに違ひない。我々の身の上を案じて居るに決つ

て居る。我々は風雨の中の強行に相當の疲勞を覺えては居るが未だ〳〵大丈夫である。然し之れから午後の惡天候に向はふとする今となつては、一刻も早く彼の二人に合流し一行全部一緒になる事が是非とも必要である。風向を注意すると北東風は今では完全に東に變つて居た。夫れは山の暴れる前兆と常に蕃人に云はれて居た東風に風は變つて終つたのだ。唯胸焦がす新らしい山の登頂にのみ氣を取られて、二人は餘りにも深入りして終つたのではあるまいか。夫れは要するに結果論である。風よ！雲よ！天候よ！今暫時の餘裕を與へよ！我々は祈らなければならなかつた。

我々はいくばくもなく此の山頂に袂別を告げた。そして降る急坂に足をまかせて、ひた走りに降り出した。鞍部からの歸路はウタベ山の上を通らずに、西南の山腹をからんで急いだ。少しでも時間を儉約したいからである。然し急峻な岩多い此の斜面は反つて困難と勞苦を增した樣に思はれる。ビヤクシンと累々と重疊する岩の間には、ムサヽビの丸藥の樣な糞塊が少なくない。時間に餘裕のない下降の途中にも、フンレブは銃を構へてホーホーと誘ひ聲をするが、此の風雨に孔深く隱れて居るのか皆失敗だ。

心急く中にもやうやくウタベの鞍部に戻る事が出來た。上を仰げば雲の奥から迫る樣に現れては隱れ去るウタベ山の威容、顧れば脚下をめぐるピアクトガン溪は一面の雲に溺れ、東鞏大山からイバホに落ちる山稜の突起が島の樣に望まれる。

風は又少しく納つた樣だが、夫れは高距の關係であらう、未だ安心は出來ない。我々は又前に辿つた狩獵路を探し出して歸路を急いだ。徑には昨日通り過ぎたイバホ社蕃人の犬が遺したのであらう。未だ新らしい犬の糞が澤山落ちて居た。そして此の惡天候にも係らずナガザハジャノメが夫れにギッシリ團つて、素張らしい群居を見

せて居た。

道順は分つて居るので其の方の心配は要らない。我々は一圖に足を伸ばした。流速の迅い潮の様に流動する雲海の怒濤。夫れを泳ぐ様にして小走りに引き返した。そして長い山腹の小徑も終り平も過ぎて東郡大山の絶頂を再び仰いだ時には、時正に正午を過ぎる事十分であつた。折よく氣まぐれな雲は攻擊の手を弛めて居るので、附近の地勢を觀望しようと再び岩を攀ぢて山頂に立つた。

前には展望を許されなかつた此の山塊の東邊の山容、右手（南方）から食ひ入つたマガインソ溪の廣い谷を隔てゝ東南に連亙する奥深き山の姿、夫れは亂れ飛ぶ雲軍の合間から其の大體を窺ふ事が出來た。そして夫れは何と荒々しい山の姿であつた事であらう。其處には高貴な山の氣高さも、美しい山容の裝ひも、そして清澄な奥山の靜謐さも決して探し出す事が出來ない。そして之れに代るものは、マガインソ溪の谷底から其の胸元までも引きちぎられた痛々しい大地の肉塊と、切れない刄物で傷めつけられた様な山頂の搔傷であつた。そして醜いまでの其の荒凉さは其處が兇暴無慈悲な山神の住家としてのみ頷かれる程のものであつた。夫れは原始や寂寥を通り越して唯痛ましさと無氣味さをのみ感ぜさせるものであつた。そして其の上、其處には我々の登行慾を殊更奮ひ立たせる様な峻峯は見當らない。僕は此の山塊に踏み入る最初のプランとして、彼の山稜を通過する計畫を立てた事を思ひ出した。そして色々の事情で夫れを放棄する可く餘儀なくされた事を反つて有難い事に思つた。

六、リ、ヤハ山

我々は間もなく山頂を辭した。而してウワベの鞍部で待ち合して居る筈の二人に加はる可く、リ、ヤハ山へ續

く尾根を辿り、フンレブの導くまゝに西南へと下り出す。左手は前記した物凄いガレである。谷底に咆吼する風の聲を聽き乍ら、其の頭を危く横切つて更に下降を續けると、尾根は露岩とまさご砂の交互する痩尾根となつて傾斜は益々急である。徑々鹿や羚羊とは區別される見なれない糞塊に氣づいて、訝りながら尚も下る其の中に、數間先きを二三匹の猿が鋭い叫聲を殘して雲の中に消えて行つた。又現れる茶色の毛なみ。岩片を蹴散らして行つた其の獸は、斯んな處に居そうだと思つた大きな羚羊の姿であつた。

斯くして足元をいたはりながら、約二千尺近くも下つた頃には尾根も比較的樂な茅戸に代り、左手の斜面には谷間から匍ひ伸びたトドマツの黑々とした森林が、蠢々として其の直幹を立ち並ばして居た。そして其の傍の草地に小さく認められる黑點が、パッケとリゝらしい樣子に二人は元氣づいて大聲で怒鳴る。夫れに應へてオーと叫ぶ聲の主は確かに彼の二人である。間もなく我々一行は四人全部揃ふ事が出來た。稍々安堵して晝食を開き暫時の休息を取る。時正に一時。

心配なのは天候である。空を仰ぐと今まで切れ〴〵に覗いて居た空も一樣な灰雲に閉ぢて、東山稜の彼方は夕立でも降つて居るのか暗い密雲が低く垂れこめ、風は寒く小雨までがパラ〳〵と落ちる。パッケとリゝの二人は天候の惡いのに氣を腐らし、今夜はウワベの小屋(東斜面のトドマツ林中にあるとの事)に泊るものと合點してか、荷物を運んで終つて居る。然し今日此處で進行を止めて終つては、之れからの未知な領域を無事に通過してマシタルンに歸着する事は覺束ない樣に思はれる。秀姑巒山脈から望んだ之れから先きの荒尾根は、可なり險峻で仲々手强いものの樣に記憶した。昨日も伸びて終つたし、もう少し進んで置かなければ、どうにも氣が納まらない。次の露營地は遠いとは云ふが未だ一時にしかなつて居ないので、斷然出發と決心して不服顏な二人に荷物を運ん

で來させ、無理矢理に前進を承諾させる。

之れから先きの地理に就てはフンレブは全く無知である。そして餘程前に通つたパッケの經驗に仍つて進まなければならない。三十分の後には休憩から離れ、怪しい天候に胸を狹めながら、不安な前進へと門立つた。尾根の右側はホンコー溪に開く斷崖である。そして其の上部にはトドマツの叢林が茂つて居るので、我々は左斜面の茅戸をまいて進んで行つた。行手を注意すると、足元の尾根は又隆まつて雄大なリヽヤハ山を起して居るのが望まれる。そして其の東面に山頂から灰色に崩れ落ちる大きなガレこそ、僕のかねてパッケから此の山行最惡の難所と聞かされて居た處である事を早くも知る事が出來た。そして我々一行は間もなく夫れに直面せねばならなかつた。

初めから甚いものとは覺悟して居たが、斯くばかり大規模なものとは思はなかつた。然し夫れは我々の想像を裏切る事數倍である。不完全な蕃地地形圖には全く記入されて居ないが、尾根筋から三千尺以上の高距の間、そして其の幅も廣く禿げ崩れた大崩壞地、其の面を險惡な暗灰色に曝(サラ)して薙ぎ落ちた大地の赤肌、夫れは何か兇猛な我々の想像もつかない樣な强大な破壞力を以て引き裂いたかに見える。そして其の底は噴火口の亂雜と凄慘を思はせる地獄の樣なマガインソ溪の溪底に陷落して居る。そして其處には一片の草も木も生存を許されて居ない。

默々として前に立つパッケの足は下へと向ふ。我々は不安な前途に戰きながら後に從つた。彼は此の崩壞地の緣を草地に沿ふて更に下へ下へと降りて行く。之れは如何した事か！そして其の中に或る地點に達すると、細い踏跡に從つて其處から斜め上へと志す。案じて居た樣に我々の行路は其の大斜面を斜めに横斷しようと云ふのである。

臺灣に於て最も恐る可きものは、而して避け難い危險はガレである。雨さえ募つて來た此の惡天候に此の惡場を通る事は、僕を堪へ難い不安に誘はないわけにはいかなかつた。然し危險と思ひながらも中止を叫ぶわけにもいかず。引きづられる樣に恐る〳〵足を運ぶのであつた。踏み下す足元からズリ落ちる土砂と、上から飛んで來る碎岩、我々は其の兩方に絶えず注意を拂はなければならなかつた。誤つて踏み崩す岩が大仰な響を擧げて谷底へ轉落するのを見ては身は益々緊張する。岩ならば岩のテクニック、氷なら氷のテクニックがあらう。然し崩れ易い土砂の急斜は如何して之れを防ぎ得るか?。

未だ年少ながらも、ヤギ（羚羊）の樣だ等と冗談を云ひながら元氣に進んで居た僕の前のリヽが、突然足場を失つてよろめくと見る間に、何の摑み處もないまゝにアッと云ふ間にガレの斜面をズリ落ちて行つた。そして之れはと思ふ中に、幸にも彼は數間下の岩瘤に引きかゝつてやつとの事で止る事が出來た。僕は突嗟の間にも腰の蕃刀を拔いて安全な足場を岩に刻み、後に續くフンレブの肩からロープを奪ひ取つて投げ與へ、危い處でリヽを救ふ事が出來た。見ると岩面に擦りむかれて肩と兩手は幾らか負傷したが、大した打撲傷もなく先づ以て無事である。一行は運の良い彼を祝し合つた。然し彼の背負つて居た荷物は遙か彼方の谷底に進上して終はねばならなかつた。

一行は此の椿事に益々不安を募らせながら愼重な歩みを續けた。然し今までの中は未だ良かつた。其の中にも次第に猛烈さを加へて來る强風が、暴風雨氣味な雨を叩きつける樣になつては、僕は眞劍になつて身の處理を考へる必要に迫られた。今まで少しでも賴りになつて居た凹凸のガレは、今では滑らかに一樣に切り落した樣な直截面に變り、其の上其處は地層面に並行した一枚岩なる上に、雲母を含んで汚灰色に風化した粘板岩の脆弱さな

ので、夫れは全く滑り易く、若し一歩を誤れば先きの荷物と同じ運命にならなくてはならぬ事は初めから明かである。刻一刻と烈しさを増して吹きつける大粒な雨、夫れが繁くなればなる程、上からなだれ落ちる崖崩れの不安は大きく、餘りの危險さにもう一歩も進む事が出來ず、加はり來る急斜に立往生しなければならない程になつた。

其の上行く手は太い夕立の様な雨足に塞がれて展望は全くかき消された。もう之れ以上進む事は出來ない。そして引返す事も同様である。矢張りウワベの小屋に泊つた方が良かつたのか！なまじ頑張つて出て來た爲めに、我々は取り返しのつかない結果になりそうな豫感さえやつて來る。遂に遂に重圍に落ちて終つた。僕は今更の様に一行の前途を考へないわけにいかなかつた。其の中にもフンレブは明かに周章て出した。そして窮鼠の勇を揮つてか、危い斜面を蕃人の夫れのみが持つ獸の様な感覺と敏活さで驅上り出した。それは全く捨鉢である。斯んな場合に一行が散り〳〵になるとは以ての外だ。僕は色をなして彼を怒鳴りつけ、やうやくの事で彼を引き留める事が出來たが、さりとて他に名案も何等浮ばない。

此の時僕の眼に映つたものは眞直に上へ上へとガレに印せられた鹿の足跡であつた。今までの經驗で羚羊は人間の不可能な急斜を通過する事が出來るが、鹿は左程でもない。之れに從いて行けば此のガレの上部に出られるかも分らない。何はともあれ斯んな様子では先きへ進む事は自ら死地へ飛び込む様なものだ。是非とも此の尾根筋に生えて居た様に記憶する森林に取りついて終ふのが、此の場合最良の方法の様に思はれた。

僕は蕃人達を僕の命令に服せしめる事が出來た。そして今度は路を更へて、ガレの最上部を眼掛けて一直線に登り出した。吹きつける豪雨に我々はズブ濡れになつた。もう全くの暴風雨だ。駐在所では心配して居るであらう。今では山登り處ではなく身の安全を圖るのが先きである。兎に角彼の森林中に避難すれば、ガレの危難から

は逃れられるであらう。雨は永引くかも分らないが、森林中は未だましである。此の天候では焚火や飯どころではないが、我々の荷物の中には懐爐もあれば粟餅もある。僕は最後の場合までも想像しながら、全く生命がけなガレ登りに專心した。

我々は未だ運があつたのであらう。踏み滑らす落石は幾度となく我々一行の膽を冷したが、結局無事に此の惡場を拔けて幸にもトドマツの森林中へと辿り着く事が出來た。そこで其の緣を傳ひながら、尙もリヽヤハ山の山頂へと難路を勵んだ。頂上近くなつて通過困難な密林はなくなつた。そして茅戸に出たのに元氣づいて尙も進む。風は東からである。從つて西の斜面をからんで行くと、風當りは少くなつて我々は可なり餘裕を回復する事が出來た。そこで今までの勞働に汗まで流した身體を幾分寬がせる事が出來た。僕は此の瞬間私かな安堵を覺えないわけにいかなかつた。

七、シナヤンの野營地へ

之れで最難の惡場からは逃れる事が出來たと云ふものだ。然し雨勢は依然として衰へない。樂な茅戸を踏んで根通尾しを傳ふ途中にも時々左側に寄つては下を覗いて見ると、永く見て居られない樣な險惡なガレは凄慘な巨口を開いて我々に追ひ迫る樣である。若しあのまゝ橫斷を續けたら如何なつた事であらう。僕は一行の幸運を祝したい氣持になつた。リヽヤハ山、夫れは不思議な山である。西面から望んだ者は何人も茅戸の普通な山と思ふだらうが、東面のガレは何と此の見かけを裏切るものである事か？そして之れが地形圖に記入されて居ないとは！

斯くする中にリヽヤハ山の山頂（一一三五六尺）は知らぬ間に過ぎた（後から考へると三時頃である）。今度は

次第に低下する尾根に從つて我々は下りを急ぐ。其の途中一万一千尺位の地點に二匹のハブ（新らしいものしらい）がとぐろを卷いて居るのを見出して早速之れを捕へ尙も進んだ。尾根は數多くの瘤を起しながらも下るばかりである。低くなるに連れて雨は小降りになつた。然しもう何處かに露營地を心配しなければならぬ時刻である。時計を見ると四時を過ぎる事十五分。晴天ならば未だ心配した事もないが、シト〳〵とそぼ降る雨の中では四邊はもうほの暗く薄闇は其處までやつて來て居る。

パッケの導くまゝに我々は寂しい歩みを續けた。そして左手の谷間に降りては引き返し戻つては又下るたゞならぬ樣子に、僕はどうもおかしいと感じ出して居た。そこでフンレブをそつと呼んで如何したのかと尋ねると、野營地を探して居るのだと云ふ。マガインソ溪の幹谷に注ぐ小溪は左から時々刳り込んで來た。然し二千尺を越える森と斷崖を突破して水邊へ下りるのは明かに無謀な冒險に屬する。我々は今では可なり廣まつた尾根のうねる草原に水を求めて、淋しい放浪者の樣に彷徨はなければならなかつた。夕霧はもう灰色の潮の樣に下りて來て夫れを更に廣漠たるものに見せて居た。

我々は尙も疲れた歩みを續けた。然し水は矢張りない。いくらズッと前に他の氏族の蕃人に連れられて一遍通つたばかりだからと云つて、斯んな具合では案内の役は務まらない。僕はパッケに對して幾分の不滿を感じないわけにいかなかつた。然し今一生懸命記憶を辿りつゝあるパッケに怒つて見たつて初まらない。氣分を攪す事は反つて不利である。切角蘇りそうな思出が吹き飛んで終ふだらう。僕は一つも小言めいた事を云はずに無言で後に從つた。夕闇は益々迫つた。そして何等足元に危險のない茅戸なので足を伸ばす事が出來るのであるが、今ではトドマツの黑い林も僅かに夫れと察するばかりの暗さである。谷間の籔には猿がカッ〳〵と鳴いて居る。斯ん

な事では如何なるのだらう。可なり心配になつたが、先刻のガレや暴風から助かつた事を思ひ出すと未だ幸である。僕は心細い足を進める中にも斯う思ひ直して自らを慰めた。

斯くして闇がいよ〳〵本物になり、茅戸も森も何もかも皆一様な黒い色に塗りつぶされ様とする頃、左手には一つの深い切れ目が認められて來た。そして夫れこそどうやら水がある望みがある様である。今まで何度斯んな切れ目に水を無駄に求めた事であらう！然し今度こそ確からしい。

パッケの足は無言で夫れに沿ふて下り出した。そして間もなく其處には夜眼にも白く淙々の響さえ奏で出して居る細流を認める事が出來た。然し夫れには見向きもせずに暗い木立の蔭を尙も下り續ける。途中に油松を見つけて其の數片を蕃刀で割り取り、夫れに直ぐに燐寸を擦る。今まで闇に慣れてやつて來たが、松明が燈されるともう完全な闇である。我々は夫れに足元を照らしながら、疲れた足を引きずつた。そして空いた腹をさすりながら尙も數百尺を下つたと思ふ頃、又別の小溪を發見した。そして先頭に立つたパッケが荷物を下す氣配に走り寄つて見ると、傍に傾いた大岩があり夫れを利用して作られた蕃がある。廣さ半疊にも足りない小さな雨除け、とても小屋等と云ふ事は出來ない。然し夜露をしのぐには事足りる。未開人の山に慣れた微妙な感覺、パッケは遂に十年以上前の幽かな記憶を辿り此の闇の中にも此の泊場を探し出す事が出來たのだ。時正に六時半。

直ぐに焚火が起される。夫れにパッと照らし出される蕃人の顏。見れば疲勞にやつれた皆の面には安堵の色が宿つて居る。暗い中に三人は薪を集めに水を汲みに働き出した。僕はパイプにゆづくり詰めてふかし出す。梢をすかして見ると何時の間に晴れ上つたのか、意外にも黒水晶を思はせる黒く透明な夜空、星さえが美しく輝いて居る。やがてやうやく飯が終り、おさまつた腹を抱へて今日一日の思出話に華が咲き初めた頃には、時計は九時

を過ぎて居た。我々はすつかり元氣を恢復して居た。僕はもう今日の危難等はとつくの昔に忘れて終つて、來年來る時は彼の東山稜をやつて見よう等と話し合つて居た。

明日がある。もう寢なければならない。然し今日の數奇な一日を又思ひ出すと、後から〳〵蘇つて來る興奮に如何しても寢られぬ晩だつた。其の時思ひ懸けない明るい光が我々の頭上の黑々とした樹葉をもれて射して來た。驚いて振り仰ぐと夫れは今しがた東山稜を離れた二十日ばかりの月であつた。其の中にも夫れは益々冴えて來てトドマツの針葉を光らせ、森の下地を鹿の子斑に染める。夫れは冬の月の樣に肌寒いが懷しいものであつた。僕は閉ぢた眼を再び開いて、其の神々しい光に見とれて居た。月光は此の樣に見捨てられた荒山にも隈なく照り渡るのだ。僕は不思議にも感傷的な氣持にさえなつて居た。それでも今日の疲れは間もなく僕を熟睡へと誘ふのであつた。

八、ワハシバン山

此處は谷間のせいか昨夜は思ひの外暖かだつた。溢れる樣な元氣を恢復して眼覺めると今日は期待した樣な上天氣である。かぶさる樣な森の木の間から上を仰ぐと一片の雲もない透明な朝空、シジフカラの群が頭上に喧しい程囀つて居る。そして夫れは今日の快晴を喜ぶかに見える。

昨夜は暗い中でゴタ〳〵したので氣がつかなかつたが、荷物を調べて見るともう少し澤山持つて來て置いた筈の食糧がない。然うだ、リリヤハ山の失敗で谷底に進上して終つたからだ。殘るところ一日分しかない。此の分では餘り呑氣な山行も出來ない。ユックリしても居られないと云ふわけで、歸りの事を考へると氣は無性に急い

て來る。それでも飯を終つて愈々出發と云ふ時には、時計はもう六時を過ぎて居た。そして朝の祝福する樣な純潔な光はトドマツの針葉に美しく光つて、我々の居る處まで洩れて來て居た。

我々は此の眼覺めるばかり鮮かな青空に心浮き立ち、昨日の疲勞をもカラリと打ち忘れて此の森の宿に別れを告げた。昨夜朧と見たニヒタカゴヱウの林を拔けて尾根通しに來て見ると、陽は今や明るく輝いて茅戸の擴りを生々と甦らせて居る。此のまゝ登行を續けては何だか勿體ない氣分になつて、快い朝の一時を靜かに味ふために草の上に腰を下した。そして尾根を吹き渡る翠嵐の風に髪を梳らせながら四圍の山々に心ゆくばかり見入る。

我々の第一に眼を向けたものは昨日雨の中を降りて來た方角であつた。リヽヤハ山が高く聳えて居た。そして其處から我々の處まで落ちて來る茅戸の尾根は隨分長く、昨日の長い行程ももつともだと思はせられた。そして其の上に岩を露はした東郡大山が右肩に顏を出して居る。夫れから右に視界を轉ずると、東山稜の山々が昨夜月光の下に望んだとは別な情感を以てツイ眼前に接近して居る。然し明るい陽の下に於ても夫れは何と荒々しい山の姿なのであらう。赭く光る無氣味なガレが相連續して大地を引き裂き崩れ落ちて居る其の險惡さ。そして其の下に入り込んだマガインソ溪は南流し更に西に彎曲して、我々の背後に隆まるワハシパン山の陰に行方をくらまして居る。

昨日は雲の中をパッケの導くまゝに夢中でやつて來たのであつたが、我々は此の晴れ上つた好天に四顧して初めて其の地點を詳にする事が出來た。處で之れから歸りのコースを考へなければならない。直ぐ傍に細い踏跡として認められる狩獵路は之れからワハシパン山の東山腹をからみハイラロ溪の右岸に沿ふて無双に通じて居るとの事であるが、我々の計畫は此の山塊の南端に聳立するワハシパン山とマショゾカン山を登攀するにある。此の

目的を果すためには尾根上を傳ふてマシタルンに降りるのが一番早手廻しである。然し乍ら此の未知の二山は如何なる險峻さを以て我々を苦しめるかも分らない。殊にマショゾカン山は今までの諸峯よりの遠望によつて、可なりの困難さを覺悟しなければならぬ事を知つて居る。斯んな具合では重い荷を背負つて我々四人が同一コースを辿る事は著しく不利である。此の場合最善の方法は、例によつてパッケとリ、の二人に荷を與けて此の尾根の南山腹を廻らせ、僕とフンレブとは輕裝して先きの二峯を極め夫れからハイラロに下つて一緒になることであらう。斯ふ思ひ立つと我々は直ちに荷物の振り分けを初める。

六時三十分一行は二手に分れた。そしてパッケとリ、がハイラロ溪に沿ふて別路を辿る可く小さく斜面の彼方に立去つたのを見送ると、二人は直ちにワハシパン山指して勇躍して希望多き登攀の門出に向つた。頂上は隆まる尾根の陰に其の姿を現さない。然し此の茅戸の斜面を登り切れば其の山頂に出られる事は明かなので、我々は高き方へと續く斜面を選んで唯登り續けた。

今日は今までの中で一番好い天氣である。後を振り返ると我々は出發以來初めて晴れた山の裝ふ喜悅する樣な青色を望む事が出來た。そして夫れは高さを增すと共に增えて行つて、今まで見えなかつた遠くの山々も微笑する樣に双眸の中に集つて來る。昨日の惡天候に引き代へて今日は何と云ふ好い日であらうか！足元にはニヒタカアザミが咲き殘つた見そぼらしい花を揭げて居る。そしてナガサハジャノメが三々五々さすらふ樣に草原を飛んで居る。我々は程よい高山の陽光に背をぬくませながら、陶然として歩みを續けた。此の時駐在所から借りて來た眼覺時計が突然フンレブの肩から朝の靜けさを破つて鳴り出して、我々を驚愕させたのは一興であつた。

待ちもうけたワハシパン山の山頂は遂に現れた。そして夫れは想像した樣に西に彎曲して行く尾根の接合點に

廣い頭を擴げて聳え立つて居る。もう其處までは五百尺の隔りしかない。我々は多くなつた山皺の中に一本の山頂へと續く狹い尾根を見出し、夫れに從つて山頂へと志した。此の樣な處では猿も人間も同じ道を通るものか、其處には短い茅戸の上に踏み分けられた猿の通路が判然と印せられ、其の途中には猫の夫れを思はせる猿糞が小さく殘されて居るのを認める事が出來た。此の獸道は可なりの間續いた。そしてやがて夫れが傍道へ外れてからは頂上は近かつた。間もなく我々は他の二人に別れてから二時間の登行に仍つて、ワハシパン山（一一〇七三尺）の山頂に立つ事が出た。時正に八時二十五分。

ワハシパン山の山頂は茅戸の瘤の幾つかが團つた廣い頭で、其の西寄りの處には一段隆まつて十坪位の南北に走る隆起が認められ、其處には東に傾く露岩も少し裸出してニヒタカビヤクシンが所狹きまでに茂つて居る。そして最高點は其の南端と思はれる。

光滿つる深碧の大空から落ちて來る日光はあくまで明るく山と谷を輝かして居るが、今日は強い風の日である。風當りの烈しい此の山頂に立つて居ると、身を切る寒風に首を縮めねばならぬ位である。そして知らぬ間に生れ出た亂雲がもうかねて此の山頂上よりの展望を期待した東山稜の山々の頭を隱して終つて、唯中腹の赭く禿げたガレを窺ふ事が出來るばかりである。然し之れから西に展開する廣大な山波は未だ雲の惡戯に災されず、其の大體を望む事が出來た。北を仰げばリヽヤハ山が頭を尖らせて蟠り、其の肩越しに右には東郡大山、左にはウタベ山と東譜大山が覗いて居る。そして其處から我々の現に立つワハシパン山に續く尾根の具合は手に取る如く眺められた。そして更に左に視野を廻轉させれば其の西面に源を發するピアクトガン、ホンコー、パサイの諸溪谷が郡大溪の幹谷に合流し、其の彼方には一見して夫れと察せられる三角形の双峯を拔く譜大山から南に向つて郡大山

脈の山連が延びて居るのが見渡された。そして其の果てに郡大山を望む方向まで眼界を移動させた時は我々は已に西を向いて居る。そして夫れ等を遠景としてマショゾガン山の突兀たる岩峯を眼の前にして居た。一の鞍部を隔てて僅かに二五〇〇米の距離に聳え立つ雄峯、夫れは我々の之れから果敢な登攀を試みようと云ふ憧憬の山であつた。

傍で岩をゴト／＼させる音がするので振り返つて見ると、今までの登頂で覺えたケールンを殘さうと云ふのか、フンレブが盛んに岩を起して之れを積み上げて居る。然うだ此の山も邦人としての最初の行だと僕も思ひ出して、彼に手傳つて危く忘れる處だつたケールンを積み初める。フンレブは彼自身にも初めての此の山に登り得た事を明かに喜んで居た。そして彼の蕃社の他の蕃人に先んじて此の山頂を踏む歡びを了解するかに見えた。然う云へば彼獨りで此の山頂に立つ事は不可能であらう。何となれば臺灣の蕃人同志の間では、山は自らが貴重な狩獵區域なる關係上みだりに他の領域に入る事を許されないからである。一見して蕃人の生活は奔放なものに思はれる。然し祖先傳來の嚴しい掟が彼等の生活を極めて窮屈なものにして居る事は、此の旅行の一例に就て見ても明かである。僕は今更の様に我々の有する旅行の自由を一面有難い事に思はないわけにいかなかつた。僕はケールンを積み終つてからも之れに就て考へて居た。

此の時突然南方の雲が引いて、其の中から奔馬の様に現れる秀姑巒山脈の巨體を双眸の中に收めることが出來た。そして夫れは何と雄偉な山の姿であつた事か？足下に刳り去られた様なハイラロ溪の廣大な谷の器、夫れに溢れる様に盛られた雲の雄波が立ち騷ぐ大海を拔いて、突如として海中に出現した島の様に翼を擴げた此の山脈の秀拔さは、此の場合既往の如何なる思出の山脈をも其の感銘に於て遙かにしのぐものであつた。

マボラス（ウラモン）の豪宕な山容は一月前の記憶を僕の胸に喚び起しながら眼前に對峙して居た。そして夫れから左に續く此の山脈の主稜は連々と東に延びて、其の東端には忘れもしないマリガナンの秀嶺を望む事が出來た。脈々として空を劃る雄大な山脈の波濤を凝視めて居ると、もう一遍親しく足を向けて見たいと云ふ抑え難い慾望を禁ずる事が出來なかつた。秀姑巒山もマボラスの右肩に覗いて居る。そして其の更に右方には新高の連峯も又現れて北山が殊更大きなものに際立つて居た。

僕は一萬二千尺を拔く此の山脈の偉觀に暫時の間打たれて居た。そして其の劃空線が描く、水成岩山脈のリズミカルな抑揚の快さに醉つた樣になつて居ると、尙も絕えず動いてやまない雲の裾からは山腹以下も晴れて來て、陽と陰とを分つ幾多の山皺も我々の眼前に展開された。之れは有難いと地圖を擴げて諦めて居た此の山脈の地勢に見入る。そして驚いた事には何を發見したか！夫れは蕃地地形圖に記入されて居ない一本の大谷を認めた事である。地圖に表はされるマスブル溪、夫れは意外にも短くして終り、此の溪谷を東に隔てる尾根の裏にはマリガナン溪の他に、一本の溪谷が此の山地に深く食ひ入つて居るのを知つた。僕は之れを眼の誤りではないかとも思つて見た。然し何度見直しても夫れは明かに地形圖を裏切ること前と同樣である。實地踏査を缺く蕃人のみに委された此の領域よ！。地圖の誤るのも仕方がない。然し之れを知つては身親しく此の溪谷を踏んで、其の眞否を探つて見たいと云ふ衝動に責められる。そして夫れに油をかけるものは拂ひ切れない此の山塊の魅惑である。僕は無双に下りる早々再び此の山脈を訪れようと、我と我が身に固く約束を交したのであつた。

九、マショゾカン山の登攀

マシヨゾカン山の岩多い山容は絶えず二人に向つて早く來いと喚びかける。我々は間もなく雲の渦卷き出したワハシパン山の山頂を辭した。そして鞍部へと尾根を降り出す。時正に八時四十分。右側はパサイ溪に臨むニヒタカトドマツの密林であるが、左側は山稜線を境として劃然と全くの茅戸に禿げてハイラロ溪に落ちて居る。二人は歩き好い森林の緣を傳つて進んで行つた。左を俯瞰すると五千尺の下底にはハイラロ溪の溪身が折り曲つて此の山塊と秀姑巒山脈の裾を刻んで居るのが眼に映る。そして薄濁りに濁つて奔下する溪聲の高鳴りは靜かな山氣を震はせて此處までも響いて來るのが聽える。

かねて噂に聞いて居た大崩壞地は又眼の下にあつた。四千尺近くもズリ落ちたガレは上下二段に分れ、之れは遠方よりも此の山塊の目標になるものか不完全な蕃地地形圖にも明かに記入されて居る。話によるとパッケの通る徑は此のガレの中途をへつる筈である。夫れは何處かと眸を凝らして見ると蚯蚓の樣に山腹を匍つて行く幽かな赭線はやうやく僕の眼に留つた。他の二人は今何處を通つて居る事であらうか？我々の此處にある事を是非知らせたいと二人聲を合せて大聲で叫ぶ。五六度喚んでやつと通じたものか、やがて下からはパッケの聲らしい應答があつた。稍安心して尙も先きを急ぐ。

我々の無心な行進は突然の銃聲によつて驚かされた。二人は思はずキッとなつて四邊を見廻したが何も見當らない。今まで一人の蕃人にも出合はなかつた爲め、丹大社暴動蕃人の事などは全く忘れて居たが、此の銃聲を聽いて夫れを思ひ出さないわけにいかなかつた。然し丹大社の蕃人が現れるならズッと前に出遭つた筈である。彼の蕃社から斯んなに遠く來て居るとは思へないので、まあ我々を狙撃したのではないと思ひ直して尙も行進を續けた。其の中に我々は一人の兇猛な蕃人が木の蔭に銃を握つて突立つて居るのに再び驚かされた。僕は其の瞬間

若しや夫れではないかと思はないわけにいかなかつた。そして腰の蕃刀を直ぐにでも拔けるばかりにして近づいて行つた。彼は相變らずヂッと此方を凝視めて居る。

其の服裝から判斷してフンレブが小聲で囁いた樣に、夫れは幸にも丹大社の蕃人ではなかつた。そして畏を見廻りにやつて來たマシタルン社の蕃人である事を間もなく知つた。異常な沈默と緊張が流雲の樣に過ぎて、三人の間には山中で出合つた人懷しさに快い會話が交はされる。僕は殘つた菓子の數片をやつた。そして燒芋の二三を分けて貰つた。

見れば傍には十歳足らずの男の子が草の上に遊んで居る。夫れは此の蕃人の子供である事は直ぐに分つた。マショゾカン山の險を越へて此處まで此の子供がやつて來たとは思へないので如何したのかと尋ねると、今日ハイラロ側の畑小屋を立つて鞍部に通ずる徑をやつて來たのだと云ふ。夫れにしても山を自分の庭の樣に心得て居る蕃人の生活、斯んな幼い時分から親父に奥山に引つぱりまはされては山に强くなるのも當然である。僕は之れを見て少なからず感心しないわけにはいかなかつた。此處には十五分許りも休んで終つた。然し我々には先きがある。何だか殘り惜しい彼と別れて二人は尙も鞍部へと續く小徑を下りて行つた。

やがて我々はやうやく鞍部へと辿り着いた。時正に九時三十分。之れからは登り許りに汗を流さなければならないので、道傍の岩に腰を下して休んだ。見れば左手には谷の方へ下つて行く小徑が認められ、傍には先刻の蕃人が殘したらしい網袋が置かれて居る。中を覗き込めば畏にかゝつた二頭の親猿が入つて居た。そして夫れはもう死んでから數日を經たのか異樣な腐臭を附近の空氣に漂はせて居た。フンレブは斯んなに腐つても蕃人達は煮て食べるのだと話して呉れる。

二人は五分の少憩を取つて、愈々マシヨゾカン山の山頂を極める可く行動を開始した。未だ傾斜は樂であるが左からハイラロ側の急斜が危く迫つて居るので、二人は尾根の右側をまいて森林中を進んで行つた。暗いトドマツの下地にはヤダケの籔が生ひ茂つて居る。そして夫れをゴソ〳〵分けて行くと鹿や羚羊の足跡が無數に亂れて一見して此處が獸の群れる處である事を知る事が出來た。事實其處には蕃名ランガルと呼ぶ獸罠が構へられて居た。夫れは獸の通り路に丸太を組んで棚を作り其の上に岩を澤山載せて之を籐蔓で釣つて置き、之れに觸れゝば棚が外れて壓殺せられると云ふ仕掛けである。此のランガルは澤山あつた。然し其の多くは已に岩は落ちて居て何れもかゝつた鹿や羚羊は惜しくも白骨になつて終つて居る。之れで見ると久しく蕃人も罠の見廻りにやつて來ない事は明かである。

傾斜はやがて急になつた。そして再び森林を拔けて左側へと出て見ると、我々の足元の斜面はいよ〳〵マシヨゾカン山の急稜にかゝつたらしく、今まで振り仰いだ山頂はもう頭上の懸崖の陰に姿を消して居た。我々は唯高きをめざして之れを登ればいゝのである。二人は急聳する岩壁を勢ひにまかせて匍ひ登つた。其處は風化した砂岩であるために足場として絶對の信用を置く事は出來ない。然し種々の灌木が絡んで居るので、夫れに掴つて行けばどうにか登る事が出來る。二人はもう少し登れば息のつける階段地があつた事を思ひ出し、汗と塵に塗れてひたすらに登攀を續けた。

ワハシパン山頂上よりの遠望に間違ひはなく階段地はやがて現れた。そして其處に登り着いて上方を見上げると、魁偉なマシヨゾカン山の岩峯は未だ五百尺以上の高さに聳え立つて此方を見下して居る。今まではホンの小手調べだ。之れから愈々本物の岩登りだと身はいつしか緊張して我々は尙も上へと志す。其の中にも岩は益々現

はれて全く急峻になつて來た。然し岩質は相當手硬いので快い岩登りの面白さに僕の胸は躍り血は潮の樣に高鳴つた。フンレブは蕃人獨特の岩登りの方法で、ヒョイ〳〵と岩から岩へと移つて行く。夫れは我々の登り方と比較すると興味があつた。

我々の地點は次第に高まつた。後を振り返るとワハシパン山は漲る雲に覆はれて見えない。そして鞍部も今や押し寄せる雲に隱れようとして居る。然しマショゾカン山の南面は折よく解放されて居るので、好く之れを窺ふことが出來た。夫れは山頂から一刀兩斷に切り下げられた二千尺許りの絶壁である。そして其の下を取り卷く茅戸の急斜はハイラロ溪の溪岸へと落ち込んで居た。僕は其の壯大な岩壁と眼もくらむばかりに急落する眼下の谷に疾驅する白雲を見返り〳〵岩登りを勵んだ。此の時僕は確かに此の山の南山腹に當つて可なり廣い平を發見した。夫れは此の哨壁の眞下に略三角形に擴がり、そして其の緣邊は相當判然とした急斜によつてハイラロ溪の溪身に落ちる樣子からして、一つの山麓面と云ふよりも段丘と認む可きものの樣に思はれた。著しい其の高距よ！夫れは優に九千尺以上である。僕は今更の樣に臺灣中央高地帶の隆起運動の大規模なものである事を痛感したのであつた。

天候は又も惡い方に向ふのか、東から吹き流されて來る斷雲が盛んに飛來して頭上を掠める。そして切り立つた哨壁の面に黑い影を投げつける樣にして落して行く。此處の岩場は仲々面白かつた。時間もあれば愉快な岩登りを樂しむ事も出來るのであるが、是非とも此の岩峯を突破して他の二人に合し、今日中に無双に歸着せねばならぬ事を思ふと、後から後からと現れる峻しい岩場には好い加減參つて來る。そして初めの中は打ち興じた險峻さも面倒なものに思ひ出して來た。此の山塊生成當時の激甚な褶曲の大波よ！此の岩峯の地層の現はす走向や傾

斜、又は節理は複雑を極めたものであつた。そして一枚岩をやうやく越えたと思ふと、今度は積木を積んだ様な龜裂の入つた岩壁の危さに胸を痛める事一再でなかつた。

我々は仲々終らうとしない途中の長い道程に、此の岩場の極まる處が絶頂である事を信じて疑はなかつた。然し傾斜が急に樂になり足下に碎岩の堆積を踏んでから占めたと心に叫んで急ぎ其の上に立つて見ると、其處は未だ第一の頭である事を知る事が出來た。そして我々の行手には今まで想像もしなかつた尙高い岩峯が非情な沈默の中に聳え立つて居る。夫れは今まで前瘤に隱れて居たものであつた。僕は此の瞬間又一つあるのかと私かな溜息を洩さないわけにいかなかつた。フンレブも又同樣に浮かない顏をして居る。

然し其處から其の絶頂までは餘り長いものでなかつた。そして此の兩瘤の間に左手から切れ込んで來た狹いガリーを越えるのに、再び緊張を强ひられたが、夫れから先きにはシャクナゲやツ、ジが岩角に根を張つて居るし、ニヒタカビヤクシンと違つて握れば痛いタイワンビヤクシンも、此の場合には非常な手懸りになる。二人は今度こそと馬力をかけて尙も急壁を攀ぢ續けた。

其の中にも下から吹き上げる雲の絶え間ない攻擊は遂に此の岩峯を灰色の色彩で包み初めた。夫れに隱れて姿は見えないが、鋭い猿群の叫聲が突然數間先きに聽える。二人は之れを物にしようと夢中になつて追ひ迫つたがもう少しの處で谷間へと逃がして終ふ。二人は地團太踏んで口惜しがつた。然し其の時には已に我々はマショゾカン山の頂上に立つて居るのであつた。時正に十二時十分。岩角の上には今しがた逃げて行つた猿の糞が嘲る樣に殘つて居る。

マショゾカン山の山頂は東西に別れる二つの瘤から成り、西の方が少し高く三角形を呈する狹い絶頂は風化し

た岩肌が露れて、タイワンビヤクシンとキンモウツヽジが生ひ茂り、北面は急斜を埋めるトヾマツの密林、南面は前に仰いだ高峻な岩壁が切り落ちて居る。

十、マシタルンへ下る

今までの諸峯と同じく其處には先登山者はよもやあるまいと此の山に近づいたのであつたが、僕は尙も注意深く其の證跡となる可きものを搜し求めた。然し其處には何も見られなかつた。此の山塊中では比較的蕃社に近い此の山峯でさえ其の登攀からは見捨てられて居るのだ。尺に足りないケールンを靜かに積み終ると、僕とフンレブは長い岩登りの連續に可なり疲れた身體を初めて其の上に休ませた。

冷々と襲つて來る白い雲に汗ばんだ肌を曝しながら、僕は稍充ち足りた氣持で座つて居た。今までの行程に於て極めた五つの高峯の登頂、夫れは初踏者としての感銘は深いものであつた。然し其の登攀を省みると僕の登攀慾を充分に滿足させるには未だ遠いものであつた。然し此度の山旅も終らうとする此の最後の岩峯に於て、僕は可なり緊張した登攀を味ふことが出來た。高距こそ他の諸峯に劣るが、夫れは如何にも絶頂を闘ひ獲つたと云ふ感じの切なるものであつた。絶頂に着いた時には丁度眞正面に對ひ立つマボラスの姿を雲の間からかい間見たのであつたが、夫れ切り展望は蔓雲に封じられて今では何も見えない。唯吹きつける斷雲が此の狹い岩頭に怒濤の樣に渦卷いて荒れ狂ふのみである。

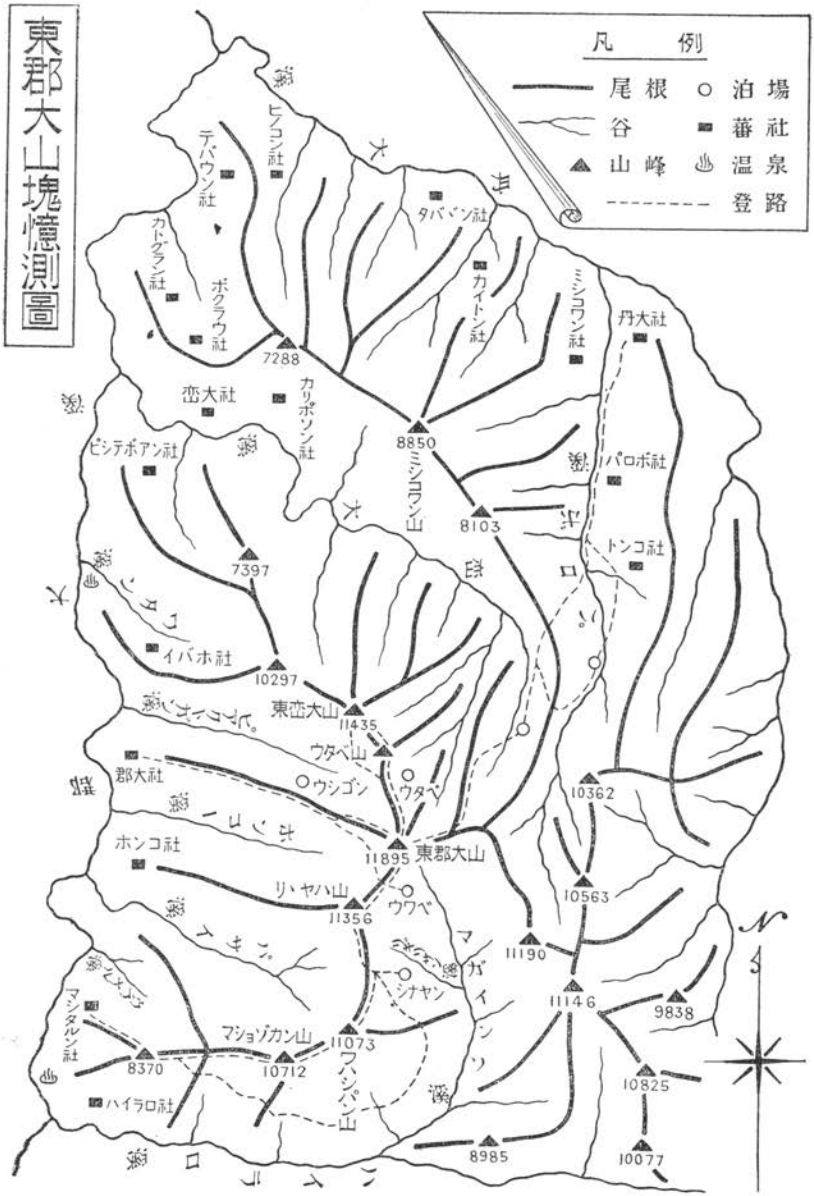
二人は一樣に歸りの事を思ひ出して居た。そして同時に腰を持ち上げると心急いてマシタルンへ下る可く歸路に向つた。四圍の展望は全く擴がる雲に覆はれて居るので、此の先尙も今までの樣な癖があつては堪らないと相

當に心配したが、絶頂を辭して次の瘤へ取りついて見ると、其處からは唯西に向つて茅戸の尾根が續いて居るのみで、我々を苦しめる樣な岩瘤はない樣だ。之れで少しく安堵の胸を開いたが、是非とも他の二人に合して終はないと未だ安心がならない。

ハイラロ溪に沿うて迂回した山腹路を廻るパッケは此の下を通つて居る筈である。二人は左手に突出する出ッ張りを見つけては、其の上から聲を張り擧げてパッケの所在を永めた。パッケー！僕は稍眞劍になつて大聲に呼んだ。パーッケ！フンレブは又蕃人獨特の山に透る異樣な聲を出して呼ぶ。然し地勢の凹凸の關係からか距離の遠いためか、答へは更になかつた。我々は代る〴〵前方に擴がる雲に向つて呼びかけた。然し之に應へるものは唯灰色の幕の中から呼び返す木魂丈である。

二人は降る事に決心した。豫期しない斷崖に行手を塞がれる事のみが不安であつたが、尾根はいくらか急斜でも通過困難な原生林なく茅戸ばかりなので、唯遮二無二降り續ければ何時かは其の徑に出會ふ事が出來る筈である。二人は滑り下りる樣にしてハイラロ側の山腹へと落ちる斜面を馳け出した。

其處には我々の進行を妨げる澤山の山皺があつた。そして又露岩の切り立つた急崖も少なからずあつた。二人は夫れ等を徐けては下を窮ひ、見通しをつけては下りを急いだ。又途中立止つてはパッケの名を呼んだ。然し依然として答へはない。餘りに唯眞直に進んでも、パッケの行き過ぎた所へ降りたのでは、一緒になれない事を慮つて、今度は右(西)寄りに進路を變へた。何時からともなくニヒタカアカマツの疎林が現れ出して居た。夫れは可なり下つた事を示すものであつた。然し何等徑らしいものは見當らない。唯同じ樣に止る事を知らない斜面は、其の先を立ち罩める雲に隱して無氣味な程森閑とした山氣は果しもなく續く樣に見える。


東郡大山塊憶測圖
凡例
尾根
谷
山峰
泊場
蕃社
温泉
登路
ヒノコン社
テバウン社
カトグラン社
ボクラウ社
タババン社
カイトン社
ミシコワン社
丹大社
7288
恋大社
カリポソン社
8850
ミシコワン山
パロボ社
ビシテボアン社
8103
トンコ社
7397
イバホ社
10297
東恋大山
11435
ウタベ山
ウシゴン
ウタベ
郡大社
10362
ホンコ社
11895
東郡大山
リヤハ山
11356
ウワベ
10563
11190
シナヤン
11146
9838
マジタルン社
マショゾカン山
11073
8370
10712
ワハパパン山
10825
ハイラロ社
8985
10077
N

深い海の底に沈んで行く潜水夫の様に、二人は尙も下降を續けねばならなかつた。唯行手に現はれる徑のみを腦裡に描きながら。途中僕は何か人聲を下方に聽いた樣に思つた。若しやパッケではないかと元氣づいて幾分かは過ぎた。然し夫れは全くの幻聽である事に失望せねばならなかつた。食糧を全部他の二人に與へて終つたのは確かに大失敗である。此のまゝ日でも暮れたら夫れこそ慘めなものである。然しハイラロ溪に沿うては蕃人の耕作地が隨分山奥まで又高い處にまで開かれて居るのを、秀姑巒山脈から仰いだ事を思ひ出した。芋でもほじくつて腹をこしらへれば飢餓の心配はないだらうと考へながら其のまゝ休まずに下り續けた。

此の下りは隨分長かつた。そして急ぐ氣持は其の時間を一層長いものにした。約三時間は焦慮の中に過ぎた。時計を見ると早くも三時。今更の樣に此の斜面の長いのにあきれ且弱り果てゝ疲れた足を運んで居ると、何だか幽かな人聲がする樣である。立止つて聞き耳を立てると、今度こそ確からしい。二人の足は一樣に早まつた。其の中に間もなく霧の中に夫れと判ぜられる踏跡を認める事が出來た。そして何ものかに感謝しながら近寄つて見ると、パッケとリヽが傍に休んで居て我々の方を振り返つた處であつた。

夫れは全く偶然であつた。そして此の廣い山の中で都合よく相合ふと云ふ事は我々の考へ得ないものであつた。四人は改めて此の僥倖を祝し合つた。そしてニヒタカアカマツの根元に腰を下してユックリ辨當を使つた。

天候は相變らず惡くなるのか、可なり高距を低めた此處までも雲は尙下りて來て居て、林間は前と同樣な灰色の幕。林立する木立が夫れにボカされて影の樣に見える。全く寂とした靜けさの中に時折風が下から流れると濕つぽい松籟の聲が四邊を包む。そして更に耳をすませばハイラロの本流の送つて來る谷の響を幽かに聽き分ける事が出來た。

今度の山行の間に起つた色々の出來事、我々は兎に角夫れを幸にも切り拔けて豫定の計畫を果す事が出來た。それにしても昨日の今時分は我々は如何して居たであらうか？走馬燈の樣にめぐり走る思出に僕は過ぎた山旅を今一度考へないわけにいかなかつた。恐らく今頃は彼の諸峯の山頂は風と雨が昨日と同じ樣に暴れて居ることであらう。然しもう大丈夫である。之れから先路は一條、何の心配もない。四人は幾分氣を弛ませて可なり長い休息を取つた。

我々は三時四十分に其處を出發した。長い長い山腹をまいて行く小徑、夫れも唯一途に傳つて雲の中に歸りを急いだ。やがて現はれ出した赤榛林の間を拔けて徑は下り出す。夫れも可なり長かつた。次第に迫つて來る夕闇が濃くなる頃やうやくマシタルンの蕃社を眼の下に望む事が出來た。そして其處に着いたのは六時四十分の事であつた。

東郡大山塊に關する覺え書

本誌前號に發表した「秀姑巒山脈」の夫れに倣つて、此の山塊の覺え書を此處に書留めて置きたいと思ふ。短時日に過ぎない唯一回の訪問、加ふるに天候に惠まれなかつた山行に仍つて得られた收穫は初めから期待出來ないものである事は明かである。然し乍ら全く記錄から忘れられた此の山塊の現在の狀態では、此のさゝやかな記述もいさゝか參考になる可きを豫想し、此處に筆を取つた次第である。

一、東郡大山塊の領域

東郡大山塊は中央山脈の支脈より分れて一の明かなる山塊を成して居る。其の領域に就て見るに可なり判然とした境界線を有する。即ち西は郡大溪の本流によりて郡大山脈（巒大山、郡大山を繋ぐ一連）より分たれ、南はハイラロ溪に隔てられて秀姑巒山脈に對し、北より東にかけては濁水溪の上流なる丹大溪によりて丹大山、大石公山、關門等の聳立する中央山脈の主脈から絶縁せられて居る。以上の地帶は右肩の缺けたる長方形をなし其の中に貫入する數多くの諸溪谷によりて、其の山稜線は可なり複雜である。

二、地質地形學的觀察

此の山塊は略明瞭なる一のブロックを成すものの如くである。即ち西と南を劃る郡大溪とハイラロ溪は共に明かなる斷層谷であつて、殊に前者には明かなるケルンバットが並び、無双及びイバホ附近に溫泉の湧出があり、夫れは此の斷層線に沿ふ地殼の弱線を破つて湧出したものと想像される。而して北より東に突入する丹大溪も斷層谷の性質を有する樣である。

地層は全くの粘板岩と砂岩の互層、其の走向は南北であるが稍東に偏して居る。而して其の褶曲は可なり著しく横臥褶曲を行つて居る處も認められる。此の山塊の最高山稜は可なり平坦であつて又相當廣い平も發見される。而して其の露頭を注意するに何れも急斜する地層を切斷したものである。之れに仍つて見ると地質時代の一時期に於て、此の領域に準平原化（又は Subdued form を呈した）が行はれた事を考へ得る。而して夫れ等の上に急

聳する各峯は多くモナドノックの性質を有するものの如く思はれる。例へばウタベ山や東郡大山は其の適例である。尙東鑄大山よりワハシパン山に連る此の山塊の主稜より西に落ちる四本の尾根には、明かなる急斜によりて境された平坦地の幾つかが階段をなして居るのが認められる。之れは山麓階と認むべきものであらう。而して準平原化以後に於て、間歇的な隆起を經た事を示すものであらう。

郡大溪並びにハイラロ溪には多くの段丘が發達して居る。今其の主なるものを擧げれば、パロカウン（一二二〇米）、郡大社（一三六〇米）、ムサバ（一三六〇米）、パラサゴン（一六六六米）、無双（一八二〇米）等であり、イバホ社附近にては溪の右岸に二段の段丘を認める事が出來、其の上段は一三六〇米、下段は一二一〇米である。最も注目に値するのはハイラロ溪の右岸マショゾカン山の南に當つて高度二七三〇米の地點に明瞭な段丘の存在することである。之れは日本領土内に於て最大の高度を有する河岸段丘である事勿論であらう。斯の如き段丘の存在は極めて近代まで續けられた大規模な地盤の隆起と夫れに伴つて行はれた侵蝕の復活を證するものであつて、又先行谷の性質を帶びる事を示すものである。

三、動植物の觀察

今回の山行は時日も短く且天候にも惠まれなかつたので、動物に就ては極く貧弱な觀察を爲し得たに過ぎない。然し此の山塊は動物地理學的には全く暗黑とも云ふ可き地方なので、以下記錄する種類は何れも新產地として記憶せらるべきものである。

今標本を得たるもの或は目擊し得たるものの中、稍注意す可きものを擧げれば次の如くである。

1キクチハタネヅミ *Microtus Kikuchii* KURODA

本種は從來新高山(菊池)、及び卓社大山（鹿野）より他知られない珍種であるが、ウシゴンの露營地にて一頭を得た。

2ニヒタカネヅミ *Rattus culturatus* THOMAS

3オホアカムサヽビ *Petaurista grandis* (SWINHOE)

4カホジロムサヽビ *Petaurista lena* THOMAS

5キヱリテン *Charronia flavigula xanthospila* (SWINHOE)

6イタチアナグマ *Helictis subauranliaca* SWINHOE

7タイワンザル *Macacus cyclopis* SWINHOE

紀行文中にて述べたるが如く、一萬尺以上に多く見られるのは特異な事實である。

8ブヌンヤマネコ *Felis viverina* BENNETT

本種は Swinhoe の報告以來邦人の採集者なく其の產否疑問とせられたものである。

9ミヤマテツケイ *Arbiocola crudigularis* (SWINHOE)

10タイワンオホアカゲラ *Dryobates leucotos insularis* (GOULD)

11キンバネホイビイ *Trochalopteron morrisonianum* GRANT

12ヅアカチメドリ *Slachyrhidopsis ruficeps praecognitus* (SWINHOE)

13カムムリチメドリ *Yuhna bruneiceps* GRANT

東郡大山塊　鹿野

14 アヲチメドリ *Herporius xantholeuca xyrannulus* SWINHOE
15 ヤブドリ *Liocichla steeri* SWINHOE
16 ニヒタカキクイタダキ *Regulus ignicapillus goodfellow* GRANT
17 ヒメイワツバメ *Chelidon urbica virimentalis* (HARTERT)
18 ベニサンセウクヒ *Pericrocotus solaris griseigularis* (GOULD)
19 タカサゴマシコ *Carpodacus vinceus formosanus* GRANT
20 ミカドキジ *Calophasis mikado* GRANT

尙リヽヤハ山の山頂附近一萬一千尺の地點にてハブの一種（*Trimereseurus sp.*）を二頭捕獲し得たのは收穫であつた。之れは從來臺灣から未知の珍種である。

植物に於ても若干の採集品があつた。然し分布上特に注意すべきものは見當らない。而して此の山地の植物は概して甚だ貧弱であつて新高、次高兩山彙の比でない事を明言し得ると思ふ。

四、附近蕃人との關係

此の地方に於ける先住民は現住ブヌン族の間にサルーソーとして傳へらるゝ矮小人種である。而して夫れが可なり Negritic な性質を帶びたものである事は「秀姑巒山脈」の稿に於て已に述べた。

現在此の山塊中に位置するブヌン族の蕃社は十八を數へることが出來るが、夫れ等は次の三系統に別れて居る。

I. 郡蕃 (Bubukun, 又は Takebukun)

イバホ、郡大、ホンコ、マシタルン、ハイラロの五社

II. 巒蕃 (Takebanuwal)

カトグラン、巒大、ボクラウ、カリボソン、ビシテボアン、テバウンの六社

III. 丹蕃 (Horubatan)

ヒノコン、タバヾン、カイトン、パロボ、ミシコワン、丹大、トンコの七社

以上三グループのブヌン族蕃人の此の山塊に於ける狩獵區域の分布は可なり複雑を極めたものである。然し乍ら其の大略に就て述べれば、ハイラロ溪よりマガイソン溪を溯つて東郡大山に出で、之れより東巒大山を經てイバホに落ちる山稜に圍まれたる地域は郡蕃の狩獵區域であり、其の中ワハシパン、マショゾカン兩山附近はマシタン社に、リヽヤハ山附近はホンコー社に、東郡大山附近は郡大社に、又東巒大山はイバホ社に屬する樣である。巒蕃の狩獵區域は巒大溪に落ちる分水嶺を以て境せられ、丹蕃の夫れは丹大溪、パロボ溪の流域を含んで居る。而して尙、東郡大山より東に延び更に南に彎曲する此の山塊の東山稜は以上三グループの蕃人の共同狩獵區域と見る事が出來る。

最後に此の山塊に關するブヌン族蕃人の傳說を揭げよう。卽ち「大昔祖先の蕃人達がイマロガンの地から此の地方に移住して來た時に、一匹の大蛇が河の水を堰き止めた爲めに大洪水になり、何處も水底に沒して終つたが唯新高山(ウサビヘ)、東郡大山(カヽアシ)、卓社大山の三山の頂上丈が水面上に出て居た。東郡大山の頂上に難を避けた蕃人達は火を消して終つたので大いに弱つたが、見れば新高山の頂上に火が燃えて居る。之れは有難い

と色々の動物達に火を取つて來る樣に命じた。最初出掛けて行つたのはヒキガヘルであつた。やうやく彼處に泳ぎつき火をくはへて戻つて來たが、もう少しの處で水中に潜つたので惜しい事に火を消して終つた。夫れから代る代る色々な動物が使ひに行つたがどうもうまくいかない。最後にカイペシ鳥が飛んで行つてやうやく火をくわへて來る事が出來た。だから彼の鳥の嘴は未だに赤いのである（此の鳥はタイワンクロヒヨドリ *Hypsipetes nigerrimus* GOULD らしく思はれる）。其の中に大蟹が出て來てくだんの大蛇を挾み殺したので水は減退した」と云ふのである。

五、山　名

東郡大山と東繻大山。此の二つの山名は野呂寧氏により命名された事は略明かである。即ち之等二山の西に存在する郡大山と繻大山の東に聳立する意味に於て命名されたものである。

以下此の山塊の主なる高峯の中知り得たるものに就き其の蕃名を記して置きたい。

1東郡大山（一一八九五尺）

郡蕃にては此の山をハ、アシと云ふ。山頂が禿げて居るのでマホーラス（禿げるの意）から轉訛したものと云ふ（マシタルン社蕃人に依る）。

繻蕃にては此の山をカ、アシと云ふ（通常繻蕃にては郡蕃のHがKに置換される）。即ち東郡大山は郡蕃と繻蕃の境界をなすので、カイシ（境の意）から轉訛したものだと云ふ（カトグラン社蕃人に依る。）

2東繻大山（一一四三六尺）

郡蕃にては此の山をホルボと呼ぶ。ホルボは髪の毛の意であるが、如何なる故を以て此の山を斯く呼ぶか判明しない。

繼蕃にては此の山をマカンラスと稱する。短い茅戸をマカンラスと呼ぶため斯く命名したと云ふ（山頂は茅戸である）。

3ウタベ山（約一一五〇〇尺）

タベからの轉訛か？タベは屋根の棟を指す。郡蕃によれば東繼大山の蕃名ホルボは此の山も含む樣であるが、此の山を區別する必要上南の鞍部の地名ウタベを取つて之れに當てた。フンレブに之れに就て相談すると、蕃人間に於ても斯う呼んで明かに通ずると贊成して呉れたので、今後此の山の正名として此の呼稱を採用したく思ふ。

4リヽヤハ山（一一三三六尺）

リヽヤクからの轉訛。リヽヤクは短い茅の意。山頂廣く茅戸なるため斯く命名するとの事。郡蕃の呼稱。

5ワハシパン山（一一〇七三尺）

如何なる故を以て命名されたるか詳ならず。ハシパンは羚羊の皮を以て作りたる雨合羽を意味す。

6マショゾカン山（一〇七一二尺）

マショゾクは尖ると云ふ意味の動詞。之れを名詞にしたるもの。山骨突兀として尖るため斯く呼ぶと云ふ。

挿入の「東郡大山塊憶測圖」は筆者の作製に係るものである。其の骨子となるものは五萬分之一蕃地地形圖で

あるが、東郡大山北方の尾根其の他二三の間違ひを訂正してある。

六、登　路

筆者が今回の山行に於て取つた經路は何れも邦人として初めて踏まれた登路である。而して前述せる五峯の初登頂を含んで居る。然し乍ら他の一峯東郡大山は筆者の登頂を以て第三回目とする可きものと思はれる。此の山の既往の登行に就ては臺灣總督府殖產局山林課の吉井隆成、小林勇夫兩氏の御好意によりて之れを調べる事が出來た。夫れに仍れば第一回の登行は大正十一年二月、伊藤太右衞門、小林勇夫、永田節男、吉井多一の四氏（警備員を除く）によりて爲され、其の登路は丹大社よりパロボ溪を溯りて東郡大山に登頂、略同樣の經路を辿つて丹大社に歸着したものである（其の經路は別圖中に記入してある）。第二回の登行は大正十五年十月、高野鋼治、永田節男の兩氏によりて爲されたもので、卽ち十月九日郡大社を出發して東郡大、東轡大山兩山鞍部西下泊（其の經路は筆者のものと違ふらしい）、翌十日東郡大山を極めたものである。

雜錄

ティロールの冬

田中　薫

歐米の山々には嚴肅なるも寂寥なるも見たが只々麗しいと思ひ、今尙ほ思慕の情已み難きものはティロールである。單に山や谿の姿の美しいと云ふばかりでなく、其處に住む人々の人情、生活振が最ものびやかで、その總てが染め出す濃綠と濃いセピアの地方色は黑いタンネの森や、氷河の無い此の邊りの山々の穩かな山容と共に渾然たる不思議な調和を成すのであつた。

我々の間にも日本アルプス的な味と、秩父、大臺ヶ原的な味とを區別してゐる。ティロールは此の後者に似た味を持つてゐる。

私は一九二八年の暮から正月にかけてキッツビューエルを中心としてスキーを樂しみ、一九三〇年五月、イタリーから南ティロールを見て、北にブレンネルを越え、野花の美しい山間をあちこちして、再びキッツビューエルの舊知を訪れた。此の間の樂しい思出を纏めて一文となす。

ティロールに入る

一九二八年も暮れて、ロンドンはミスルトウとパントマイムの夢に流石に落付を失つてゐた。二三の友とピーター・パンを見て、ボクシング・デーを濟ませ、二十八日獨りドーバーを渡つて一路ティロールに向つた。巴里の夜は雨。翌朝汽車はジュラの山地を横切つてゐる。牧場のある丘陵が打續き、雪がチラホラ見え、

初鹿野あたりの甲斐路の旅の樣である。始めて入るスキスの國、やがてチュリヒに着いて湖畔の宿。大雪の後でヒッソリと慥に靜かである。ジルベスターの廣告があちこちに貼り出されて何か素晴しい世界を想像させてゐる。午後、登山電車でユートリベルグ（八四七メートルの展望地）に登り、夕映から、チュリヒの町に燈火のきらめくまで眺望に耽る。眺めはベルナー・オーバー・ランドの東端、テイディの山塊である。近いだけにグレールニッシュの山容が實に佳い。夕食後、人のざわめくので見れば此のダレールニッシュのアーベント・グリューンである。ほんの十分程の間であつたが、此の世の物とも思はれぬ薔薇色の遠嶺を眺めてほんたうに恍惚とした。

靜かな雪の日曜を一日おいて、三十一日、午前十時ウイン行急行に乘る。諏訪湖の冬を思はせるチュリヒ湖に沿つて走る。昨夜來の大雪で岸に丸く盛上つた雪饅頭と黑い水の對照が美しく、その間に水鳥が澤山浮いてゐる。

次いでリンの谷の奥山の偉觀が眼に入る。見事な氷河谷の奥に幾重にも雲を捲いて岩壁の素晴しい黑つぽい山が立つてゐる。汽車は何時しか辻村伊助氏の褒めたウエーゼンを走つてゐるが急行だから止つて呉れない。ワーレンゼーはスキスの湖を略〻見盡した今日でも最も美しいもの〻一つだと思つてゐる。大雪の後として水は飽まで黑い。その帶の樣な細長い水を隔て〻、屏風の樣な岩壁が同じ樣な高度を保つて續いてゐるのは、ライストカーム、シエーレ、セルン、ブリジ等二千米突そこ〳〵の中山岳ではあるが、褶曲や、斷層が實に手に取る樣に見えるので、すつかり嬉しくなつてしまつた。一度下車して此の邊の村に泊つて見たい。ウエーゼンでも、ワーレン・シュタットでも良い。又フイルツバッハ、ミューレンホルン、ムルグ、モルス等の村々の何れでも良い。その時いたく再遊を念じたのであるが、翌々年の晩春、ウエーゼンに一泊するを得て悉く滿足した事であつた。

サルガンスからラインの谷に入り、ブックスが國境で、小國リヒテン・シュタインを通り拔け、愈々ティロールへと入つて行く。

西に向つてザールバツハの村とヒンテルグレムタールの奥を望む　　田中　薫

ラインの谷は暖く雪も無かつたのにオーストリヤに入つて又雪景色になる。風物が何處となく變る。汽車にはスキー服の幾組かゞ乘り込んで來て元氣なドイツ語でおしやべりをするし、驛には姉さんかぶりをした少女が乳母車にウインの繪雜誌等を載せて賣りに來る。ブルデンツから谷は細くなつて日は全く當らず、雪に埋れた樂し氣な村々をかけて遠く馬橇が動いて行くのが見える。登り行くクロスターの谷が愈々盡きて分水界アールベルグの隧道を越せばサン・アントンで、早や憧れて來たティロールのインの溪谷である。アールベルグのシュナイダー氏のスキー學校はその前年だかに開かれたのであつて、近頃は同氏は何か怪我をして余り滑らぬといふ樣な噂を車中で聞く。

ティロールの氣分に自分から誘はれて行く。丸木小屋が多くなる。村の中心に敎會の高塔が聳えてゐる。家の破風や、腰板が褐色と濃綠に塗られてゐる。人の帽子や上衣や外套が又褐色と濃綠である。田舍くさい鈍重な併し純朴な感の良い色の配合である。初旅の私には何も彼も氣に入るらしい。インスブルックに着いてフト見るとプラットフォームのビュフェから煙が上つてゐる。ヴィエナ、ヴィルシュチェンの熱い奴を食べさせるのである。信濃の驛々ですゝり込む眞冬の蕎麥の味である。

キッツビューエル日記

その日は大晦日であつた。夜の六時過ぎに只一人キッツビューエルに着いた。ハイデルベルヒの松本馨、オックスフォードの西園寺公一、山田節男の三君に出迎へられ、馬橇で鈴のジャン〳〵云ふ音をよろこびつつ賑かに町の方に運ばれて行つた。

此處は北ティロールに於けるスキーの中心地である。數年前から英人の間にもてはやされ、英人のスキークラブ等も出來てゐる。スキスの盛場の所謂サロンスポーターに辟易する人達、安く滯在したい學生等の遙々此處まで手を延ばす者が多くなつてゐる。又オーストリヤのスキー場の中、中央に最も良く宣傳の利いてゐるのも此處であらう。此の邊では土地の人の家に家族として置いて貰ふのが一番安くて樂しみだ。

三人の友がクリスマス以來厄介になつてゐるのが此の土地の御醫者さんで、アントン・エンゲル老先生の家。私は余室がないので郵便局長フォン・フォーゲル氏の一室を借りる。

部屋の片隅に大きな燒物のオーフェン。白い清潔なベッドに仰臥して黑ずんだ綠に光る燒物の肌からオーフェンのぬくもりの發散するのを眺めた。天井には梁が見え、隅々まで暖かで下着の儘部屋中跳び廻つても寒くない。英國から來ると此の田舍が却つて樂園である。

一

獨逸語の國では大晦日を夜もすがら祝ひ拔く。我々四人も着物を代へてグランドホテルのジルベスターのバルに行く。

人口四千の町に何百人かのスキー客が入り込んでゐるのである。席ははちきれさうである。正裝の婦人もあるが毛の靴下の少女もあり、スキーの先生や土地の若者はスキー服にパイプを喰へた儘である。シュナイダーに次ぐ名手といふ小男。此の田舍に遁れ住む美しきプリンセスの母子等も見える。

食事が終り、バルの席に着くとシャンパンが拔かれるが、大抵はワインですませてゐる。スキスに比べると質素なものであるが騷ぐ方は遠慮がない。併しホテルは幾分旅行氣分でいけない。民衆の集るクールザールに行つて見る。ダンス場は肩々、相摩すばかり、紙の吹矢や、細い紙テープが入り亂れて飛ぶ。鮭の肉に木瓜を添へたサンドウヰッチやヴィエナ、ヴュルシュチェンで盃をあげる。煙突掃除の裝をした煤だらけの男が煤けた箒を持つて入つて來る。人々は金を出してその小枝を買ふ。何か幸運の印であるといふ。

十二時になる。少女が一段高い處に上つて何事か宣言する。と同時にバンドが「螢の光」を始める。皆手を執り合つて唱ふ。喧騷の中に一種の哀愁がある。歌ふ人の心の底に沈默が宿る。旅の私には此等の人々と全く無緣であるといふ事が淋しかつた。終ると忽ち席が亂れる。グラスをわざと毀す音、バンドの一人一人が群衆に交つて樂を奏する。皆「ノイヤール」と口々に云ふ。二時頃冷めたい戸外の空氣の中に出た。村中の者は何處かに出拂つてヒッソリとしてゐる。友の一

人は十二時打つと同時にエンゲル家に歸り、年越しのト筮を見に行つた。赤熱した鉛を水中に投じ、その形によつて運星を占ふので、いろ〳〵田舍びたコジツケがあつて面白かつたといふ。

二

町の中央部に街道を跨いで石の大きなアーチがある。昔の町の入口である。黑く煤けた酒場や、スキー具屋や、土產物屋がその前後にある。土產物は木工が主で、之はスキスでも同じ事、木刻の登山人形、農人形、シャモアや、サンペルナール犬等、一應は誰でもほしくなるもの。その他、大抵箱根細工程度と思へば間違ないが、只一つ良い物を見付けたと思つたものがある。よくスキス土產に山小屋や、シャレーの一部を額の樣に造り、その窓に寫眞等を嵌め込んだものがある。信州あたりの副業にも此の眞似がある。あれが此のティロールのは素晴しく寫實的によく出來てゐる。ティロールの民家の模型としても値打があると思つて一つ求めて家鄉に送つた。

此の邊から南へ一寸入つてエンゲル老醫師の家がある。病室が澤山ある樣だが、一向患者が無いのでそこへスキー客を泊めてゐる。私も三度三度の食事には郵便局の三階から此の家に通ふ。ドイツ語に苦しみはしたもの〻實に樂しい食事をした。私は此の家を通してティロールの田舍の中流階級の家庭生活を見る事の出來たのは實にスキーの餘得であつたと思ふ。少し此の一家に就いて記して見たい。

腕の程は知らぬが頑固で人の良い老醫師が主人、毎時も愛想よく我々を自分の娘達と一緒に可愛がつて下される主婦。マリヤ。マータン。ジョセファと三人の年頃の娘。ウインの醫學校から歸省してゐる長男のトニー。田舍でも花の樣な賑かな家庭である。町の檢事の娘で町一番の美人といふのが遊びに來て、二階の廣い廊下でダンスを始める。ヴィエナワルツといふ英米では見られない古風な忙しい踊である。黑く煤けた物置の樣な家の中で斯ういふ娘達と踊つてゐると何時か我身も世界の廣さを忘れ、ティロールの山家を天地とする世間知らずの幸福者になつてしまひさうな氣がする。若しその一人を愛してこんな土地に住み込んだと

したらさぞ狹い人生を送る事になるだらうと夢と空想に耽つたりした。

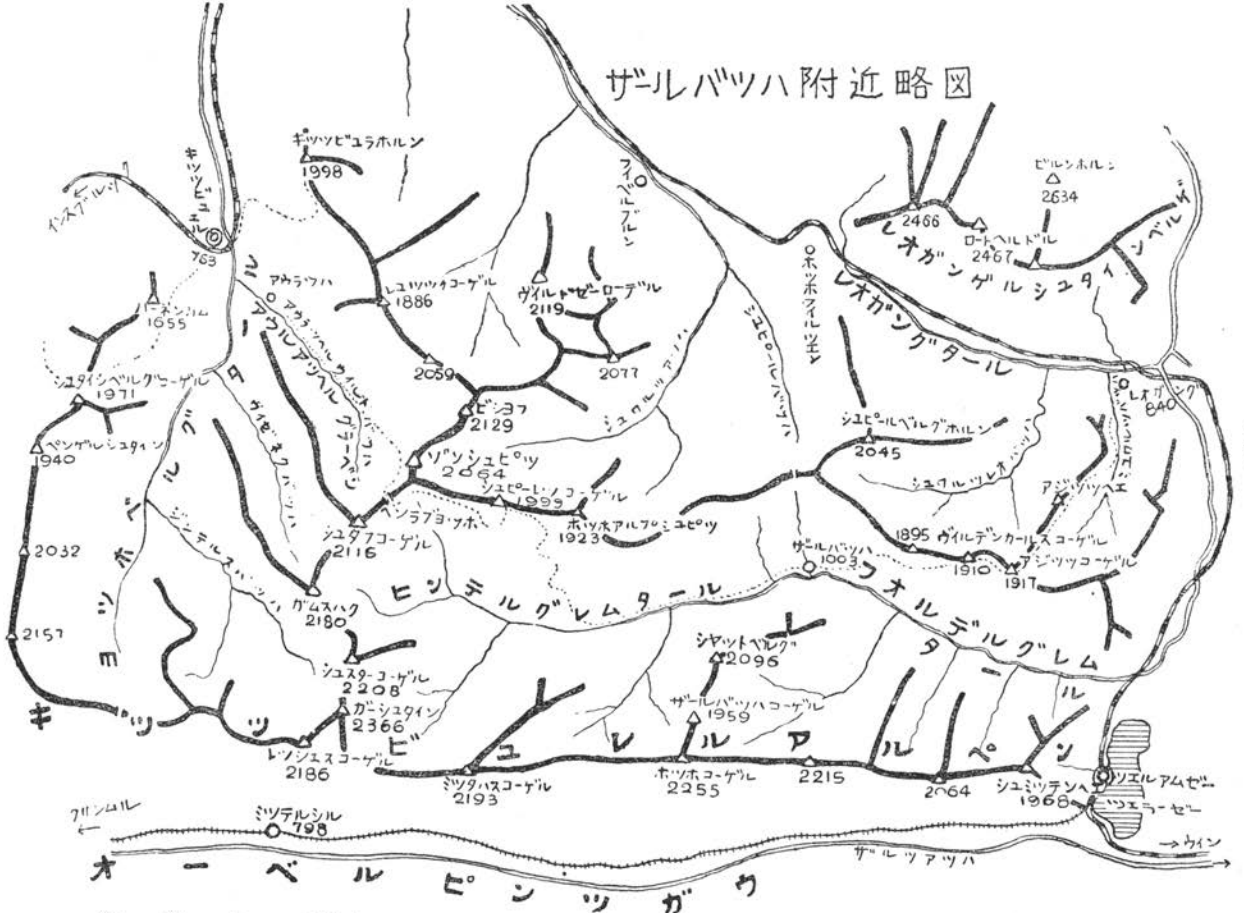
夕食後には種々の遊びをした。田舍の地酒で皆よい氣持に上氣してゐた。板の上に眼かくした鬼をのせ、皆で床上一寸程も持ちあげ、別の板片で頭を押へ「さアもう天井まで來たよ」と云ふと鬼は空中高くあげられた心算になつてオド〳〵して大袈裟に跳び降りたりする。こんなたわいもない大騒をやつた。カルタ遊と追羽根子とを一緒にした樣な賑かさが幾晩も續いた。スープが大皿にナミ〳〵とつがれ、三杯もお代りを勸められた。田舍の人情は變らない。日本の山で麥飯を「お代へなして」と勸められるのと同じである。食器の音、大食、遠慮のない爆笑、それが夜の食卓の總てであつた。

父親は老ひ、不況は續き、一人息子はウインで道樂を覺える。長女は婚期を既に過ぎて荒んで來る。後の便りに依ればあれから次女はアイルランドに奉公に出て傍ら英語を學んで自活の道を樹て、末女はウインに出て看護婦になつたと云ふ事である。我々にもティロールの冬は再び歸つて來ないだらうが此の冬が此の一家にとつても團欒の最後の冬であつた樣だ。かうして大戰後氣力を失つたオーストリヤの山中では家庭の幸福がドン〳〵破壞されて行く。冬が來る毎に樂しいスキーの思出と共にエンゲル醫師の苦勞を思ふのである。

三

當地でスキー達者なフックス (Elias Fuchs) といふフュウラーを連れて、一友とスキー・ツーアーをすることになつてゐた。その友が風邪で行かれなくなつた所へ三人の英人が同行を求めて來た。一人は毎日一緒に遊んでゐるケンブリッヂの學生でボゥイス君、スキーは私程度である。他の二人は餘程上手らしいが兎も角同行を約する。

此の町の東南方一帶の山地はザルツブルグ板岩アルペン (Salzburger Siefer Alpen) と呼ばれ、浸蝕の非常に進んだ古い地形で南北二十粁、東西四十粁に亘つて擴り、東アルペンの東端、ニーダー、タウエルンの前山を成してゐる。


ザールバツハ附近略図
ギツツビュラホルン
1998
ビルンホルン
2634
2466
ロートヘルドル
2467
レオガングルシュタインベルヒ
レオガングタール
ホッホヴィルヘルム
フィッペルブルン
ヴィルトゼーローデル
2119
2077
レユツツクコーゲル
1886
2059
アムラツハ
アウルアツハル
ウィルヘルムスバッハ
ビショフ
2129
ゾンシュピッツ
2264
シュピールバッハ
シュピールベルグホルン
2045
シュピールベルグ
シュタイシベルグコーゲル
1971
ペンゲルシュタイン
1940
2032
2157
ヨツホベルグ
キツツビュル
ジンテルスバッハ
シュタフコーゲル
2116
ホッホアルプシュピッツ
1923
ヒンテルグレムタール
ガムスハク
2180
シュタフコーゲル
2208
ガンシュタイン
2366
レツシュスコーゲル
2186
ミツタハスコーゲル
2193
ホッホコーゲル
2255
2215
2064
シュミッテンヘ
1968
ツエルアムゼー
ツエラーゼー
ウィン
ザールバツハ
ザールバツハコーゲル
1959
シャットベルグ
2096
ザールバツハ
1003
1895
ヴィルデンカールスコーゲル
1910
1917
アジツツコーゲル
フォルデルグレムタール
ツエルアルペン
ミツテルシル
798
クリンムル
オーベルピンツガウ

東西三十五粁に及ぶキッツビュレル・アルペンを中軸として二千メートル内外の中山性の峯が無數に重疊し、其の高度は殆んど連續的で、キッツビュレル・アルペンの如きは遠望すると大きな堤防の様にさえ見える。

廣い淺い谷がその間に開け、その緩い斜面は悉く牧場である。

氷河なく、雪崩の危險又稀で、山頂と云はず、谷壁と云はず、到る處スキーゲレンデである。

秩父や、會津の山の様に、又東京の直ぐそばの多摩の横山の様に、斯うした幅廣い山地は低くても外界の文化を能く防ぎ止めてゐる。ヒンテル・グレム・ター ル (Hinter Glemm Thal) は此の山地の中央部から東に向つて打ち開く最も大きな谷であるが鐵道もなく、キッツビューエルから行つても亦甚だ田舍だと云ふ。谷の中心ザールバッハ(Saalbach)の一邑に一泊して此の邊の山を遊び廻らうと云ふのが我々の計劃であつた。

一月四日、朝、七時にスポートホテルに集る。仄暗い雪の街に燈火が赤々と殘り、家々の小暗い陰から小學生が本を抱へてゾロ〳〵出て來る。大まかな陰影の構成が映畫のセットのやうに見えた。馬橇に乘つて眞南にピンツガウの谿、ミッテルシルに至る街道をひたばしりに打たせて行く。切る風が寒い。アウルアッハ (Aurach) から街道に別れ、馬橇を捨て、九時頃漸く朝霧の中に白々と明けて行くアウルアッハ・グラーベン(Aurach Graben)の谿に入る。村人の朝の仕事が始まる。材木を取扱ふもの、それを馬橇で引出すもの、馬の頸につけた鈴がガラン〳〵と鳴つてやがて道の曲り角に現はれるのを見ると先頭のものが「アッハツッンク」と叫んで皆大急ぎで道を開く。その瞬間にギーと軋んで重い橇が走り去る。雪は漸く深くなつて我々はスキーをつける。ウィルド・アルペ(Wild Alpe—1380m) ホッホウィルド・アルペ (Hochwild Alpe—1569m) を過ぎて、ウィルドアルペンバッハ (Wildalpenbach) の小流を横切つてゾンフェルト (Sonnfeld) の小屋に入り、十一時頃晝食。こゝから景色は既によい。西に向つてシュタインベルグ・コーゲル (Steinberg Kogel—1971m) ペンゲルシュタイン (Pengelstein—1940m)

の山塊が殊に美しい。ゆるやかな雪の斜面を卅分程の登りでヘンラブ・ヨッホ(Henlab Joch—1865m)に出る。こゝはこの邊での主峯ゾンシュピッツ(Sonnspitz—2064m)への尾根である。我々は眞東に連るシュピールレック・コーゲル(Spieleck Kogel—1999m)の尾根の南面を絡んで雪崩の用心をしながらこの峰に上る。北望すれば東北に開くシュワルツアッハタール(Schwarzachtal)の谿が白雪に覆はれ、タンネの森が山の腹を黑々と埋めつくしてゐる。南にはキッツビュレル・アルペンが長々と横はり秀峰ホッホコーゲル(Hochkogel—2255m)が灰色の空に白い線を畫いてゐる。山の高さは二千米を越ゆるものは少く一平面の上に同じ位の頭を無數に並べて廣い奥深い眺めをつくり、何の谿も淺く廣く雪の白と森の黑とでおぼまかに區切られ、南方遠く雲霞の間に連るアルプス高峰の氷河谿とは著しい對象をなしてゐる。風もなく、空はどんよりと曇つて、暖かな夕暮になつた。木の根に集つてパイプをふかしたりして暫く四方を眺め暮す。

今朝から一緒に登つた我々は此處で始めて少しづゝ身の上を語り合つた。二人のスキー家は兄弟で兄をレオナルド・ダッブス(Leonard Dobbs)弟をアール・ヒッチ・ダッブス(R. H. Dobbs)と云ひ、有名なスキー家族の中の人々であつた。一九二七年の英國スキー年鑑を開けばこのダッブス家のスキー家六人の寫眞が一頁を埋め、それ〴〵の輝かしい競走記錄がのつてゐる筈である。偶然ながら斯かる名手と山旅をする事の出來たのは仕合であつた。

我々はこの山脈を斜南へひた走りに滑降する。始めの中は遮ぎるものゝ無い雪の尾根續きだが、やがてタンネの森を縫ふやうになり、終に村近くの牧場を横切つて降る。流石に二人のチャンピオンは速く姿を消し、フュウラーも負けぬ氣になつて其の後を追ひ、ボッイス君と私とは遙か後に置かれてしまつた。ザールバッハの流れに出て茶店で落合ひ、暖い飲物で咽喉をうるほした。この邊はキッツビューエルに比べると更に田舍で、スキーの女客も黑づくめで赤の襟卷等して男と少しも變つた所はない。

ザールバッハ(Saalbach)はほんたうに小さな村で

ある。唯一のホテル、ノイハウスには十五のベッドがあり、室代が二・八〇シリング、食事は夜食と朝食とを充分食べ、葡萄酒を飲み、それで僅かに七シリングであつた。食堂の有樣は實に愉快である。帽子にササラのやうな毛のついたティロール帽の男が、ビールを飲んで賑やかに口論してゐるかと思ふと、女連れの獨逸人が大きな卓を圍んで大聲に笑ひ、卓を叩き、食物を投げ合ふ等實に田舍びた粗野な人柄を卒直に表はしてゐた。寢室にはこの寒いのにストーブがなく、風呂もないので汗を流すことも出來ず、只ヤケにスッエターを着込んで床についた。英人達の日本に關する愚問に答へてゐる中に何時か快く眠入つてしまつた。

翌日は上天氣で空は眼にしみるやうな澄んだ碧色を深めてゐた。まだ日の當らぬ凍つた雪の上を登り出すと一夜の宿をかりたザールバッハの村は間もなく眼の下になつて、綠色の圓いふくらみをつけた敎會の塔が家々を統べるやうに高く聳え、日曜なので鐘の音が平和に響いて來た。北東に向つて廣い雪の斜面を登り、タンネの森を縫ひ、昨日遊んだ尾根の東の續きを北に越えてレオガング(Leogang)の停車場に出ようとするのである。ヴィルデンカールコーゲル (Wildenkaarkogel—1910m)の下の森でお晝、南の陽をまともに受けて皆殆んど裸で登つて行く。所々に小屋があり、村から登つて來た男女が茶等湧してゐるのに出會ふ。尾根に立つとシュワルツレオバッハ (Schwarzleobach)の谿とシュピールベルグホルン (Spielberghorn—2045m)の岩山が見える。この山は岩肌が赤紫で水平の岩層に所々に激しい褶曲を見せてゐる。平調な山脈上に怪異な岩塊を突立てゝゐる姿は會津の駒ヶ岳や上越の谷川岳の風貌である。南に眼を放つと雪の堤防の樣に擴がるキッツビュレル・アルペンの上に東アルペンの雄グロスヴェネディガーの氷河が青々と光つてゐる。我々の周圍は雪ばかりで氷が無い。矢張りそれがアルペンへの憧れの心を深めた。クニーシュティッヒコップ(Kniestichkopf) 迄尾根を降り、山腹を絡んで牧場の柵を幾つとなく越えた。深雪を美しいテレマークで降りて行く名手達を懸命に追ふ。この降りはこの附近で最も長いものと云はれて充分樂しむことが出來た。鐵

道の通ふレオガングバッハ（Leogangbach）の谿に降りると、北側の巨塊シュタインベルグの山々にバラ色の夕映えが表はれ、これを見つゝ靜かに谿を降るのは愉快であつた。日曜日に限り運轉されるスポーツ列車でキッツビューエルに歸る。

四

斯うした愉快な小さな山旅はキッツビューエルを中心として幾つでも出來る。キッツビューエルと並んでウキンタースポーツの中心となつてゐるクッフシュタイン（Kufstein）まで汽車に乘り、そこからこの附近で最も怪異な相貌を呈してゐる岩山カイゼルゲビルゲとヒンテルカイゼルゲビルゲとの間を拔けて、セントヨハン（St. Johan）に出て來るのなどは誠に手頃なものである。

一日の山歩きに疲れた夕は漸く顏馴染みになつた土地の人々の誰彼に招かれて正月の賑やかな食卓につくことが出來た。ペッツオールド夫人といふのは皆からメリー・ウキドウと呼ばれる交際家の未亡人で、若い者を呼び集めるのが好きであつた。この家にはティロールの古い版畫等が澤山あつた。亡夫は詩人であつたので書齋にはギッシリ文學書や美術書が詰つてゐて、田舍びた骨董品が澤山あつた。それ等の一つ一つを手に取つて皆の騷ぐのを他所に硝子戸の外に降る雪の微かな音を聞くのも快いものであつた。正月の飲物であるといふ手製のパンチを供された。エンゲル家の娘マータンさんが南ティロールの農家の娘の晴着を着、ペッツオールド夫人の娘クリスティーさんが若いプリンスになつて皆に給仕して廻つた。そして最後にクリスティーさんは詩人の子らしくシューベルトの詩を皆の前で諳誦したりした。夜が更けてから來合せた男のピアノで皆ダンスをした。例に依つてグル〳〵の目の廻るヴキエナワルツで、よい氣持に疲れ、凍るやうな夜路に出てホットしたことであつた。

此の年の冬は何十年來といふ寒さで、英國でもテームスが凍つてスケートが出來たり、オックスフォードの宿の瀨戸物の水入れが凍つて夜中に破裂したりする程であつた。ティロールの谿は東西に延び、南から吹込むフェーンの影響のない故もあらう、その雪質の良

い事は驚くばかりであつた。一日シュタイゲルアルペへ寫眞を撮りに行つた時には村の直ぐ上の牧場でも雪の表面が一種のフィルムの層に覆はれ、ターンする毎に映畫で見るやうな雪煙が盛んに上つた。風は全く死んでぢつと凍るやうな夕暮にカイゼルゲビルゲの薔薇色の夕映を見ながら、サク〳〵と雪を踏んで、キッツビューエルに歸つた樂しさは忘れられない。寒暖計は攝氏零下十三度を示してゐた。

十日ばかりは何時の間にか過ぎてしまつて、明日歸るといふ日に思ひついて獨墺山岳會に入會した。この街の愉快な滯在の記念にあのエーデルワイスの會員章を貰つて歸りたい子供らしい慾望も手傳つてゐた。ミハィエル・ウォーゼル氏は小學校の校長で、山岳會のキッツビューエル區の世話人であつた。小學校に訪ねると大きな山の油繪の懸つた壁の下で熱心にこの邊の夏の山の良い事を話された。カイゼルゲビルゲには今度數人の友人と山小屋を建てたからこの夏には是非來てくれと云はれた。ザールバッハへ案内してくれたフックス君との堅い約束もあつたのであるがたうとうその夏はカイゼルゲビルゲに登る機會もなくて何んとなく心殘りである。

此處に居殘る友、ウォーンに遊ぶ友を後にして私はスキスへの歸途、又獨りインスブルックへ下車した。町を威脅するやうに重圍する山々は至る所の街路の果に壁のやうに立ち塞がつてゐた。ブリックスナー街で、早くも足が止る。運動具店には山の道具がずらりと並んでゐるスキーの締め具等も流石に此處は都で、キッツビューエルの田舍には見られない上等のものがあつた。金屬製の澁い山具のブローチ等はどうしても素通り出來ず二三求めて家鄉の友に送つた。この通りをマリア・テレヂエン街の方に來るとボンツェルプラッツといふ廣場があり、此所からフェルディナンドイム(Ferdinandeum)の博物館を見た眺めは實に佳いものである。兩側の角型の新建築に挾まれてその突當りに博物館のルネッサンス建築があり、その古めかしき柔かさの上に思ひきり高くグライルシュ・シュピッツ(二三二六米)からマンドル・シュピッツ(二三七二米)にかけての岩山が眞白な雪をかぶつて峙つのは誠に偉觀

ヴィデルカールスコーゲルの尾根より北西北に
シユビールベルグホルンを望む

田　中　　薫

であつた。

此所のペダゴギュウムにある有名なティロールの模型(縮尺七千五百分の一)、山岳會の模型(縮尺五萬分の一)には劣るといふけれども山岳會のは冬は見られぬといふのでわざ〳〵それを見る爲めにファルメラィヱル街(Fallmerayer Str.)に雪深き庭ある鐵門を訪れた。滿庭足跡一つなき中を丸太小屋風の風雅な建物に近づいて見れば、此所も閉鎖されてゐて訪ふ人もない。

此所の大學は巨木の美しき中にある。地理の教授セルヒ(Sölch)博士は東アルペンの研究者としてペンク、クレブス兩教授等の著書についで近年手頃の小冊Die Ostalpen, 1930. Breslau. を著した。此所では既にハイデルベルヒに榮轉された後であつたが翌年のやはり寒いさかりにハイデルベルヒを訪ひ、先生のお世話になり、その研究旅行に加はり、シュワルツワルドの雪を踏んで起居を共にすることが出來たのは幸であつた。大學で教へられてワグネルシエ書店(Wagnersche Buchhandlung)に行き、地圖や書籍を手に入れた。山の地圖では獨墺山岳會の年報の附圖に及ぶものは他になかつた。この他にマリアテレヂエン街にティローリヤ(Tyrolia)といふ書店もある。

附記

徒歩旅行やスキー旅の爲めの手頃な地圖は仲々良く發達してゐる。此の附近の地圖として私の用ひたものを左に擧げて置く。

Spezialkarte Nr. 5049. Wanderkarte. Kitzbühel und Zell am See. 1 : 75,000.

Skikarte von Kitzbühel. 1 : 50,000.

(Kartographisches, früher Militärgeographisches Institut, Wien)

Skirouten-Karte der Umgebung von Kitzbühel. 1 : 40,000.

Brunn's Spezial-Karte : Das Kaisergebirge und die Kitzbühler Alpen. 1 : 100,000.

(Oscar Brunn, Kartographische Anstalt, München.)

(昭和七年十二月稿)

マッターホルンの北壁

吉澤一郎

茲に私は Franz und Toni Schmid 兄弟に依るマッターホルンの北壁登攀の記述に入るに先立ち、少しく前後の事情並びに「北壁」其の物に就ての沿革を述べて見たいと思ふ。

× × ×

今を距る約八十年以前、正確に云へば西暦一八五七年の夏の明け方、イタリーはポー河の上流ツールナンシュ谷のブルイユの下手(シモテ)、アヴォイユといふ一寒村に三人の男が秘かに集つた。彼等は當時アオスタに住んで居たカノン・カレルと云ふ僧侶の言葉熱意に刺戟され今日こそ昔から惡靈住むと恐れられて居た Becca に向つての登攀を開始し様として居たのである。三人の男とは誰々であつたか、それは云ふまでもなく、獵師の Jean Jacques Carrel 兵隊上りの Jean Antoine Carrel 及び白面の神學生 Aimé Gorret の奇妙なるトリオであつた。此の三人が三人共にマッターホルン登攀史上忘れることの出來ぬ重要人物であることは人もよく知る所であろう。彼等は苦心の結果、今日謂ふ Col Tournanche に辿り着き Tête du Lion に達したがセルヴァンの本體との間に横たはる深きギャップに阻まれて其の日は遂に下山して了つた。「獅子のコル」の存在は彼等には未知のものであつた。然し乍ら三人の登攀が結果から見て見當違ひの所に行はれたとは云へ、目的はセルヴァンにあつた事は疑ふ餘地のない所である。されば私はマッターホルンの實際の登攀史を此の三人の出現に初まるものとして差支へない事と思ふのである。爾來八十年、其の間に横たはる此の巨體との爭闘の歴史こそ吾等にとつて最も興味深き研究の對象であらねばならない。

爰にマッターホルン登攀史を研究の便宜上一定の期間に分け様とすれば大體次の如くすることが出來ると思ふ。

一、黎明期（一七八九年—一八五七年）

Matterhorn 重要登山年表 (1879—1932)

番號	年	月 日	場　所	姓　名	案 内 者	備　考
1	1879	9. 3	Z'muttridge	A.F. Mummery	Alexander Burgener. Joseph Petrus. Gentinetta	
2	1879	9. 3	Z'muttridge	W. Penhall	Ferdinand Imseng. Louis Zurbriggen	寧ろ Tiefenmatten face と云つた方が妥當である。
3	1879	9. 6	Z'muttridge	J. Baumann	Petrus Emile Rey	Mummery route を採る。
4	1880	7.19	Furggen ridge	A.F. Mummery	A. Burgener B. Venetz	Furggen shoulder より Swiss shoulder にトラヴァースせり。
5	1882	5.16—18	A Traverse (Breuil to Zermatt)	Vittorio Sella	J. A. Carrel L. 〃 J. B. 〃	冬期登攀同年2月二度試みてイタリー小屋迄達せり。
6	1894	5.27	N.E. ridge	Charles Simon	Alex Burgener Alois Pollinger	冬期登攀
7	1899	8.24—28	Furggen ridge	Guido Rey	Daniel Maquignaz Antoine 〃 Aimé 〃	1893年に3回試みて失敗せり。
8	1906	8.10—11	S.S.W. Buttress Pic Tyndall	Ugo De Amicis Ferraris Augusto Ferraris		案内者なし。
9	1911	1.31	N.E. ridge	C.F. Meade	Joseph Pollinger Joseph Lochmatter	冬期登攀
10	1911	9. 4	Furggen ridge	Mario Piacenza	Joseph Carrel Joseph Gaspard	「肩」より南面に出で「鼻」の上より脊稜を傳ふ。
11	1925		Z'mutt ridge	De Bruyne	Aufdenblatten Gentinetta	Matterhorn 氷河より Z'mutt ridge に達し登頂す。
12	1929	7.17	Westwand	Fritz Herrmann		單獨登攀
13	1929	9. 3	Furggen-ridge	E.R. Blanchet	Kaspar Mooser	下降
14	1930	9. 2	Furggen ridge	E. Benedetti	Louis Carrel Maurice Bich	「鼻」の直ぐ傍にある大クロワールを登つた。從つて Piacenza のルートより脊稜に近い
15	1931	7.31—8.3	North face	Franz Schmid Toni Schmid		案内者なし。
16	1931	10.15	South face	E. Benedetti	Louis Carrel Maurice Bich	
17	1932	9.18—19	East face	E. Benedetti G. Mazzotti	Louis Lucien Carrel. Maurice Bich. Antoine Gaspard	「肩」の高さから山頂まで約300m. に11時間を費す。

二、初登頂競爭時代（一八五七年―一八六五年）
三、中間期（一八六五年―一八七九年）
四、新登頂時代（一八七九年―一九三二年）

右の各項に就ての詳說は孰れ他の機會に於てする事にしよう。

所謂黃金時代の末期一八六五年の頃よりアルプスに現はれた新傾向の一つは新登路による新登頂であつた。之は玆に贅言を費すまでもなく當時の正統派登山者より異端視せられたるマンメリー、ペノル、キング、アンダーソン等に依つて率先主張實踐せられたるものに他ならない。マンメリー、ペノルは會報第二十號に於ても述べた樣にツムット面の初登攀に成功した。爾來マッターホルンを圍る新登頂には凡そ次の如きものがある。（前揭登山年表參照）

右の年表より見るも吾々には此の山體が殆ど研究し踏破し盡された感があるのであつて、最早これ以上は蜥蜴か蠅でなければ新登頂は行はれないまでになつて了つた。從つて今後は殘された僅かの部分を除いて只古きルートの反復に終始して行く他はない。斯くしてマッターホルンの登攀史も一應一九三二年を以てその幕を閉ぢたと見ても差支へないのでは無からうか。

× × ×

爰に述べ樣とする北壁登攀はマッターホルン自身のみではなく全アルプスを通じての大問題であつた。少なく共アルプスに於て未解決の儘取殘されてあつた最も重大なる懸案の一つであつたのである。然らば此の北壁が最初に人間との直接交涉を爲したのは何時の頃からであつたか。以下少しく其の沿革を御紹介しようと思ふが蛇足でなければ幸ひである。

卽ち此の北壁が「北の壁」として最初に此の名稱を附與されたのは一八六五年の七月十四日卽ちウインパー一行初登攀の日であつてダグラス卿以下四人の者が此の壁に沿つて墜落慘死した事は餘りにも有名な話である。而して又最も早く山岳人の登攀の對象となつたのも其の直後であつたのである。

一八六五年七月の中旬、かのチンダル敎授が其の友と共にマイリンゲン近くのガードメンに來て一泊なし、翌朝宿を立たうとする時に一人のガイドから次の

様に話かけられた。

「旦那はチンダル先生を知つて居ますかね、あの先生は殺されましたよ、マッターホルンで」

チンダルとは自分の事である、その自分が殺されたといふ此の奇妙な話に色々調べた所兎も角何事か重大事件が勃發したに違ひないと云ふ事だけは解つた。イムホーフに至つて風評は遂に確實となつた。これが有名なウインパー一行の遭難事件であつた事は云ふまでもない。

彼がツェルマットに來て見ると遭難者四人の裡、ダグラス卿の死骸だけが如何しても發見出來ぬ、或は斷崖の途中に引掛つて居るのではないかと云ふ疑念が捜索隊の人々の頭に上つたのである。仍てチンダルの胸に浮んだ計劃は此の北壁を滑落地點まで登り詰め、其處へ金具に依つて長大な綱を固定させ、それを頼りに北壁全體を隅なく捜索し乍ら降りて來やうといふのであつた。卽ち早速ジェネヴァから一千米突の綱を取り寄せ機會を待つたが遂に天候の不良に防げられて此の計劃は實現せずに終つた。が、後に彼は、其の時假令天候が良かつたとしてもそれが實行出來たかどうかは甚だ疑はしい事であつたと云つて居る。實際それに違ひない。何となれば此の絕壁に四六時中起つて居る自然の墜石を除外したとしても、此の恐しく尨大な綱と岩壁との摩擦によつて惹起される岩片の剝落に對しては如何とも之を避ける方法がないからである。

爾來多くの歲月は流れて行つた。マッターホルンは其の山稜と謂ひ、側面と謂ひ總ては人間の足下に其の秘密をあばかれ盡されやうとしたが、玆に殆ど最後まで頑强に多くの猛襲を排擊し、完全登攀の行はれなかつたものはアルプスに於て最も有名な悲慘事によつて知られてゐた此の北壁であつたのである。

而して事實惡魔の壁或は死の壁と呼ばれても決して過言ではない此の北壁に向つて最初に鬪ひを挑んだ者は、現在記錄に殘されてある範圍內に於て、先づ一九二三年八月十二日に行はれたるウイーンの登山家 A. Horeschowsky 及び F. Pikielko 兩名の壯擧である。然し彼等はスキス山稜の肩までゞ遂に匙を投げて居る。

第二回目は玆に詳かでないが、多分第三回であらうとされるものに案内者のみで行つた試みがある。それはKaspar Mooser及びVictor Imboden (Täsch)の二人であつて、彼等は二十八時間といふもの此の北壁上に嚙り付いて居つたが之亦僅か四五百米の所から追ひ返へされて了つた。

最後に一九三〇年九月四日には、Blanchetが前記モーゼルの外にLärjenといふ案内者を連れて北壁の直正面にぶつかつたが、三時間を要して僅かな距離を攀じたのみで行き詰つたとの事である。此のブランシェットは其の前年にモーゼルと共にフルッケン山稜を下降した豪の者である。

兎も角右の如き有樣で幾多優秀なる登山家の之に當つた者もあつたのであつたが孰れも完全登攀には失敗して居るのであつて、結局マッターホルンの北壁なるものは如何なる登攀技術の所有者にしても少くも人間にとつては不可能なりと云ふ結論に達するの他はなくそれをしも敢えて行はんとすれば人は之を馬鹿か狂人なりとして問題に、否人の迷惑を何とも心得ぬ厄介者視する樣になつた。

然るに玆に一九三一年の七月末より八月に掛けて思ひ掛けなくも漂然とツェルマットに自轉車にて乘り込んだ所の獨逸の二青年に依つて遂に其の最後の扉も開かるゝ事となつた事は、已に我國に於ても山に興味を持つ者の誰もが承知せらるゝ所である。

次に私はシュミット兄弟による其の時の登攀を簡單に述べて見たい。

× × ×

先づ最初に云つて置かねばならぬ事は此の兄弟が驚天動地の登攀を行ふに到るまでに一度もマッターホルンに登つた經驗がない事である。尤もトニーは前に一度、一九二八年の冬、ツェルマットへ來て此の北壁に凝と冷徹其の物の如き眼を注いだ事はある。

而して尙彼等は決して馳け出しの登山家ではなく東部アルプスに、ドロミーテンに幾多の輝しき業績を殘して居る事も事實である。而も其の間に於てマッターホルン北壁以上に困難なりと稱せらるゝ登攀を行つてゐる事は彼の登山經歷を見れば直ちに了解の出來る事

柄である。從つて彼等のマッターホルンに於ける壯擧も單なる名譽とか自己宣傳の爲に行はれたものでない事も明かであつて、それのみの爲には餘りに相手が大ものであり同時に命懸けのものであるのだ。

然し乍ら翻つて考へるに多くのアルプスに於ける困難なる登攀がさうである樣に、人間の勇氣大膽不撓不屈といふが如き一方的の要素のみでは決して成功するものではなく、周到なる準備の外に、第三の要素、卽ち言葉を換へて言へば「天運」と云ふものにも多分に依據する所のあつたのは否定出來ない事であらう。

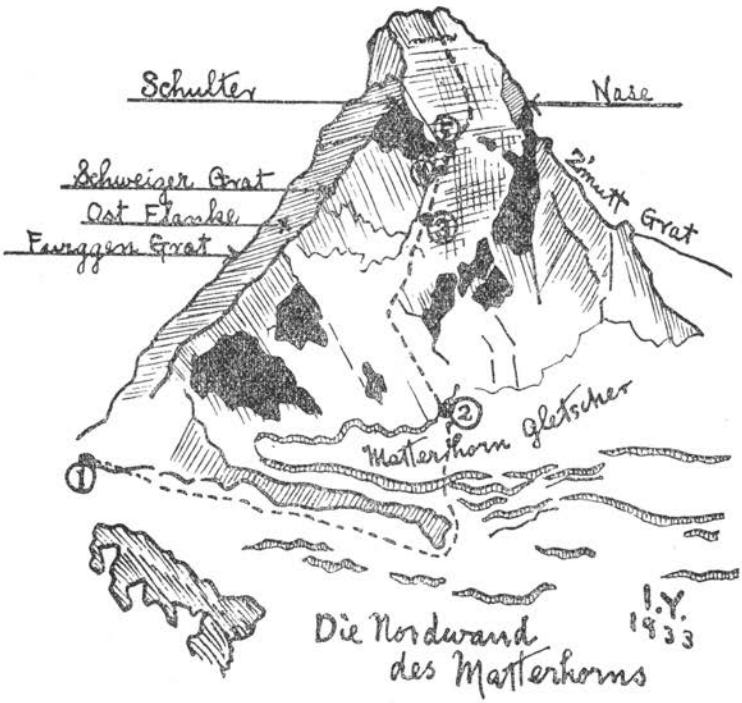
× × ×

二人が自轉車に天幕其の他七ツ道具を山と積んでツェルマットに辿り着いたのは、ミュンヘンを出てから五日目の一九三一年七月二十七日の午後六時であつた。其の時丁度吾がマッターホルンは夕の蒼空に重々しく聳立し、其の氷を鎧つた側面は沈み行く太陽に映じて居た。宏大なホテルの周圍にギッシリと詰つた木造家屋、其の上には綠の牧場や落葉松の林が、輝く萬年雪のドームや類なき岩柱マッターホルン等に得も云はれぬ對象を爲して居た。

噫呼、其處には彼等二人の腦裡を夢にも離れなかつたかの屛風の如き絕壁、直立一二〇〇米突の北壁があるのだ。直下にはマッターホルン氷河が惡魔の巨口を開き、不斷の石の一齊射擊は轟く、而も夫等は急峻な氷壁に深溝を剔り、險崖を舐めて行くのであつた。

彼等は只、此の大自然の偉容の前に、魂を奪はれでもしたかの樣に暫しが間は佇立凝視を餘議なくせしめられて居る他はなかつた。四の眼は其の上にある出ッ張りや裂目を求め二人の心は頂への道を尋ねて居た。其處にはたつた一つの可能性しかないのだ。それは彼の岩壁の中央三分の一位の所にある急峻なそして斜め右上に走つて居る巨きな淺い刻目である。丁度漏斗の樣に總ての墜石は其の中へと陷ち込んで行く。然し乍ら頂上に迄此の北壁を攀ぢようとする者にとつては、何としても此の石と氷の地獄をば通らぬ譯にはゆかぬのである。

翌る七月二十八日、二人はツェルマットを出でゝツムットの流れに沿ひ Staffelalp (2208m.) まで食料其



① Hörnli-Hütte
② Bergschrund
③ Höhe der Solvay Hütte / Wandeinkerbung
④ Biwak (ca. 4150 m.)
⑤ Quergang / Schneeband

10図

の他の道具を引揚げ共の附近に天幕を張つた。夜から明け方にかけて雨は此の假家を打續けて居た。

七月二十九日の朝、天幕の外へ出て見れば滿目是總て白皚々、新雪に被はれた巨峯は崇高の極みであつた。巨大なる氷瀑は急崖の上を奔下した。山稜には新雪の亂舞が續く。午後になつて二人は天幕をマッターホルン氷河の直ぐ下にある許か許りの草付きの處へと移動した。多分二九〇〇米突附近と思はれる。

七月三十日は北壁直下までの登路偵察に費し、いよ〳〵壁への道も明かになり、午後の五時天幕に戻つた。而も尙一日山のコンディションを顧慮して待たねばならなかつたのである。

七月三十一日は右の樣な譯で自然靜養日となつた。午前中は附近をぶらつき、午後になつていよ〳〵明日の準備、四十米突のザイル二本、十五本の氷及岩用のハーケン、カラヴィーネル、シュタイグアイゼン等も整つた。そして最後にパン、バター、少量のチョコレートをルックザックに詰めた。

山にも谷にも漸く夕闇の色が濃くなつて行く。薄い雲のヴェールに陽は沈んで行く。燃え上る炬火の樣にマッターホルンは凄じい巨體を夕空に突出して居た。

寢袋に潜つた二人も明日の事を考へては流石にまんじりとは出來なかつた。

「明日の今頃は一體どうなるんだ、何處で一體寢るんだらう、凭んな氣樂な所でない事は解り切つて居る。然し吾々にとつて問題なのは露營ではなく天候唯一つなのだ。」

外には氷の破壞する鈍い音がつい近くから響いて來る。それは夜の生暖い事を豫告してゐるのだ。嫌な前徵である。

合せて置いた目覺し時計が午後十一時卅分きつかりに喧(ケタ)ましく鳴り出した。二人は溢れる許りの元氣で溫いフェーンの夜氣の中へと躍り出した。皎々たる月明の夜であつた。只巨大なるマッターホルンの陰影のみがツムットの谷を殆んど呑み盡す許り、降らん許りの星空には斷雲が東へと靜かに浮動して行つた。

簡單な朝食を濟ませて後、二人は總ての場合を考慮して其の目的と日附を書いた紙片を天幕の中へ投げ込

み、最後にゴム麻製の寢袋をルックザックの中へ詰め込んだ。

斯くして萬端の用意が整つていよ〳〵第一歩を踏み出したのは七月三十一日午前〇時を過ぐる十分であつた。フランツの背にはピトンカラビーネル、細引ゴムのテントサックと少し許りの食料、トニーの方は四十米突のザイル二本と二人分の金鏍を持つた。

午前二時、ヘルンリのスキス山岳會小舍に達したが其の窓からは早や蠟燭の光りがほのめいて居た。靜かに扉を開けて中に這入ると丁度小舍番は火を起してゐる所であつたので二人は口早に彼等の目的を語り、次の瞬間にはマッターホルン氷河の上に躍り出て居た。此處で各自シュタイグアイゼンを着け、一本の綱でアンザイレンしてラテルネの燈に照らされ乍らセラックの間を急いだ。時々ポキッといふ音やゴロ〳〵いふ響が薄氣味惡く傳はつて來る。矢張りフェーンの作用だ。セラック、シュパルテ、氷稜と交り代りに出て來る厄介ものを通り拔け漸くにしてマッターホルン氷河の「上方臺地」に出る。

頭上には約三百米突の氷壁が恐しい勾配を見せて居る。これは北壁の下部を爲すものであつて遙かの上方には眞の岩壁の部分が全く垂直になつて暗黑の中へと消えて行つて居るのだ。二人は急き雪崩の殘骸を越え、先の日に來たベルグシュルンドへ達したのは午前三時四十五分であつた。

太古の如き底知れぬ靜寂、それを破るものは氷柱からの水滴と時折りシュルンドの上顎を唸りを生じて飛び越えて行く石塊の音許りである。蠟燭の火を便りに二本のザイルを結び其の兩端に各自の身體を縛り付け、ハーケンとカラビーネルを分担した。

四時少し前、空には黎明の氣が漂ひはじめ周圍の山々は底氣味惡き鋭さを以て暗褐色の大空に鋸齒狀の輪廓を聳り立ててゐる。重苦しい夜の行進もいよ〳〵歡喜の鬪爭へと代つて行くのだ。

ザイル及びシュタイグアイゼンの再點檢を終り、トニーはフランツの方を一眼見て注意深くシュルンドを越えた。それから五十度は充分にある氷壁を左斜めに攀ぢて行つた。シュタイグアイゼンは軋音を立てゝ氷

に喰ひ込んで行く、踝(クルブシ)は外側に大きく傾いて居る。時間及びエネルギーの節約の爲にステップを刻まずに突進したが氷でも融けて居る場合には如何にしても足場を切らねばならぬ所である。

高度の增すに從つて氷は薄くなり、時々下層の岩肌が頭を出して來た。暫く登つてからトニーはある花崗岩の小さな突起に嚙り付かうとしたがどうしてもそれを摑む事が出來なかつた。火の出る樣にシュタイグアイゼンの爪は岩上をガチャ〳〵と削つた、何處にもハーケンを打込む場所がない。

Rückkehr! Jetzt schon? 彼の眼は瑞西山稜へと向いた、丁度其の時、其の上に居る豆の樣に小さく見える人々から朗かな歡聲が揚つて來た。と突然彼には「俺も男だ」といふ氣持ちがグッと湧き上つて來たのである。斯くて登攀技術の極致と血みどろの鬪爭は再び續けられて行くのであつた。

七月三十一日の太陽が赫々と東の空に昇つて來た時には、右方に已にかの素晴しい壁(ワントアインケルブング)の刻み目が始まつて居た。それは左から右へと急峻な傾斜を示しつゝ頂下約五百米突の所にある最後の壁に終つて居るのである。問題は如何にして此のガリーの基部に達するかにあつた。採るべきルートは殆ど垂直の一枚岩の上を斜めに走つて居る。而も其の上には三寸許りの氷層が張りつめてゐるのである。ほゞ中央に當る所に肋骨狀の岩脈が出て居て此の部分を二つにしてゐる。之を横斷するには下の岩肌から此の氷の薄層を剝ぎ取らぬ樣にシュタイグアイゼンの先を一寸ひつかける位の切目しかカットする事は出來ないのだ。

トニーは中央のリブに達してからそれに沿つて四十米突登つた所で摩擦作用を利用してフランッと代つた。それから六十米突許り攀ぢるといよ〳〵ガリーの一端眞近である。其處には垂直の岩棚があつた。角稜の右に沿つて二人はその稜堡(ボルウェルク)を攀ぢ北壁唯一の休み場たる岩瘤に達する事が出來た。ほんの僅かな間でも背中を壁に向ける事が出來たといふ事は彼等にとつて此の上ない喜びであつたのだ。遙かの方に展開される氷河と綠野、直下には二人の刻んで來た氷上の段階が眞珠の帶の樣に續いて居る。

「フランツ、あすこに俺達のテントが見えるよ」といふトニーの聲にふと眼をやれば其處にはポツンと打つた一の點。彼等の心は朗かであつた。想へば北壁に戰ひを挑んだ先輩達も此處まで來た者は一人だつて居ないのだ。もう此處まで來れば開扉の鑰は握られたも同樣であつた。然し乍らいつまでも凭んな所に愚圖ついてゐる譯には行かぬ。

徐々に而も確實に二人はガリーを突進した。岩が非常に脆弱な爲、時には中央を走り降る氷の地帶を直登し、他の場合には右手の岩場を攀ぢて行つた、一度は左手の容易に見えた岩場に瞞されて登つたが忽ち覆ひ被さる樣な直壁にぶつかつて元のガリーに戻る爲一時間以上の時間を空費して了つた。大小樣々な岩片がひつきりなしに落ちて來たが二人はいつも幸運に惠まれて其の彈丸の通路からは外れて居た。

陽が西方に沈みかけた頃、遂に氷圈(アイスバント)を越え百戰苦鬪の末、かの平滑な頂壁の一端に立つ事が出來た。左方には瑞西山稜の肩へと續く墜石によつて磨かれた氷溝(アイスリンネ)が走つて居た。今し其の肩の上には最後の案内者組(フューラーパーティ)が下降の途に着いて居た。二人はそれに向つて歡聲をあげた。彼等は已に目的を達して氣樂な小舍へと急いで居る。それを羨んで見た所で何にもならぬ。だが一體今夜の寢場所は何處にあるんだらう。飢はヒシ〳〵と迫り、咽喉は乾きに苦しめられ、小休もなき過激な勞働の爲に身體は殆ど麻痺して了つてゐる。先頭を切つて居るトニーは血に泌み寒氣に固くなつた指先にもめげず遮二無二の苦登を續けて行つた。二人は今や急速に疲勞を感ずる樣になつて來たが困難は減る所の騷ぎではない。岩骨、氷溝、水の流れを只繰り返す許り、全く單調其の物であつて、綱さへも最早鋼鐵の索の樣に固く凍つて了つて旨く捌く事は全然不可能となつた。

時は刻々と過ぎて、夜の前驅は今や谿谷に漂ひ次第に高みへと這ひ上つて來た。考へても嫌な壁上の夜營はいよ〳〵現實の問題となつて來たのである。熱病にでも浮かされたかの樣に四つの眼は泊り場を求めた、然し四邊(アタリ)にはホンの僅かの出ッ張りもない。

喘ぎつゝも尙最後の努力を振ひ起して二三回のザイル距離を登つた所、先頭になつて居たフランツが遂に

左方數ヤードの地點、薙ぎ落した樣な嶮崖の眞只中に外方に傾いた一米突平方位の岩株を見つけ出した。

此の時二人にとつて致命的なアクシデントにならうとした事件が起つた。それは丁度フランツが三米突許り上の不安定な場所に立つて居り、トニーは安全相に見えた足場に居る時であつた。フランツが尙登らうとした瞬間、ガラッといふ音と共にトニーの足場が足許から崩れて大きな岩塊が唸りを生じて墜ちて行つた。その時丁度トニーは平らな岩の突起を摑んで居たので電光的に兩手をそれにやり、宙ぶらになつて了つたが惡場からにも不拘フランツが上から確保したので危い所を免れる事が出來た。尙數米突の直登の後、左へトラヴァースして遂に二人は前記の棚へ辿り着いたが、此の時は已に八時も三十分を過ぎて居たのであつた。携行した高度計は四一五〇米突を示して居た。

兎も角露營の準備をしなければならない、それで最後の夕明りを利用して邊りの雪や氷を綺麗に拂ひ周圍にハーケンを打込んだ。身體をきつちりそれに結び付け冷くなつた指を以てシュタイグアイゼンの紐を解き、ピッケル其の他のものをハーケンの一つに縛り付けた。次に寢袋を被つて硬ばつた四肢を横にし、要心しながらルックザックから貧弱な食料を出し猛烈な空腹を靜めはしたが只全く慰めたといふに過ぎなかつた。そして寒氣の爲にはじめて思ひ出した樣な身震ひの起つた時、邊りの風物に眼をやつた。

寶石をばら撒いた樣な星夜の偉大なる宇宙、冷風は時々ゴム袋をふくらませては過ぎて行く。遙か二千五百米突下の下界にはツェルマットの燈火が瞬き溫き部屋と安易な世界を想ひ起させてゐる。然し乍ら彼等の腦裡にあつたものは只々陽光の下に於ける輝かしき「頂での憩ひ」であつたのだ、肌を刺す寒夜の露營、時の經過は遲々として進まなかつた。

× × ×

長い忍從の十時間は過ぎた。八月一日の朝は再び廻つて來たのである。七時、二人は新しき爭鬪へ、最後の突進へと振ひ立つた。

然し彼等は一歩踏み出すや否や、容易になるであらうと考へて居た期待は見事に外れて了つた。ザイル二

本の全長をトニーがリブに沿つて登り、次にフランツが先頭になつたが彼は十米突行くか行かぬに殆ど絶對絶命といふ樣な場所に突き當つて了つた。あらゆる手段を盡したが駄目だつた。そして最後に前の足場に戻つてしまつた。最早彼にはそれ以上の頑張りは出なくなつた。フランツが弱音を吐いたのも此處だつた。

然し良く見ると全然望みのない場所ではなかつた、只一つ、可能性を示すものは斜め右の急峻な黃赤色の岩肌の上に僅かに凍つた雪の層であつた。此の不安定な雪帶へのトラヴァースこそあらん限りの努力であつたが遂にそれも報ひられた。二人は此の根限りの爭鬪に夢中になつて居て激しい勢で迫つて來つゝあつた天候の惡化に少しも氣が付かなかつた。夙に彼等は厚い雲の中に閉ぢ込められて居たのである。顏には矢の樣に氷粒が當る、遠方には殷々たる雷鳴の轟き。猛烈に降りかゝる粉雪を冒して兩手は薄く凍つたクラストを無感覺に突き破る、急峻な雪のリンネは涯しなく、時に深雪に埋められた平滑な壁、北壁は一體いつ終るのか。嵐は遂に爆發した。霰は所嫌はず吹きつける。火花は散る、ピッケルは薄氣味惡くシュー〳〵と鳴る。だが何ものも二人の突進を妨げることは出來ないのであつた。

斯くして一九三一年八月一日午後二時、マッターホルンは遂に彼等の足下にあつたのである。イタリー山頂の少し左手に出た彼等は十字架の所にピッケルを拋り出し、とある岩蔭に身をひそめた。暴風雪の狂暴は極點に達した。二人に勝利の氣持ちの起つて來なかつたのは當然であらう。

荒天の隙を狙つて彼等は急ぎ避難所を後にした、今までの困難に比べれば瑞西山稜の降りは物の數でも無かつた。「肩」の下へ來たかと思ふと忽ち最初よりも以上に恐ろしい荒れが勃發した。雪と霰は奔流の如くに岩場を落下し、ザイルは忽ちの内に厚い氷の層に被はれて了ひ、邪魔にこそなれ少しも補助にはならなかつた。午後五時三十分ソルヴェイ小舍に辿り着いた時には上着は全く甲冑の樣になつて身體にくつついて居た。コチ〳〵に凍つた指で綱を解き、上衣を片隅に「立てかけて」から小舍中にある毛布をひつ被り最後の食料

も食ひ盡して憧憬の眠りへと這入つて行つた。

八月二日は正午に眼が覺めたが外ではまだ〳〵吹雪は吹きつのつて居た。

斯くして八月三日の輝しき太陽の光は二人の眼を喜びに充した。絶え間なく吹き狂つたあらしの三十六時間、その間二人は殆ど眠り續けて居たのである。

午前七時、暴風雪の二晩を庇護して呉れた懐しの小舍を後にして彼等は氷雪に被はれた岩場を降りて行つた。然しまだ一度も此處へ來て居ない彼等にとつては夏道の見當が一向につかぬ。止むを得ず出來るだけ山稜に從つて降り、午後〇時半、食料を持つて心配しながら登つて來た友人と遇ひ、二時に漸くヘルンリー小舍に辿り着く事が出來た。

全ツェルマットは二人の無事の下山を喜び共の成功を祝した。

トニーは云ふ、

「斯くして彼のマッターホルンの最後の秘密も奪はれた、乍然彼は尙昔のまゝの偉大さの裡に勇氣、力及(クラフト)び同時にアルピニズムの標石の永遠の表徴として聳え立つて行く事であらう。」と

參考文獻

„Die Alpen" (S. A. C.) vol. VII (1931)

„Jahrbuch des D u. Ö. A. V." vol. (1932)

"Alpine Journal" vol. 36, 40, 41, 42, 43, 44.

"Hours of Exercise in the Alps" by John Tyndall (1871)

„Alpines Handbuch" herausgegeben von D u. Ö. A. V. Band I

「登山とスキー」第十號

「山小屋」　第五號

追記

尙トニー・シュミットの登山經歷、其の他重要事項あれども、之は紙面の都合上他の機會に讓る事となりたり。

× × ×

× × ×

裏川と大日嶽（飯豐山塊）

鈴木岩雄

初秋の渇水期を利用し飯豐山塊西南の雄、大日嶽に源を發する裏川を溯行した七日間の山旅の記録である。

日時＝昭和七年八月二十七日―九月二日

行程＝小荒―要所口―ブナ入リノ平―八澤―大日嶽―小大日岳―メッケ穴澤―大日ヶ瀑―ヂッキラ松の尾根―タッベイノタ―八澤合流點―タッベ イノタ―要所口―小荒

一行　鈴木岩雄、佐久間喜左衞門、人夫―實川村鈴木政一

地圖　陸測五萬分之一、大日嶽

一、ブナ入リノ平まで

八月二十七日、曇

四時に起きて、第一に空を眺めて見る。一帶に曇つてはゐるが所々雲の切れ間から星が覗いて、溫度は十六度。天候は大丈夫らしい。今年の七月下旬十數年來の洪水でこの小荒發電所の防水壁を乘り越して荒れ廻つたといふ實川も、今は全く渇水して二十間程上手では飛び石傳ひに對岸へ渡れさうだ。此の分では可なりの所まで澤歩きが出來さうである。小荒を出發したのが五時十五分。これから實川本流の左岸を傳つて裏川の合流點までのトロ道は數百回も通つた道なので別段の注意も要しない。

四十分程で小荒堰堤につく。こゝは裏川合流點のすぐ下手で、高さ七十尺の堰で本流を止めてある爲めに上流は砂の堆積した河原をなして續いてゐる。裏川は優しいせゝらぎの音を立てながら曲りくねつて右手の方にかくれてゐる。實川橋はこの上手百米位の前川に架せられてある。橋を渡つた所で荷を下して休む。實川から來る佐久間君等は此處で待つてゐることになつてゐたが未だ見えない。今年の春から約束して置いた案内の運三は病氣で駄目だといふし、昨日實川に行つて賴んだ彦次郎も手の離せぬ仕事があつて來られぬといふ。どうせ夏の澤は知つてゐるものはないのだから誰でもよいといふことになつて政一を約束した。佐久間君も實川に住んでから三、四年になるが岩魚取りに

前川や裏川を少しは行つた事はあるが奥は全然知らない。これが却つて未知の所を知らうとする熱意となつて豫期以上うまく廻れたことになつたのであつた。

休んでゐると上手から馬の鈴の音がして草叢のかげからひょっこり政次郎さんが現れた。朝の草刈りだ。政次郎さんは大の山好きで信心家だ。家が實川村二番の物持ちなので強力はやらないが、親代々實川の住人で、昨年留次郎爺さんが亡くなり運三病んでは今は山の精しい人はこの人の外にない。好機とばかりの道端に休んで貰つて山の話をきく。裏川のムキ(本流)は八澤ではなくて西俣のメツケ穴澤の方であることゝ裏川は其の上流大日々瀑より發すると傳へられてあること(是は後程八澤合流點を見て成程と思つた)、小大日岳の西隣り二〇六〇米圏の峯より八澤合流點まで長く續いてゐる標高數字記入の尾根がヒルノコオゲ(蝶々の眉毛の意)と呼ばれ甚だ樂な登りであること、牛首三角點の下一六六〇米の岩峯より西南に派出し其の突端に一〇〇三米の獨立標高點を有する尾根をオコナイの尾根と呼んでゐることゝ今年實川口へ二組の登山者があつたが何れも裏川へ廻り、其の一組の二高生三名は七月上旬要所口からハネワタドを經て水晶峯の下を絡んでブナ入リノ平に出で、それよりオコナイの峯を越えてヒルノコオゲの末端に取付き小大日から本山へ登つた。今一組は新潟の稲垣某外二名が八月上旬に要所口—水晶峯中腹—ブナ入リノ平—オコナイの尾根—八澤の矢の字の邊で澤に入り、雪の上を樂に大日に取りつきそれからオンペ松の尾根を下つて實川に歸つたこと、前者は澤は歩かず、後者は八澤の上半分を殆んど雪の上ばかり登つたので澤の瀧などみんなかくれてゐたといふ話、そして二十數日も炎天が續いた後だから雪は大體消えたらうといふ事などを話してくれた。

間もなく佐久間君等と落合つて、六時二十五分愈々裏川の領域に入つて右岸の立派な道を行く。木炭運搬のため、道の手入れも行き屆いてゐる。小萩平を下に見て道が右手に曲ると足の下が急に開けた。道から一本の草も付けずに四十度の傾斜で川まで落ちこんでゐる。今春三月烏帽子岳に登つた歸途、この横へツリ二百米位の間を三十分も費してステップを切らせられた

惡い場所である。然し夏は樂だ。前方に烏帽子の登路スゲハナの突起が見える。

間もなく小野ヶ原の豐かに實つた田圃の下に出た。裏川堰堤はヨウ澤とイガミ澤の間で裏川を堰き止めて水を隧道に入れてゐる。傍に炭燒の小屋三四軒あつて附近の田圃と合せて小部落の格好になつてゐた。田を外れるとすぐに黑松澤、これを越えると黑松のヘツリだ。こゝで十分程休む。冬要所口に向ふ時雪崩の跡が幾條もついてゐて恐ろしい氣持で對岸から眺めた此の難場も、今は夏草が背丈程も延びてその中にスヽキやフヂバカマ、オミナヘシなどの秋草がやさしく咲き亂れてゐる。

赤瀧の橋場も其の上手のハナノ木淵の橋も渡らずに其の儘左岸の道を進んで七時五十五分に要所口の小屋の對岸に下りた。この附近までも今年は炭燒小屋が出來てしまつた。二十分程休んで愈々河沿ひに進むことにした。

小屋の上手百米位の所で第一回の徒涉（膝位）をして右岸に移る。地圖にはこゝからクヂノクラ澤の合流點迄八百米位の間ハコの記號が附してあるが、これから小澤の落口までは兩岸の岩壁はそれ程でもなく通過不可能の所はない樣だ。ほんとのハコは小澤の落口よりハネワタドの下手までゞある。第一回の徒涉をしてから五分で右岸が高さ十米位の苔のついた手掛りのない岩となつて河面につき出てゐるのにぶつかつた。其の上方の木にロープを下げて下る。大きな石の上を渡り乍ら暫く行くと河は左に折れその上手で股までの徒涉をして左岸にうつる。こゝで河幅二米位に狹められて小さなトロをなし左岸の突出した岩が水面附近で內方深く抉れて徑四米位の釜を横に伏せた形になつて居り、右岸の岩の上には之より稍小さな釜の形の凹みを作つてゐる。左岸の横伏せの釜の上を越えて下り又徒涉して右岸にうつる。こゝで左岸より小さな澤が瀑をなして落ち、兩岸は高さ三、四十米、傾斜六十度位の岩壁をなしてゐる。それから百米上流にて玉石の混つた淺い瀨を徒涉して右岸に移り少し上つて又左岸に戻つて小澤の落口に着いた（九時一五分）。小澤落口の淺瀨の中程に立つて上流を覗くと先きは眞暗で水が流れて

ゐるかどうかも分らない深いトロをなしてゐる。河は五十米上流で右へ曲つてゐるのでその先は見えない。

五分程休んで小澤の上手の凹みを二十米位搔き登つて稍平の所に出た。此處はハコの右岸壁上の長さ二百米幅六、七十米もある喬木林の河段丘で小澤島といふ。小澤島の河緣を廻りながら百米も登ると足下にあたつて瀑の音がする。ルックを下して藪につかまつて覗きこむ。相變らず眞黑い岩壁だ。その黑い中に落差八米位の瀑が白く光つてゐる。水量が可なりあるのでなかなか立派である。この外にも一、二あるが見えないし之よりも小さいと政一が說明する。小澤島を外れると岸高四十米位の横ヘツリ場所だ。ヒヤグラのヘツリといふ。地圖の裏川の川の字の邊にあたる。長さ二百米位、草の根や柴木に捉まつてクヂノクラ澤落口の下手に下りた（一〇時四〇分）。この下手二百米位の所にハネワタドがあり更に其の下流でナゴ澤が落ちこんでゐる。ナゴ澤がクヂノクラ澤の上手に合流してゐるのは地圖の誤りだ。クヂノクラ澤は八澤に次ぐ大きな澤だが低い所から出てゐる爲か水量は僅かであつて七米位三段の瀧となつて本流に合してゐる。此の澤の對岸は高さ三十米位の絕壁をなしてゐる。

こゝから右岸を五十米位岩を傳ひながら行くと河が瀨となつてゐてその先きが大分惡いらしい。ルックを下して更に百五十米程行くと流れは左折しそこで兩岸共に斷崖をなしてゐて登れない。引返してクヂノクラ澤落口の上手五十米の所より左岸に徒涉し、クーロアール狀の急崖を四十米位登つて段丘に出る。之を進むと次第に登りとなり河面より五十米位の處を行く。段丘が盡きてヘツリとなり小さな澤に出逢ふた。之に沿ふて河に下り中食をとる（一二時三五分—一時一〇分）。裏川の裏の字の邊の左岸である。この邊は河の幅も相當に廣く、所々にゴロ石の河原もあり瀧はあるが小さいものばかりである。陽が照つて來て暑くなつた。溫度は二十一度半。

三十五分程休んで出かける。大石の上を跳びながら左右に二回程徒涉して二百米程行くと又左岸より先刻下りたものより稍々大きな澤が入つてゐる。こゝで荷を下して上流を偵察に行く。百米位の上手で河は右手

に曲り小瀧をなしてゐる。兩側は僅か十米位の高さの岩壁であるが手懸りがない、そこで引返して來て右岸に渉り三十米位急傾斜を攀ぢ登つてこの澤を越え一寸した平に出た。對岸は五十米位上から五十度の傾斜で落ちこんでゐる。二時再び水のない凹みに沿ふて河の左岸に下りた。大きな石のゴロゴロした河原が續いてゐる。このすぐ下流で小瀧をなして河が右に曲つてゐる所が先刻偵察に來て引返した所らしい。河原を二百米位上つて右岸に渉り四米位の岩はルックをロープで引上げて進む。更に五十米上手で股までの徒渉をして右岸に移り僅か進むと又登れなくなつてしまつた。

クヂノクラ澤からブナ入ノ平までは大石の河原が大部分で時々小岩壁で遮ぎられ、瀧の小さいのが其の間を點綴してゐるといふ事がわかつたし、時刻も三時になつたので、これから泊場のブナ入ノ平までは上の方を絡むで行くことに定めた。左岸の四十五度の藪をかき上つて岸高百米邊を横に絡む。間もなくバアラ澤の下手に出た。小さい乍らも深く抉れて兩岸が屹立し澤に下れない。そのまゝ等高線に沿ふて二百米位上手に廻り流木の堆積した澤に下りた(三時三〇分)。この澤の上り口の所で新しい鉈目が一、二本入つてゐた。これは二月程前の二高生のらしい。二十日程前に新潟の連中を案内して來た政一は、ずつと高い水晶峯の中腹を絡んでブナ入ノ平に下りたと言ふ。澤の水を呑んで元氣をつけて一登りするとそこは素晴しく展望のきく松の木の生えた尾根になつてゐた。水晶峯より西北に派出した標高數字記入の尾根である。

中央に小大日の肩廣いどつしりした峯が眉を壓して聳え其の右手に續く大日の頂上は薄く雲が搦んで頭を見せない。大日の右に續く牛首の一岩峯より派出したオコナイの尾根が赤い肌も露はに裏川谷の中央に突き出た下には、これは又何といふ素晴しい平があることだらう。どの木もどの木も外に遠慮もなくすく〳〵と枝を延ばして自然に出來上つた形の毬の樣な山毛欅の大木が、目の下より上流に何町も續いてゐる。幅の廣い所は二、三町もあらうか。其の丁度中程に亭々たる一本杉が王座の樣に今宵の泊場を示して吳れてゐる。新綠紅葉の美は山毛欅林を以て最とする。未だ人足に

踏み荒されない自然の儘の原始林を見下して暫らく呆然と見とれて了つた(三時五五分—四時一〇分)。

此の尾根からトウガイ澤を横切つてブナ入ノ平の南端に下り、更に水無澤の砂地の底をヂャブ〳〵こいで行くと間もなく一本杉の左手に出た。一本杉は水無澤より三、四米高くなつた段の上にある。一本杉は實は根本で二本に分れ各々が目通り四米の大木である。其の根方の二十坪ばかりの落葉で柔い平地が今宵の寢床である。木の間を通して空は晴れるらしい樣子が見えるので安心してテントの中にもぐつた(八時)。

二、八　澤

八月二十八日、晴

割合に暖いのでぐつすり眠れて起きたのが四時半。食事を終つて出發したのが七時十分であつた。進路を眞北に取つて平の藪をくゞる。山毛欅の木の外は朴の木、川グルミの目通り二、三尺位のものがポツリポツリ混つて居り下の藪も大して密生してゐない。出發してより二十分にして平の北端と覺しき所に出た。足下は百米位崖をなして落ちこんでゐる。裏川の河中が細紐位に見える。オコナイ澤の落口は右手の藪にかくれて見えないが、その上手のウドの平の下あたりは高さ五十米位の斷崖となつてゐる。對岸は稍々低いらしいが矢張り取り付く所もないらしい。致方がないからこゝからウドの平に行き、そこから上手の八澤合流點までは横へツリで行く事にきめた。川緣の藪をくゞつてブナ入ノ平の盡きる東北端でオコナイの澤に下る。こゝは落口より五百米位上手らしい(八時一五分)。オコナイの澤を渡つて小尾根を越すと入小澤に出る。これから北東に向つて平均四十五度の苦しい藪を二百米程登ると一〇〇三米獨立標高點より南に派出した小尾根に出た(九時)。この尾根の西側に出てメツケ平方面を見下すと、是からの横へツリが甚しく時間を要する事が分つた。勾配は三、四十度位だが所々に赤ルげの頽れ岩が露出し、足場の惡い所ばかりずつと續いてゐる。そこで豫定を更に變更して、こゝから一〇〇三米の峯に出で、それから八澤に下ることにした。暫く眞北に登るとブナの枯木に「卯六月十五日、多藏、命」

と鉈で刻んである。これは彌平四郎の人に違ひないと政一が云ふ。刻んでから二十年も經過したものらしい。この尾根は割合に登りよい爲めにシ、狩りの登路になるのだらう。

九時四十五分峯より百米位下つた所の一つの瘤に休む。藪が短くなつて松が數本生えて居り眺望のよい場所だ。正面に烏帽子、馬糞穴がゴツ〳〵したいかつい赤肌を見せ、手前ヂッキラ松の尾根の八ヶ岳澤も赤ハゲだらけである。サヽヅキ澤の一一〇〇米邊に雪塊が少しばかり見え、其れより右手の正面に小大日の支尾根に本流が隱れやうとするあたりに瀑がある。下半分は手前の尾根にかくれて見えないがこゝから見てあれ程の大いさのものならば素晴しく大きな瀑だ。位置より考へて大日ヶ瀑に違ひない。歸り途には必ず訪れようと期待してゐた相手が想像に違はず立派なのに手を打つて快哉を叫んだ。

一〇〇三米の峯は其處から間もなかつた（一〇時三〇分―一一時）。此處からは八澤の大部分が望める。雪溪も殘り少くなつて、二、三百米位續いてゐると思はれる處が千百米と千三百米邊の二ケ所、其の上の千四百米邊に正に溶け去らんとする殘雪が僅かにあるのみだ。矢澤の澤といふ字の邊は可なり廣い河原になつてゐて花崗岩の石塊が白々と續いてゐる。此處よりオコナイの尾根は一旦低下して小鞍部となり、それからひた登りに牛首の一突起まで續いてゐる。一〇〇三米突起より最底鞍部まで地圖では百五十米位しかないが實際は其の倍位はある。

最低鞍部より八澤左岸の最下流の小澤を下る。この小澤を五十米程下ると右側に一寸した山毛欅の木の生えた平があり水も近く泊場としてはよさそうな所である。澤は西北に向つて居り水も僅かしか流れてゐない。澤の中途で中食をとり、落口の十米程の瀧をなしてゐる所はロープを右手の柴につけて初めて八澤に下りた（一時）。

水量は未だ相當に豐富で水も冷やかだ。直ちに右岸に徒渉し、三十歩にして又左岸にうつる。その儘暫く進んで澤が急に左に曲がる所に初めて瀑に出逢ふ。高さ十四米、幅三、四米位で瀑壺は十米四方位の深い紺

碧を湛えてゐる。八澤に下つてから百米位上流の位置である。これから上流には小瀑はたくさんあつたが、これ程の水量と落差を有したものには出逢はなかつた。私達はこれを政一瀑と呼ぶことにした。三十歩位戻り左岸壁の裂目より柴にとりつき二十米位登ると瀑の正面に出た。眞東より落ちる此の瀑が折からの西日をまともに受けてきらめく樣はなか〳〵の壯觀である。こゝからもすつかり晴れ上つた大日と烏帽子の頂きが藪の間より望まれた。左岸より瀑壺に落ちる小さい澤を越えて瀑の上手に下りた(二時一五分)。上流は幅五十米位の大石の河原が可なり續いてゐる。左右兩岸を縫ひ乍ら上る。政一瀑より二百五十米の所で高さ七、八米、長さ二十米位の瀧があり河原は此處で盡きる。荷を下して佐久間君と二人で右岸傳ひに偵察する。これより上手百五十米位は同じ位の瀧が殆んど連續して四つ五つも段をなしてゐる。そして最奥の瀧の上手で又澤は右へ曲り、そこで五、六米の瀑となりこの瀑壺に左岸より可なりの澤が七、八米の所より小瀧となつて落込んでゐる。この左岸より入る澤は矢といふ字の澤の一つ下手の澤らしい。兩岩壁が凹んでゐて登れないので引返し、瀑の下手五十米の所より右岸の草付きを登る事にした。この小瀧の連續は長さ百五十米、落差五十米位で勾配は大した事はないが右岸の岩盤が所々滑らかな面を濡らしてゐて、六貫目のルックを背負つては時々ヒヤ〳〵させられた。右岸の草付きを一寸登つて瀑の上に出たが其の上の小瀧が又登れぬらしいので更に上へ絡むことにする。と草を踏み躪つた熊の足跡と未だ新しい糞を見付けた。熊を追ひやる樣にと政一が盛んにヤホーイを奴鳴る。三十米も登つてから前方に更に高いガレにぶつかつたので更に上を卷く。岸高七十米位の處より右岸に大きな澤の入り込むを認め、此の澤を目懸けて六十度の急崖を殆んどぶら下りながら下る。最後に草付き二十米を下ると丁度向ひの澤の前に下りた(五時)。矢の字の所の澤らしい。

岩壁の深い八澤には早や夕闇がほのかに漂ひ初めた。そろ〳〵泊場を探さうとすぐに上り初める。百五十米位上流の右岸に五、六坪の臺地を求めて荷を下した。この前後二、三百米は八澤の中でも最も廣いゴロ

石の河原をなして居り流れは西南に向つてゐる。空は青く晴れ上り矢の字の澤の突端は赤々と夕日に燒けてゐる。氣溫十七度、水溫十一度（六時）。

八月二十九日、快晴

四時半起き上る。風は南西で雲足が早い。六時三十五分荷物を片付けて此處に殘し身輕になつて下流に向ふ。昨日下りた矢の字の澤（牛首三角點と一六六〇米岩峯の間より出る澤）の右岸は四、五十米の岩壁で左岸は草付きになつてゐる。新潟の人を案内した時はオコナイの峯より横へツリしながらこの草つきを下りたと政一が言ふ。其處から更に二百米を下ると河原は狹くなつて右へ廻り小瀧となつて奔落してゐる。こゝから右岸の岩を傳つて二つ三つの瀧を越えると昨日行き當つて高廻りした瀑の上に出た（七時一五分）。これなら瀑のすぐ上手の右岸に柴つきがあつてそこから下りれたのに、岩かげに隱れてゐたゝめ見えないので、昨日は二時間も藪の中を上り下りした譯である。五分程瀑の上で休んでから引返して野營地に戻つた。

七時三十分そこを出て右岸を上る。すぐ上手の岸高八十米位の所に高さ二十米、頂角三十度位の二等邊三角形を立てた樣な赤褐色の岩峯が上からぐつと澤を見下してゐる。其の上には松の木らしい木が少し生えてゐる。之は歸つてから政次郎さんに鷲ヶ巣場と云ふ岩峯である事を聞いた。下からも上からも鐵砲の彈を避けられる形になつて居り、昔から打ち取つた事が一度もなかつたと云ふ。

暫く樂な溯りを續ける。此の對岸は三、四十米の斷崖をなし眞赤な岩肌を現はしてゐるので近寄つて見た矢張り花崗岩で、色は表面だけを染めてゐるらしい。七時四十五分右岸に渡つて高さ數米の大石の下に出る。ここで右岸より小澤が入つてゐる。大石を左岸に避けて又右岸に戻り初めて一つの雪塊に出逢ふた。この下を通つて十五分程進むと流れの眞中に高さ七米位の頭の細い花瓶型の岩がある。右岸は岩壁で通れない。左岸に涉り大石の下で荷を下す。手掛りがないので二人で肩車を作つて佐久間君が登り岩の頭にロープをつけてこれにすがつて岩に登り上手に下りた。其處は殘

雪が河一杯に散亂してゐる。氷の破片の樣な尖つた角を持つてぐさ〳〵に碎かれてある。恐る〳〵上を渡つて右岩壁に登りついた。幅一尺位の棚だ。すぐ上手に小澤が二十米位上から飛沫を上げて落ちてゐる。ルックをロープで棚の下の五、六坪の河原に下してから下る（八時）。この河原の前に六米の瀑があり二條に分れて左の方がずつと大きい。この瀑から上は兩岸共に高さ二十米位の岩壁でこゝからその廊下の中は覗きこめない。上の柴つきまでは四十米もある。流れの幅は二、三米に狹められて第一の瀑の上は眞暗だ。こゝでルックを下して佐久間君と二人で偵察に出かける。右岸を少し登ると二條の瀑の上に同じ位のものが二つ連續してゐることが分つた。上二つの瀑はどちらも岩壁にかくれて一部分宛しか姿を見せぬ。大岩の所より百米程上流に登り、佐久間君は三つの瀑の上手を渡つて左岸へ、自分は其の儘右岸を登り岸高三十米位の所で打合す。對岸を登ると河が右へ曲り其の上手に六米位の瀑があり更に左に曲つて十米位の立派な瀑が見えるがその瀑の左岸上手へは下れぬといふ。自分の登つた右岸の方はすぐ上手に高さ三十米位の所から小澤が二段になつて落ちて居り、其の小澤の手前の草付きを此の上に三十米程上つてから澤を越えて右岸の藪にとりつける。そこで右岸を進むことにした。ルックの所に戻る（九時一〇分—九時二〇分）。

登り初めてより右岸の澤（馬形の東一九〇〇米より出る澤）を越える僅かの登りに三十分も費した。暫く藪へツリして一寸した岩の臺に出る。對岸より佐久間君が望んだ瀑はこの眞下にその全容を現はしてゐる。振り返ると澤の下流V字形の中央に御神樂嶽の平頂が紫色に霞んでゐて之に對峙する牛首山の最高點は晴れ上つた碧空を背に巍然と突立つてゐる。行手の右岸は岸高百米余の斷崖であるが中段あたりに狹い草つきが一本通つてゐる。之を百米位行けば上の斷崖はなくなつて上手の草つきへ拔けられると偵察に行つた政一が報告する。岸高五十米位の草付きを二百米位へツッて行くと、今までコンベックスの足下に隱れて見えなかつた雪溪が見え初めた。この雪溪はどの邊から初まつてゐたかわからなかつた。此處では下は三十度位の緩傾斜

であるが板の様な手掛りのない岩壁で下れない。而も下つてもその雪溪は上流二百米位の所から二百米も切れてゐて、上手の雪溪の初まりは兩岸の絶壁に挾まれた船尾の様な形をして突き出てゐて下流からは梯子でもなければ絶對に登れさうにもない。そこで現在の藪を更に百五十米位高廻りして小大日と其の西の二〇六〇米の峯の間より發する大きな澤に下りようと決めて中食をとつた(一二時ー一二時五〇分)。

これから上手の右岸の岩壁は河面より二百米も上から六十度の急峻な壁をなして一氣に澤までそげ落ちてゐる。ヒルノコオゲ尾根の一九四〇米突起より南東に派出した支尾根が其の向を南に轉ずる千三百米の邊よりさくりと切り取られた貌であらうか。八澤兩岸の尾根中第一の急崖にしてクロバナといふと後程政次郎さんに聞かされた。白凱々の嚴冬に逸早く眞黑な岩嶂を現はす爲めにかくは名を付けられたのであらう。

これからの二百米の藪登りは隨分つらかつた。約二時間の苦闘を經て一突起に出た。クロバナの頭の邊らしい(二時四〇分ー二時五〇分)。目の下に開けた小大日下手の澤が延々と遙か上まで這ひ登つてゐるのを見上げる。千七百米邊に雪塊がチラ〳〵見える。此處からは牛首最高點と三角點の間の二俣になつた澤の落口の稍下流で少しの間雪溪が見える。此處から東に向ふ小澤を下る。澤の中途にルックを下して佐久間君と政一が本澤まで偵察に行く(三時)。四十分程たつと、遙か下の本澤の雪の上から佐久間君が兩手を擴げて呼んでゐる。うまく下れたらしい。二人が戻つて來て一しよに下る。この小澤の末端で十五米位の岩をロープで下り小大日の澤に下りた。その下の高さ六米位の二段の瀧は左岸を下り、八澤に合する點の五十米位上手に出た。三人共裸になり瀧の中にダブルロープを下す。高さ七、八米位はある。瀧壺が臍位の深さでルックが濡れるので、背の高い佐久間君が瀧壺の中に待構へてゐてルックを受取る。背の低い政一はこの瀧壺で乳の邊まで水に濡れてしまつた。この下で又五米位の岩をロープで下ると左手から可なりの水量の澤が來て合してゐる。この澤の落口は十米位の瀑をなして今下つて來た澤に合してゐる。圖面の上ではどれだか見當がつかない。

此處から澤は可なりの瀧となつて八澤の雪溪の中に落ちてゐるが自分等は別れて左手の岩を越えて逆に本澤の雪溪に下りた(五時)。

此の雪溪の上に立つて下流を眺めた印象的の光景は今でも忘れられない。右岸クロバナの岩壁は下流より眺めた以上の立派さで大空を一直線に區切つてゐる。折柄の暮色で其の色は飽く迄も黑い。左岸も四十五度の傾斜で之に對立し、此の間七十度の窓には金色の襞で飾られた山また山が重疊し、夕霞の中に次第に遠ざかつてゆく。楚々木は眞近く、兎ヶ倉は稍遠く、御神樂は遙かに夕靄の中に煙つてゐる。裸の儘の寒さに我に歸つて泊場を探すべく立ち上つた。雪は下りた所の上手五十米でなくなり、左岸に飛び下りると其處で左岸より大きな澤が合流してゐる。上で見て置いた牛首山最高點と三角點の間の澤だ。地圖では小大日の下手より發する澤がこれより遙か下流に記入してあるのはどちらかの澤の落口の位置が違つてゐるのではないかと思つた。雪溪端より百米の上流右岸に十五米の大岩が突き出てゐて、その下が五、六坪平になつてゐる。此處をならして今日の泊場と決めた(五時二〇分)。この泊場のすぐ足下に右岸より小澤が入つてゐる。流れは此處では眞南を指してゐる。今日一日の行程は澤の長さ一粁に足らなかつた。

三、大日嶽を經てメッケ穴澤へ

八月卅日、曇

四時三十分起床。雲は低く東南東に向つて走つてゐる。氣溫十五度、水溫十度半(午前五時)。六時半下の雪溪を下つて見ようと荷物を置いて出掛けた。雪溪の上流端はアーチ形の斷面を示し兩脚の開き十五米位、眞中の薄い所は厚さ一米にも足らない。五十米下流の裂け目からは雨の樣に激しい點滴を落してゐる。この邊では八澤も水量はぐつと減つてゐて流斷面の狹い位では一尺平方位で、流量も十五個位と思はれた。

十五分にして昨日下つた澤の落口についた。落口は八米位の瀧が二條に分れて落ちてゐる。こゝから百五十米位下流で雪溪が切れて前進出來ない。昨日ヘツリの中途で澤に下つても此の十五米位の高さある雪溪の

下端にはどうしても上れない。而も兩岸は寄り付けない絶壁だから昨日の高廻りは避け得られなかつたことが明かになつた。

雪溪の表面は長徑一、二尺、深さ四、五寸の楕圓狀凹面をなしてゐてよい足溜りとなつて歩くに持つて來いだ。朝陽を浴びた處は盛んに白い息を上げてゐた。七時十分泊場に戻り一休みして出發する。

この上流は又例のゴロ石の河原で樂であつた。二、三回左右に徒涉して行くと左岸より小澤が入る。此の對岸は十五米位の壁で雪の碎片で澤の中を埋めてゐるが其の上は渡れないので左岸を行く。雪が盡きて流れが四十米程の長さ二つに割れて流れてゐる。其の中の島を行き、島がつきると又雪溪に當つて右岸より其の上に出る。この雪溪はオコナイの尾根よりよく見えたものである。七時五十五分右岸より大きな澤が合してゐる所に出た。これは小大日の上手より發する澤らしく落口が他のものゝ樣に瀧をなしてゐないで石塊の間を幾條にも分れて奔落してゐる。間もなく雪溪が盡きて左岸より小澤が入る。この小澤より上流三十米の所に二段の瀧が現はれた。高さ合せて十米位と見當をつけて右岸の岩にて休む(八時五分—八時二五分)。

これより上流は殆んど小瀧と奔湍の連續で流れに些の淀みがない。兩岸壁は高さ十五米から二十米位の絶壁である。最初の高さ五米の小瀧を開脚で膝を濡らしながら登ると左岸より又小さな澤が入つてゐる。この小澤の上手の所に此の附近で一番見事な瀑が懸つてゐる。十米位落下して方向を右に曲げ更に四米位を奔流してゐる。二人で其の登路の偵察してゐる間にスケッチした。この瀑を一番近い櫛ヶ峯(牛首山)の名に因んで櫛峯瀑(クシミネタキ)と呼ぶことにした。政一が第一回に案内して來た二十日ばかり前にはこの邊一帶が雪溪の上を登れたといふ。この瀑はオコナイの尾根より望まれる眞正面の位置にある。

瀑の兩岩壁間は四、五米位あつて左岸の中段に立派な足場になる岩の臺がある。そこ迄は容易に登れるがその上に左岸寄りに高さ五米位の大石がのしかゝつてゐるので登れない。瀑の落口はこの石の左側で狹められ巾半米位になつてゐる。下から綱を石の頭に投げか

けるがうまく引掛からない。そこで政一がルックの所まで下り左岸の岩の裂目を傳つて上つた。二十分もするとヒョッコリ瀑の上に現れた。早速ロープを投げ上げてこの難關を通過した(九時四〇分)。更に此の上の六米の小瀧は佐久間君が空身で左岸の壁を傳つて登りロープを垂らして攀ぢ登つた。この瀧の上手から又雪塊が續いてゐる。これは雪橋だつたのが昨日あたり落ちて碎けたらしく破片が眞新しい。洗濯し立てのシーツの樣な青味を帶びて角がナイフの樣に鋭い。中程の兩脚の開き十米、巾三米位の雪橋が殘つてゐる下を潜る。今日の夕方までには落ちてしまふだらうと思ふ。この上手の雪の中へ左右兩岸から向ひ合つて小澤が入つてゐる。最後の雪溪七十米位上り切ると左岸より又可なりの澤が入つてゐる。こゝで雪は盡きた。

こゝよりは左岸も右岸もなくどちらも自由に登られる大石の堆積が續き兩岩壁も見えなくなつた。石コロも角のよくとれてゐないゴツ〳〵の花崗岩である。この邊の澤の工合がどうもはつきりしない。澤の中ではわからないが以前牛首三角點から大日南面を寫した展望寫眞を見ても大日岳の西平距七百米の小鞍部より南下する澤と大日絶頂より下る本澤とは可なり離れて別々に、牛ヶ首より一直線に下つてゐる澤に落ちこんでゐる樣に見える。地圖では是の二本が合してから牛ヶ首よりの澤に落ちこんでゐる樣に示してある。其の外八澤の枝澤の位置が可なり實際とは違つて記入してある樣に思はれるが他日の研究にまたねばならぬ。

十一時四十五分右岸より八米位の高さの瀧が落ちてゐる所の下に出た。大日嶽絶巓より眞南に出てゐる本澤である。眞直ぐの牛ヶ首に這ひ上つてゐる方は水は殆んど盡きて本澤の水の五分の一もない。牛ヶ首の澤を十五米程登つて右岸の草付きを絡み本澤と牛ヶ首の澤との間の尾根を登る。これから上は岩壁は全くなくて石コロばかりの小さな澤を水が奔落してゐる。落口の瀧の上手に三段の瀧がある。各々七、八米位あるが水量が少いから見榮えがしない。七十米程上の瘤にて中食をとる(一二時—一時五分)。此處から見える八澤は一直線に一里も下流まで下り軈て右に曲つて見えなくなつてゐる。楚々木山の右肩の上に小荒部落の田圃が

ポッチリと白く光つてゐるのが懷しく望まれた。このあたりにミヤマリンダウ、トリカブト、シラヒゲサウ、トリアシシャウマなどがたくさん咲き亂れてゐた。

二十米程笹藪をこいで澤に下る。これ位の澤は足場はよいし、冷たい水は飲めるし、涼しいし、どんな道よりも登りよい。ぐん〳〵標高を高めて四百米位登つた。と澤の水が急になくなつてゐる。よく見ると澤の左岸の草叢の中から滾々と岩清水が湧き出でゝゐるではないか（一時四五分―一時五五分）。上流はカラ〳〵に乾いてゐる。ルックを下して腹一杯御馳走になる。氷の樣に冷たい。寒暖計を入れて見たら三度であつた。これから少し登ると前方に二つの岩峯が現れた。右の方が高い。右の方に向つて岩の凹み（澤の形をしてゐない）を登ると砂地の草原となり、それを登つて笹藪と這松と闘ふこと十分間、遂に大日嶽の絶巓に辿りついた（二時二五分―三時）。

飯豐本山や大尾根方面は密雲に包まれて少しも見えないのに、今登つて來た西南實川側はカラリと晴れて陽の光が眩しい。今年の六月登つた時見えなかつた高さ一尺二、三寸の銅の鳥居が御鏡の前に安置してあつた。よく見ると「奥の院、實川、中屋家」と小さい字で刻んである。中屋といふのは出發のときに實川橋の上で話を聞かせて呉れた政次郎さんだ。政一はこれは今年の夏自分がお供して此處へ背負ひ上げたんだと後になつて說明した。西微南に小大日岳の尖つた頭は時々雲の間より隱見する。時間が早かつたら本山まで往復しようと思つてゐたが、もう遲いし先には未知の裏川本流下りを控へてゐるので本山行きは割愛してすぐに小大日岳に向つた。

これから小大日までの巾廣い尾根は私達の散步道だ。裏川側は短い草が一面に地肌を覆ふてゐて、イワギキキャウが今を盛りと咲いてゐる。山の唄を歌ひながらのんびりと步いた。大日より丁度三十分にして小大日岳の三角點に着いた（三時三〇分―三時五五分）。此處で荷を下して八澤の方面を見下してスケッチをする。昨晩の泊場の下手の雪溪が牛首三角點の上手の澤あたりで一部分見え、其の下手に例のクロバナが茅葺屋根の樣に八澤の中にのめり出てゐる。四時少し前に

出發する。小大日岳の西の二〇六〇米の峯に來たときに、ほんの一時雲の切れ間から飯豐本山と御西が姿をチラと覗かせて又すぐにかくれた。この峯から西南西に下るメツケ穴澤が裏川の本流をなしてゐる。上流は暫くは緩やかな草付きと灌木帶であるが右岸上の一六六五米獨立標高點の上手で澤は左折して其の下あたりから惡くなつてゐるらしい。

暫くは草つきを幾度も滑つては尻餅をつきながら澤とも見られぬ凹みに沿ふて下る。四時四十分又左手の草叢の中から岩淸水が湧き出てゐる。水量は八澤のものに劣るが冷たさは同じ位だ。千七百米附近で左岸より小澤の水が合して初めて澤の形になつて石コロも現はれて來た。更に百米も下ると高さ十米位の瀧に出喰はした。右岸の笹藪を下る。これより五十米位の間を置いて七、八米程の瀧が二つあつた。上のは右を次のは左の藪を絡んで下ると其の下で右より同じ位の水量の澤が入つてゐる。この澤も落口で十三米位の高さの三段の瀧となつて並行して落ち瀧壺で本澤と合してゐる。下流百米位の所にて澤は左折し、其の曲り目に雪が見える。前面烏帽子の岩峯は夕日を背面に受けて影繪の樣に夕空に浮んでゐる。時刻も遲いので先きを急ぐ。五時四十五分メツケ穴澤初めての雪に出逢ふ。右岸より一つの澤が其の中に落ちてゐる。澤の下手に雪橋が架けられて居り、兩脚の開き十五米である。この雪は極く僅かでなくなり更に五十米下流で左岸より小澤が入つてゐる。この澤はヒルノコオゲ尾根の一九四〇米の突起より眞西に下つた澤である。この澤の下手三十米の左岸に二坪位の平の磧を見出してルックを下した(五時五〇分)。然し此處はベッドの材料になる草付き迄は登れないし、薪木も河原には少ししかころがつてゐない。もつとよい所があつたらとルックを下してから下流へ行つて見たが百米位下手に兩岸が小斷崖をなした五、六米の小瀧があつて行き止まりとなつたので引返してさつきの所を野營地と決めた(六時一〇分)。

四、大日ヶ瀑

八月卅一日、晴

氣溫十五度、水溫十度半(午前六時)、風向、西南。今

日も薄雲がかゝつてゐるが矢張り晴だ。前方馬糞穴の支脈から明け初めて管名山塊の右に越後平野が模糊として擴がつてゐる。午前七時出發した。左右兩岸を縫ひ乍ら石の上を飛び〳〵に進む。昨日引返した所に出たのが五分後であつた。六米位しかない小瀧だが兩岸が凹んだ岩で手がゝりがないのでロープを下げる。右岸の岩の裂目に小丸太を挾んで此の根元に大石を二、三箇積んで、ダブルロープにして下りた。すぐこの下で又同じ位の二條に分れた小瀧がある。右の小さい方を矢張りロープを用ひて下りたが飛沫で腰まで濡れてしまつた。泊場より三百米位下流の左岸百五十米位の間は緩やかな草付きで薪もありこの邊のよい泊場である。昨日は今少し早ければこゝで泊れるのであつた。この草付きの終りで河は右に曲り西北に向ひ下る事百米にして又左に曲る。この邊は河原に小砂まで現はれて大きな虎杖（イタドリ）が川岸から流れに頭を浸してゐる位のおだやかな澤である。

八時五分今までの單調を破つて流れが九十度左に曲つたと思ふと前方に可なりの瀧が現れた。高さ十二米、巾二米で下の瀧壺は眞黑で深い。瀧壺から右に曲つて直ぐに第二の瀑（高さ七米）がありその下にも續いてゐるらしい。下に偵察に行つて來た佐久間君が歸つて來てなか〳〵面白い所だと云ふ。皆で五つの瀧があり一つ落ちると其の度毎に向を變へてゐる。兩岸は十五米位の岩壁で其の上は草付きの稍々ゆるやかな傾斜になつてゐる。其の中で最初のものが一番大きくて立派だ。これを私達はメツケ穴瀧と呼ぶことにした。第一のは右岸の岩壁にうまく手懸りを見付けて下り、次のは左岸を、第三は又右岸第四は左岸をどれも手懸りはよいので樂であつた。然し一段下る毎に流れを飛び越えるのであるから豐水期には此の眞似は出來ないと思はれた。第三は五米、第四は九米あつて二番目に大きいが傾斜が緩いので見榮へがしなかつた。第四の瀧の下で右岸から小澤が入つてゐて河は大きく左に曲る。第五の瀧を越えると石コロの積が二、三度屈曲して間もなく金華穴澤の合流點に達した（九時〇五分）。

愈々大日ヶ瀑だと云ふので草鞋の紐を締めて出かける。ルックは合流點に置き寫眞機とロープだけを肩に

した。合流點は平な流れで上手二十米位の點に高さ十米の眞直ぐに落ちる瀑がある。巾一米位で水量の少ない爲立派ではない。左岸の藪を登る。五十米位登つて漸く下り場所を見出して五米ばかりの小瀧の上に出る。これから合流點の瀑までは覗けなかつたが、音も聞えないし左して大きい瀑があらうとも思はれないので上流に溯つて見る。百米位行くと小瀧があつたので右岸を登る。「山岳」二十五年の附錄地圖から見れば此の邊に違ひないと思ふが兩岸なだらかな草付きが手の屆くあたりまで下つて居り、山容がそれらしくもない。左岸より小澤が合し、更に五十米上ると右岸より一つの澤が入つてゐる。合流點から一基米位進んだ。又少し行くと右岸から本澤位の澤が入つてゐる所に出た(一〇時)。一六六五米獨立標高點の西より發してゐる澤である。これから上の澤は一層溫和な樣子を示してゐるし、オコナイの尾根からは全然かくれて見えぬ位置になつた。高陽山あたりから眺めた金華穴澤は上半分全く岩壁のない藪澤になつてゐる事を知つてゐるので、これ以上溯らないことにして引返した。十時十五分、さつき下つた所に戻つた。その下流の小瀧は左岸を下る。するとすぐ下に高さ十七、八米位の細い瀧が現れた。合流點より平距百五十米位上流の所である。水は巾半米の岩の樋を傳つて四十五度位の傾きを十米程下ると其處から直角に右へ曲がり、こゝで飛沫を上げて七、八米の所を飛び下りてゐる。上の方は殆んど音も立てずにする〳〵と滑り下りてゐる。この瀧の上からオコナイ尾根の一〇〇三米の峯が見える。大日ヶ瀑はこれに違ひないと思ふと拍子拔けがした。然し遠くから眺めた姿に比して何と貧弱な實際だらう。右岸の柴にロープを結んで下りた。下から眺めても矢張り女性的だ。豪壯さなどは微塵もない。それでも記念にとカメラにだけは收めた。この下流四十米を下ると高さ八米の瀧がありそこから少し下れば直ぐに合流點の上手の瀑だ。落膽しながら左岸を絡み合流點へ戻つた(一一時一〇分)。瀑や奔湍の連續してゐることから由來したといふ金華穴澤の名前は返上しなければならないなどゝ言ひ乍ら合流點を出發した。

樂な下りを三、四百米下つた頃高さ八米位の瀧にて

行き止まりとなる。左岸の草付きを絡みこの五十米下流にてロープを用ひて河原に下る(一一時三五分)。中食をとつてゐると下流に偵察に行つてゐた政一が歸つて來た。この下に大瀑があつて中段の岩から見下しても下が霞んで見えない位だとせき込んで報告する。話は半分と見ても大したものだ。御飯を早速やめて行つて見る。五十米下流で河は左に折れ、二、三の小瀧を右岸によけて進むと河は更に右に折れ、こゝに七米の瀑がある。この下に出ると目の前が濶然と開けて、遙か前方の水晶峯が目前に現はれる。瀑だ。瀑だ。第一の瀧の上手より滑らかな帶紅、帶綠の細かい黑斑點のある灰色の岩磐を這ひ乍ら下り、第二の瀧の脇を十米位滑り落ちると主瀑落口の左手の岩頭に達した(一二時三〇分)。こゝでゆつくり腰を落着けて觀察をする。第一と第二は落差十米、長さ二十米位の瀧で其の下の第三の瀑が主瀑をなして一氣に四十四米の斷崖を奔落してゐる。主瀑壺までは大體北西より南東に向つてゐるが、主瀑の下第四の瀧は六十度右へ曲つて其の落口は見えない。主瀑は初め巾二米位で下り十五米程落ちて岩の突起にあたり、水は此處にて巾數米に擴がつて瀑壺に落ちる。瀑壺は方四十米位の廣さで兩側は大きな凸凹をした斷崖である。オコナイの尾根より見えた大日ヶ瀑は此の瀑であつた。多分第三の主瀑の半分位の上手が見えるだらう。三十分にして中食個所に引返してどちらを下つたらよいかについて相談する。政一は右側の松尾根を行き瀑壺のすぐ上の柴にロープを垂らせば壺までは下れるといふ。佐久間君は到底右岸は駄目だから左岸を絡んで丁度瀑壺の中に落ちてゐる小澤を下れば下れるらしいといふ。今まで從順にして一つも異議を云はずについて來た政一が今度丈けは眞赤になつて主張するので政一の言ふ通りに下つて見る事にした。右岸の藪を僅かに登つて其の儘横にへつつて行くと瀑の眞上の松の尾根に出た(一時四〇分)。サヽヅキ澤と金華穴澤の間の尾根の末端に近い所だ。此處からはサヽヅキ澤も烏帽子澤も目の下に見える。政一がロープを持つて下る。

休んでゐると二十分程して遙か下の方から「オーイ」と呼ぶ。遂に下りたなと腰を上げ、柴木にぶら下り乍

ら下つた。主瀑の上から三分の一位の所まで下つたと思つたら柴付きが無くなつて其の下は七十度位の斷崖だ。ロープは一番下の柴に結んである。瀑を右手に見乍ら一人づゝそろ〳〵下る。二十米のロープが盡きて其の下に補助ロープが二つ折りにして繋いである。瀑壺の右岸の一寸とした岩の上に下りた(二時)。ロープの總長三十米の一倍半は優にあるから主瀑だけでも四十五米位はあるらしい。此處から近々と見る瀑の雄大さは拙い筆では表はせない。眼を閉ぢて冷え〳〵とするしぶきを浴びて突つ立つてゐると、友もない、我もない、親も子もない。たゞ在るものは自然にぴつたり一致した一個の生命が戰いてゐるのみである。

暫くにして吾に歸つた。右岩壁を傳つて行くと主瀑壺より四十米にして第四の瀧の落口に出る。こゝで左岸に移つて主瀑を撮影する。第四の瀧は落差二十五米、第二位の高さを有してゐるが巾は二米に足らない。其の瀧壺より又左折して第五の瀧となる(高さ十二米位)。其の下に今一つあるらしいが見えない。此處一ケ所に八つの瀑瀧が連續してゐることになる。裏川本流も谷は淺いし岩壁も大してないと不滿をそろ〳〵感じてゐた氣持が一遍に何處かへ吹つ飛んでしまつた。

小一時間も瀑壺に費して上のルックの所に戻つたのが三時に近かつた。これから尾根を上手に少し戻ると松の皮をむいた所に熊の毛が一塊附いてゐた。訪れる人も全くないこの神秘境は熊のよい棲家となつてゐるらしい。瀑の横の邊より反對側の小澤を下る。サヽヅキ澤合流點下手の河原が直ぐ目の下に見えてゐてなか〳〵達しない。小瀧らしいものを二つ三つ下つて漸く合流點上手五十米位のサヽヅキ澤に下りた(四時一〇分)。此處は玉石の河原になつて居り河原の上手でサヽヅキ澤は八米位の瀑になつて落ちてゐる。

裏川の右岸に這入つたのがこれから五分後であつた。こゝより本流二、三百米上手は直徑數米の花崗岩の巨石の累々と積み重ねられた特色のある河狀をなしてゐる。その大石の中に稀に一つ二つ帶綠又は帶紅灰色に黑の小斑點のある花崗斑岩らしいのが混つてゐる。瀑の落口の岩らしい。脆弱な花崗岩が次第に掘られて行くのに斑岩の所で河床がしつかり頑張つてゐる

のであんな立派な瀑が出來たのであらうなどゝ素人考へで想像した。泊場は合流點下手三十米の所を徒渉した左岸の河原に決めた。河原は流木もあり草も手近で、今までの中で一番よい泊場であつた。夕食の出來る間に河の中で沐浴をする。水溫は十九度で谷川とは思へない暖かさであつた。

五、ヂッキラ松の尾根へ

九月一日、雨後曇

四時に目覺めたらテントにポツリ〳〵音がする。今頃の天候が五、六日も續いた後だから一日、二日の雨は豫て覺悟してゐたから平氣であつた。炊事を政一に托して佐久間君と二人で昨日の瀑の下流を探ぐりに上流へ向ふ。サヽヅキ澤の落合ひより上手は河原の巾十五米位の所を白い花崗岩の大石がギッシリ詰つてゐる。河原といつても勾配は十五度位はある奔流だ。途中二ケ所ばかり徑七、八米の石が登れないので左岸の草付きを絡んだ。この頃から雨は次第に本降りとなつて腹まで濡れて了つた。合流點から二百米位登ると奔湍が二つに割れてゐて二十米位の瀧をなしてゐる。左岸壁を十米位登り中程の岩に出で五米上り更に右岸の藪にとり付いて一寸登ると流れが左折する所に達した。其の上は二十米の高さの瀧となつてゐて落下し兩岸の岩は滑かに磨かれて登れない。瀧は二段になつてゐて第一段が落ちると左に曲り第二段の下で又右に曲り美しい形をしてゐる。この瀧が昨日主瀑壺の緣から見えないと言つた瀧であつた。こゝからサヽヅキ澤合流點まで見下され平距、三百米位と見當をつけた。大日ヶ瀑は結局八つ許りの段に分たれ其の落差を合せたら百四十米余にもなるらしい。是程の瀑は實川系では勿論第一である。余り感心してゐてずぶ濡れになつたので急いで引返して朝食を攝つた(六時三〇分)。

雨は激しいが未だ水は澄んでゐる。七時三十分泊場を出發した。河原を百米下ると其の下流端が十米位の瀧となつてゐて二條に分たれてゐる。右岸の瀧を流してゐる樋狀の岩緣を傳つて下る。更に其の下の八米程の瀧は右岸の草付きを下つた。次第に岩壁が現はれて河の狀況が險しくなつて來た。

出發してより十五分にして烏帽子澤落口の上手に達した。長く見ても此の間は四百米に足らない距離であるのに地圖では其の二倍位に示されてゐる。自分達の感じから之は金華穴澤とサヽヅキ澤の間の尾根がもつと地圖より下流まで延びてゐるのではなからうかと想像した。つまりサヽヅキ澤の合流點がもつと烏帽子澤の落口に近付けばよいと思つた。烏帽子澤の落口は實に立派な瀑をなしてゐる。高さ二十米位で上の方は十二米、下の方は八米の段になつてゐる。折柄の雨で稍褐色を帶びて水量も堂々たるものだ。左岸の段から落口の前に下りる五米の岩はロープに傳つて下りた。

雨は益々ひどく水も濁つて來た。瀑の落口の前より左岸の岩壁の棚狀の段を傳つて進むと二十米位で無くなり河面から四米位高くなつてゐて今度は其處から下りられぬ。棚の上手に戻つても下は徒渉の出來ない淵だ。雨の中で暫く考へたが丁度棚の上二米位の所に岩の瘤が一つある。そこに目をつけて棒で之の頭にロープを掛け、ロープを外側に引かない樣にして全く吊り下つて流れの中に下りた。幸ひ水は未だ股までしかなかつた。右岸に徒渉して見ると百米前方の對岸にブナノ木の平が見付かつた。あそこでテントを張らうと再び股位の徒渉をして左岸に移り、ブナノ木島の下にルックを下して下流を偵察する。此處から約二百五十米位は河原をなしてゐるが其の末端で河は左折して奔湍となり次第に惡くなるらしい。引返して上のブナノ木島に登る(八時四〇分)。こゝは烏帽子澤對岸の岸高七十米位の所にあり、長さ二百米、巾百米、山毛欅の喬木が繁つてゐて中程を貫いて小さな流れがある。なかなかよい泊場である。今日は此處で滯在とテントを張り焚火をして、ビショ濡れの服を脱いで乾かした。下に少しく見える裏川は濁流滔々として水音激しく今は物凄い流れとなつた。一時間ばかりすると雨は息んだ。テントに寢ころんでトロトロとまどろむと山毛欅の木でミン〳〵蟬が呑氣に鳴き出した。

十一時半中食をすませて河を見下すと僅かの間に又河の水は澄んで元の靜けさに歸つてる。空も明るく次第に好くなるらしいので仕度をして出發した(一二時五〇分)。下の河原は二百米程下流まで見てあるので、す

ぐに此處より下らずに其の儘横に絡んで二百五十米位の所で小澤に合し、これに沿ふて河原に下りた。水量は以前より幾分多いと思はれる位のものである。これから河流は所々小岩壁をなし數回小屈曲を繰返してゐる。左右兩岸を縫ひながら下つた。左岸より可なりの澤が十二米位の二段の瀧をなして入つてゐる（二時）。三杯汁の澤にしてはあまり水量が少くな過ぎるが、それからずつと下流に下つて眺めて矢張り是に違ひなかつたといふ事がわかつた。此の邊は河巾も相當廣く所々に稍深い淵の樣なものはあるが兩岸はすぐに柴があり通過不可能な所はない樣だ。三杯汁澤の下手の本流左岸に三、四百米の間斷崖記號が地圖に記入してあるがそれらしいものは見當らなかつた。却つて上流の烏帽子澤落口附近より岩壁も低く流れの近くまで柴付きになつてゐる。

二時五十分右岸から小澤が入る。ヂッキラ松尾根の一二四一米獨立標高點より東に下つた澤である。この落口で河は百二十度位ぐつと左に曲つて大きな瀑となつて落下する。高さ二十米位はある。落口は三米位の巾で之が少し落ちてから巾六米位に擴がり之から一氣に十五米位の懸瀑となつてゐる。大日ヶ瀑の群を除いては一番大きくて立派だ。この瀑の右岸は三十米の斷崖で内面がコンケーブに抉れてゐる。左岸はヒルノコーゲの末端で、これから上は山毛欅の生ひ繁つたなだらかな尾根となつて馬形の邊まで續いてゐて、一九四〇米の突起は雲が卷いてゐる。ルックを下して左岸のコオゲ尾根を絡み瀑の正面に出た。對岸は地圖通り高さ三、四十米の斷崖が續いてゐて、其の上は一寸としたブナノ木島で泊場に好さそうだ。この尾根よりブナ入ノ平も間近に見え其の上手の掛圖（カケヅイワ）岩も見えると政一は元氣付いて來た。カケヅ岩は水無澤右尾根の一岩壁で掛物の樣な模樣のある一枚岩であるとのことであるが、こゝからは紫色の稍大きな岩磐が半分ブナ入ノ平の上に覗いてゐるのみだ。この瀑はヒルノコオゲ尾根の末端にあるから甲毛瀑（コオゲクキ）と呼ぶことにした。

再び瀑の上に戻つて右岸のブナノ木島に向ふ。ブナノ木林の中、八澤の丁度眞向ひで休む（四時一〇分—四時一五分）。右足下のクーロアールを通して裏川の本流

が二百米位下流まで見える。八澤の水を併せて流石に水量は多いが兩岩壁も其處では幾分低くなつてゐて河原にも下れさうである。ガレに突き當つてそれからヂッキラ松の支尾根を登る。メツケ平の眞向ひの尾根で平均勾配は四十度位はある。その五百米の登りは辛かつた。水は全くない。そろ〳〵薄暗くなつて來た。汗ビッショリかいて尾根の千百米邊の稍平な所に攀ぢ登つた(六時二〇分)。尾根の西南側はブナの大木が下まで續いてゐるが水は無い。仕方がないから今晩は飯は拔きにしようとテント丈けは張つた。西側を百米程下つて見たが凹みに濕り氣さへないのでがつかりして戻つて來た。汗をびつしよりかいてゐるので殊更渴を覺えた。お晝の余り少しと罐詰を二つばかり三人で平げてホットした。風は眞西から時々ごうつと吹き寄せては大木の枝を鳴らして過ぎて行く。黑雲の去來が早いが雨は遂に降らなかつた。八時就寢。

六、小荒へ

九月二日、快晴、無風、氣溫十九度(午前五時)。午前四時半起床。東の空に曉の明星が晴れ〳〵しく輝いてゐる。一抹の白雲が東の空に茜色に燒けて、山毛欅の太い幹から白々と明けて行つた。東北の木の間から烏帽子の頭がチラ〳〵覗く。五時十分出發する。これから二百五十米の下りは猛烈な藪だ。一基半ばかりの所を一時間もかゝつてタツベイノタに着いた(六時一〇分)。こゝでルックを置き飯盒と米とを持つてタツベイ澤右岸の尾根を下る。十分ばかりでチョロ〳〵水を見出して早速飯を焚いて昨晩からの空腹を滿した。八時半空身の足の輕さでどん〳〵下りタツベイ澤を越えて河段丘に出る。こゝは本流より百米位の高さにある山毛欅林の泊場である。これから段丘の中を裏川上流に向つて所々に鉈目を入れながら進んだ。一本のブナの木の根元に一坪位の面積をトビ茸が一面に覆ふてゐた。今少し早かつたらと政一が惜しがる。肩に搦みかゝる山葡萄の蔓を手繰つて青い房の一粒を口に入れる。未だ早いので杏の樣な酸味が強いがなか〳〵捨て難い風味がある。水の涸れた凹みを一つ越えて暫く進むと河原に下る所に着いた。政一は八澤の合流點は知

らないが此處から兎に角河原に下りられ、其の直ぐ上流に天狗橋がある事を聞いてゐたといふ。その頃は方々の雪崩がすつかり谷々を埋めて何處でも自由に澤の上は歩けるが其の代りに流れや瀧などは全く見えない。この下が天狗橋ださうだと雪の上から教へられたゞけであつたといふ。オコナイの尾根の一〇〇三米獨立標高點の西面に小さな澤が三本ある。此處は其の一番上流の澤の眞向ひでメツケ平は其の澤の上手に見える。四十米位を藪につかまつて本流右岸の河原に下りた（九時二〇分）。

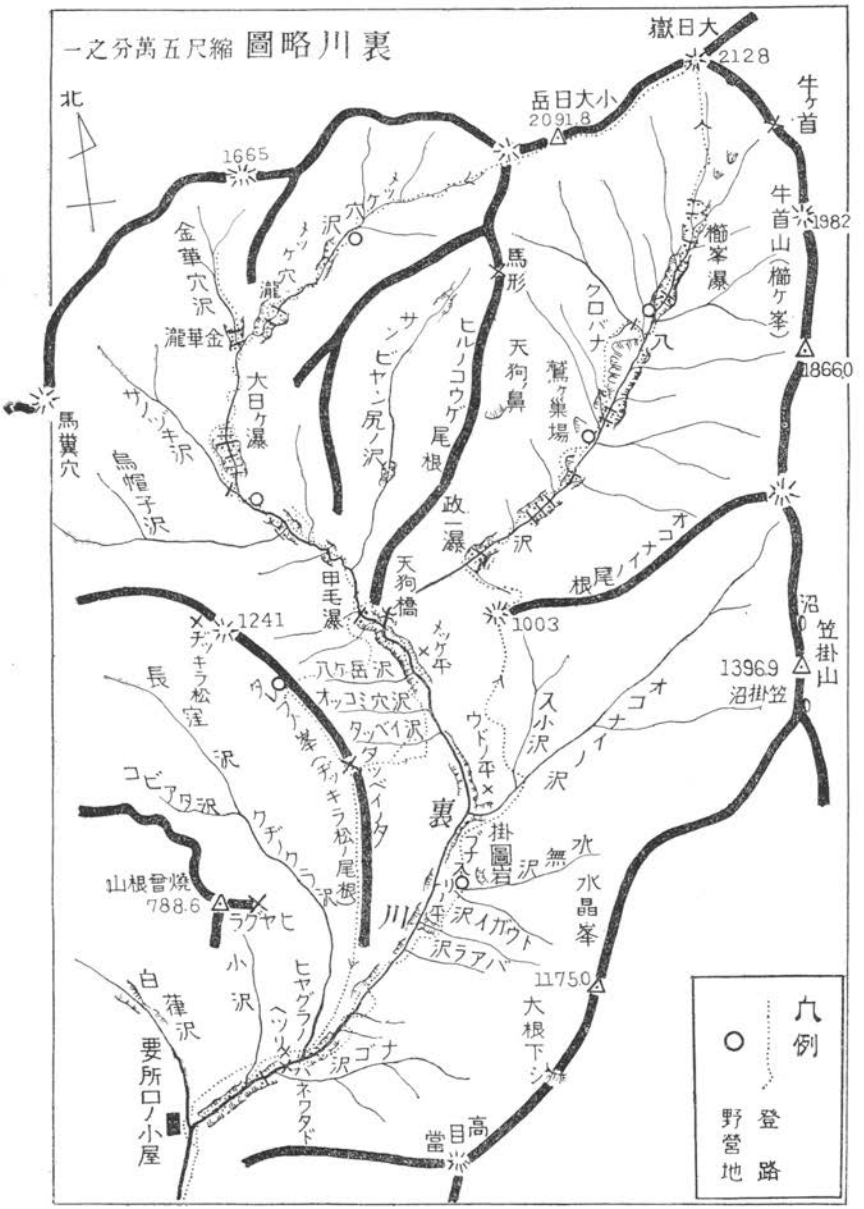
そこは礫さへあるよい磧であつて、下流は百米の所から右折して見えない。三十米上流で左岸へ徒渉し、こゝでズボンを外して進む。下りた點より百米位溯つた所で溯行不能になつた。兩岸共手掛りのない岩壁をなし河巾十米長さ十五米位は蒼い淵をなしてゐる。この淵を越えれば又瀨となつてゐて前方百五十米位の所で河は右折して見えないが、其の曲折點の左岸の岩壁は四十米位垂直にそゝり立つてゐる。天狗橋は屹度あの陰に違ひないと思ふとどうしても行き度くなつた。裸一つになつて泳ぐことにした。政一は泳げないので此處に待つてゐることにしたが如何にも殘念さうだ。寫眞機は自分の頭の上にくゝり付けた。太夫の烏帽子の樣だと政一が笑ふ。三脚は佐久間君の頸に結び付けた。

九時三十分時計も此處に置いて出發する。深い所は幸ひ流れも緩いので自由に上れる。最初の淵を上つて左岸の岩に取り付き此處から瀨の中を徒渉しながら百二、三十米位上つて屈曲點の二十米手前についた。此處で河巾は一米位、廣い所で二米位に狹められ紺碧のトロは油の樣に靜まりかへつてゐる。この淵を十米程泳いで上り右岸の曲り角に上りつくと、見よ右手に開けた光景は、一瞬聲も出せなかつた。此の眞晝中に光を遮られた狹流は薄暗く迷路の樣に續いてゐる。兩岩壁は三、四十米の高さ垂直に切り立つて居り、五十米前方には天狗橋が恰も天然の橋の樣に兩岩壁の間に架してあるではないか。しかも其の眞下で二條の瀑が滔々と奔落してゐる。寒さに震ひ乍ら飽かずに眺め入つた。此處より左岸に飛び移り膝までの瀨を二十米位進むと

稍深くなつた。腰丈けの徒渉をして左岸の岩に上るともう其處は天狗橋の直ぐ手前だ。そして又驚いた事には此の時左手より更に大きな流れが合してゐる事であつた。それが此處に來る迄は左岸壁にかくれて見えないのであつた。左手の流れの兩岸は同樣に手掛りもない數十米の絶壁で巾は二、三米のトロをなしてゐる。上流五十米にて左折して見えないが、其の曲り手が瀧となつてゐて落口のみが合流點より望まれた。これが裏川の本流であつた。本流は二十米上手で上れない。水量は八澤より幾分多く川底も低くて八澤は一米位の高さの奔湍となつて本流に合してゐる。雪の多いためか八澤の水はずつと冷たい。天狗橋はつまりこの合流點より上手二十米の八澤に跨つて架せられてゐるのであつた。それは右岸より落下した長さ六米、巾三米、厚さ二米位の大岩が水面上四米位の所で支えられて丁度水平になり橋の形になつてゐる。側壁と同じく眞黑い色の岩だ。其の眞下の瀑は高さ五米位で二條に分れて左岸の方が三倍位の水量である。この瀑は一寸登れないので橋の眞下に行く事は出來なかつた。寒さも忘れて暫くはこの幽邃の氣分に浸つてゐた。

到底見るを得ないと諦めてゐた八澤の合流點と天狗橋の奇勝を併せ望み得て滿足に胸を膨ませながら歸途に就いた。下りの泳ぎは樂である。二百米位下流の政一の待つてゐる所に着いたのが十時半であつた。

下つて徒渉をし、服をつけて元の道を戻る。河段丘を登つてからは鉈目を傳ふので早かつた。タツベイ澤に下りて百米位上り左手尾根を登つたタツベイノタに着いた(一二時一〇分—一二時四五分)。此處より眺める八澤は眞正面に一直線に牛ヶ首まで這ひ上つてゐる。第三日目の泊場下手の雪溪が一番廣くて長い。これからの下りは只道あとを傳つて行けば要所口に出るのだ。タツベイノタよりクヂノクラノ澤までは村のシ、狩り道なので鉈目もよく入つてゐる。クヂノクラ澤(一時二五分—一時三〇分)を過ぎてヒヤクラのヘツリはなかなか暑かつた。小澤を越えて五分位行くと道は燒曾根林道に合し間もなく要所口に着いた(二時二五分)。こゝで最後の徒渉をして左岸に移る。これからは炭の運搬道なので立派な道になつた。草いきれの烈しい道を急い


裏川略圖 縮尺五萬分之一
北
大日嶽
2128
牛ヶ首
小日大岳
2091.8
1665
牛首山（櫛ヶ峯）
1982
櫛峯瀑
1866.0
金華穴沢
金華瀧
大日ヶ瀑
馬糞穴
烏帽子沢
馬形
天狗鼻
鷲ヶ巣場
政一瀑
天狗橋
甲毛瀑
1241
1003
沼掛笠山
1396.9
長沢
コビアタ沢
山根曾焼
788.6
裏川
掛圖岩
水無沢
水晶峯
1175.0
白葎沢
要所口ノ小屋
高目
當
大根下
凡例
登路
野營地

で裏川の合流點にある小荒堰堤に着いたのが午後三時五十分であつた。

附記

裏川の谷自身は大した所でもないにも拘らず今まで全く試みられなかつたのは位置が僻陬に在る事とよい案内者が無い事に起因してゐるらしい。冬期間の終りにシ、狩り(熊狩り)には今も相變らず出掛けるが雪が消えてからは絶對に山には入らない。國有林に編入されてからは伐材や薪取りが出來なくなつたからだ。それで幾分澤の樣子を知つてゐる人はもう七十歳以上の老人が一、二あるばかりで、其中一番明るかつた留次郎爺さんが昨夏亡くなつてからは大上(オホカミ)のお爺さん(五十嵐庄吾さん)一人になつた。中年配の人では政次郎さんの外には留次郎の息子の運三、鐵砲名人の彦次郎、清三郎さん等がゐるが尾根について精しい彼等も澤の樣子は殆んど見てゐない。二十代や三十代の若者で山を知つてゐる人は皆無である。將來の爲めに二十代の若者が進んで山に行つてよい案内者になつて呉れる事は私ばかりの希ひであるまいと思つた。

政次郎さんは近在から村に入つて來た留次郎や運三と違つて生粋の實川生れの人で親代々實川の住人である。山は大へん好きで毎年一、二回は大日あたりまで登られる。故實に明るい事は一番で、地圖の完全に讀める人は此の人位のものである。政一は實川に入つて十余年しかならないので山には未だ精しくはないが體は達者だし、從順に不平一つ云はずについて來て呉れたのは何よりであつた。

山を終つた翌日は實川を訪れて政次郎さんや「山中雜記」で知られてゐる五十嵐庄吾爺さんから山の話を聞いた。運三さんは病氣で逢はれなかつたのは殘念であつた。以下二三見聞した事を書き添えて見た。地名は主として猪俣政次郎さんに聞いたものである。

一、八澤の意味。山岳第二五年第一號の實川雜記に地圖に矢澤とあるは實は八澤の間違ひだと書いてある。それは裏川の左岸から入つてゐる大きな澤の八番目にあたり、この順序を歌に讀んだものもあるといふ話は大上(オホカミ)のお爺さんも言ふて居られた。その名前は前掲の記文に擧げられた通りであるが(只一つ末木澤は伏木(フセキ)澤の誤りで、伏木が勢木(セイキ)となまられてもゐると云ふ、五十嵐庄吾氏)栃袋澤、伏木澤を擧げるならば主尾根まで通つたそれよりもずつと大きな澤は外にもあるからそれは當らない。八澤に入ると左右

より落ちる大きな枝澤が兩側に四本宛八本あるから八澤であるといふ說もある。又八澤の形が村人のよく登る燒曾根山や楚々木山から見ると一直線に牛ヶ首まで這ひ上つてゐて、其の兩側から入る枝澤が對稱的に丁度弓の矢羽の形をなしてゐるから矢澤でもよいといふ話も傳はつてゐる。結局矢澤でも八澤でもどちらも昔から使つて來たと政治郎さんは話された。

私は便宜八澤の文字を使用して來たが、八番目といふのも八本と云ふのもどちらも不正確であるから最後の矢澤の說に左袒したい。

二、タレブノ峯。烏帽子岳の下のタアバナより眞東に出で大きな圓弧を描いて遂に其の方向を眞南に向けてクヂノクラ澤合流點にて終る裏川と長窪澤に挾まれた長い尾根をタレブノ峯と呼ぶ。此處は村人の狩場の中心で一番よく踏まれる峯らしい。一二四一米獨立標高點あたりの長窪澤測にヂツキラ松があり（ヂツキラ松の尾根とは近頃の呼稱である）尾根の裏川側はデトタアバナと呼ばれる。尾根が眞南に曲るあたりがタツベイノタで此處から下は道形がある。その下七六〇米附近の峯に大きな松が一本あつてアミガサカムリの傘松と云ふ。そこから西の小尾根を下つてクヂノクラ澤を越えるのがヒヤクラを經て燒曾根山へ行く唯一の道らしい。タツベイ澤の裏川側三百米位下つた所に山毛欅島があつてよい泊場になつてゐる。この峯の最高點を裏川ギスギと名付け、水晶峯の前川ギスギと對應してゐる。ギスギとは風當りの激しい所の意ださうだ。双方高さも形も大へんよく似てゐてどちらも風の吹き付けが強いのでこの名が付けられたといふ。水晶峯は實川村より見える獨立標高點七二二米の本名で、一一七五米の前川ギスギに測量の時間違つてつけられたので、七二二米の方を今では水晶の笠と呼んでゐる。笠とは尾根上の小突起でタツベイの笠、ヒヤクラの笠と云ふ風に用ひるらしい。

三、三杯汁の澤、これはサンビャン尻の澤といふのがほんとださうだ。小大日岳の西の二〇六〇米の突起から南西南に下り八澤の合流點に終る標高數字記入の尾根がヒルノコオゲ尾根でこの尾根と一九四〇米邊より西南に分れた支尾根に挾まれてゐて八澤合流點の稍上手にて本流に入る澤である。この澤の源流一八〇〇米附近に毎年の春、雪が消え初めるとサンビャン坊さんの形が現はれて來る。烏帽子を被り穀種が入つた瓢簞を下げた腰の曲つた爺さんである。そして手に提げた瓢簞の形が現はれる頃になると是を

望んだ會津盆地の百姓が種を蒔くのだといふ（豆の種を蒔く頃）。サンビャン坊はその爺さんの名前である。サンビャンと言ふ發音は政次郎さんも庄吾爺さんに聞いた時も同じであつたし會津ではみんなさう呼んでゐると言はれた。

この爺さんの烏帽子の上に馬の形があり澤は馬の口の邊から出てゐるといふ。そこが馬形である。ヒルノコヵゲ尾根は甲毛瀑の上から見た形は尾根といふよりは廣い斜面といふ方が適當な位に見えた。外の尾根と違つて上の方まで山毛欅やガンビの大きな木が所々にヒル（蝶）の眉毛の樣な形で生へてゐるのでこの名があるといふ。

四、天狗ノ鼻、天狗橋、大日ヶ瀑。天狗ノ鼻は八澤の澤中にはなくて澤から可なり登つたヒルノコヵゲの支尾根にあるさうである。實見しないので正確には分らないが政次郎さんが此の邊と地圖にしるして呉れた所はヒルノコヵゲ尾根の千五百米邊より南東南に矢澤に出た小尾根の千二百米邊と思はれた。只一寸とした平地があり其處に三、四間の岩の小突起が出てゐるだけである。あんな岩なんどは何處にもあるが、其處が重要の狩場となるので名があるのだといふ。クロバナの上手の方から追ひ下したシヽをその鼻にゐて仕留める大事な場所ださうだ。庄吾さんも足の惡くならない若い頃は其處らあたりで大いに武勇を示したものであるといふ。天狗橋は八澤の落口にある岩の懸橋である。兩岸は高く切り立つてゐる爲め雪のある時は全く沒して見る由もない。そしてそれが雪から現はれる頃は山へは村人が入らない爲めに余りに人目に觸れずに名前だけが傳へられてゐた。又大日ヶ瀑については庄吾さんは「大日ヶ瀑といふ名前をつけたら相應しいだらうとは言ふてゐたが未だ見た事がない」といつて居られた。留次郎さんはよく知つて居つたらしいが現存者では現場まで行つた人はないだらうと運三さんも言ふてゐたとのこと。大日ヶ瀑の名は主瀑一つの名前とせずに、あの一群の瀑の總稱とした方がよいと思はれる。

五、裏川本流の澤の名二、三。メッケ穴澤は昔シヽ狩りに出た時熊の冬眠してゐる木や岩の穴を探して、たくさん見付けた爲めの名であるさうだ。メッケ穴澤や八澤の奥まで狩りに入り込んだのは昔の事で今では出戸ばかり卷いてゐるから獲物も少ないといふ。金華穴澤はこゝでシヽ狩りする時小瀑や奔湍の響が喧しく熊も人もお互の聲を聞き取れずにキンカ（聾）の樣になる爲めだと聞いてゐたが實際はつまらない平凡の澤で他の澤より寧ろ耳のはつきり聞える

澤である。この落口の瀑より一つ上の大日ヶ瀑と間違つた高さ十七、八米の細い瀧を金華瀧と命名した。甚だ名に副はない瀧ではあるが澤の名が既にそぐはないのだから仕方ないと決めた。サヽヅキ澤は大日嶽と烏帽子岳間の最低鞍部の所にある澤である。左岸馬糞穴側は急峻な絶壁が數百米續いてゐる事が烏帽子から小大日に向ふ山稜上から望まれる。この澤には笹付きの斜面が多いので其の名があるのだといふ。昔會津平野が昊天に苦しんだ時殿樣の依賴によつて寶川の村人がこの最低鞍部を越えて加治川の不動瀧に參籠して雨乞ひしたことがあるといふが、それが幾百年前の話であるか詳かにする事が出來なかつた。

六、裏川の中では矢張り八澤が最も雄峻であり險惡な岩壁が連續してゐて、一種の凄みを以て迫つて來る。然し澤が南西に向つてゐて大きな曲折がなく、花崗岩の河床である爲めに割合に明るい谷である。雪崩や雪溪が滑つて澤の兩側がコスられ平板狀に磨かれる爲めか兩側より落ちる枝澤は上の方で可なり大きな澤であつても落口は全く小さな澤の樣になつて奔落してゐて見落し易い。浸蝕が一樣に行つてゐる爲めか大きな瀑は一つも見られない。之に較べると本流メッケ穴澤の方は著しい對照をして異なつた特色を持つてゐる。兩岸壁は低く下の方まで草や灌木が繁つてゐて廣闊なのんびりした磧が續いてゐる。そして之を點綴する素晴しく立派な瀑瀧がこの單調を破つて昊れる。八澤の岩壁と本流の飛瀑と八澤合流點附近の廊下の幽邃とが三部曲をなして裏川の核心をなすものである。

―七・九・八―

薬師岳より望む劔立山群峰　　島田武時

春の藥師岳より針の木越え

島田武時

一九三二年三月十九日より四月一日までの二週間に亙り數河(スゴ)乘越小舍より藥師岳往復、更に五色ヶ原に至り中ノ谷を降りて平より針の木峠を越えし記錄。

珍しく里にまで降つた春雪の泥濘に惱まされながら十九日芦峅に向つた。迎へに來る筈の光次郎に會ふのを期待しながら歩いたが遂々誰れも迎へに來ないうちに芦峅に着いてしまつた。

夕方、劍岳から大急ぎで歸つて來た光次郎と間左衞門が遊びに來た。色々の話の後光次郎が同行することになつた。

廿日は降雪、三月に珍らしく芦峅からスキーを着けた。村はづれの道から見へる立山群峰は今日は姿を見せなかつた。午前中に藤橋に着いてしまつた。

廿一日は又復降雪。常願寺川左岸の道を踏んだ。午後からはれた。三月上旬から既に多くのパルテーが立山に劍岳に向つて居ると云ふ。そして又この藤橋にも僕達を加へて四つのパルテーが待機の姿勢で天候の回復を待つて居る。併しスゴ谷方面に行くのは僕達だけだつた。

廿三日、可成りの上天氣だつた。ホテルの源次郎から今日はノマがずるから注意しろと云ふ聲に送られて出掛ける。他のパルテーとは直ぐ別れて河原に入つて進む。鬼ヶ城まで四度ばかり鐵索で渡河する。

鷲岳方面は朝陽を受けて素晴しく輝いて居る。鬼ヶ城での最後の渡河中、右岸の絶壁から凄い新雪雪崩が押出され、土砂を混じて黄褐色に變じて河中に落ちるのは壯觀だつた。雪崩と云ふより瀧の樣である、この行の雪崩の洗禮は之から始まつた。こゝから、スゴ谷の出合までひつきりなしに右岸から雪崩が落ちた。源次郎の注言も成程と思ふ。しかし常願寺川も鐵索で河原を歩ける樣になつたから雪崩は鬼ヶ城を中心とした部分以外大した危險はない樣である。

スゴ谷に入ると、とてものびやかな氣分がする。氣持のよい谷である。藤橋より八時間、三時半、取入口の番小舍に着いた。番人二夫婦、他に二人が住んで居る。兎が五六匹も入口にさげてある。電氣風呂、ラヂオも有り氣持の良い小舍である。番人の一人が光次郎の友人でも有ることゝて大いに話がはずむ。

廿三日、今度の根據地の乘越小舍に入る道をスゴ谷、立石（スゴ谷—五萬分の一圖—の記號のゴの字に當る點に左方より入る谷。又その出合より下部に有る岩壁の符號は左右入れ換へると實際の地形どほりとなる。その兩岸の岩壁の符號の最初に當る部分に有る瀧を第一の瀧と云ふ。）間の尾根を登ることに決めて道を踏む、この尾根を登りつめたところがスゴ乘越の小舍である。

薄曇の朝、全部の荷を背負つて出掛けた。小舍からはすぐ橋を渡つて左岸に移る。一ノ瀧から立石の出合に至る間は右岸は絕壁、左岸は全面的にすごい急坂である。小舍の人達はラヴィーネンツークだと云つて居る。僕達の行つたときはクラストした上に新雪が二尺位の不安定な狀態だつた。幸ひまだ日光の影響を受けて居ない。直ちにスキーを輪樏に代へて恐る〳〵間隔を置いて横切つた。立石の出合に着いて休息した。尾根に取り付いてからは新雪が重くてラッセルに苦しんだ。尾根の取つ付きは立山のブナ坂の感じがする。

二時半頃案の定、雪が降りだしたので引返すことにする。荷を全部シュラーフザックに入れて埋めて歸る。歸途、今朝輪樏に代へたところが全部雪崩が押出して居るのを見て良い氣持がしない。デブリのがら〳〵の上をスキーで降つた。

廿四日は小雪が降つた。ガスがかゝつたり、雪が降つたりすればとても小舍は發見出來ないとあきらめて今日一日滯在とした。番人全部が電燈線故障の修繕にスキーをつけて出掛けて行つた。雪崩で電柱が倒れたのだつた。

廿五日小舍の番人一人を連れて行くことにした。一昨日の道踏みが効果をあげて七時間を要した荷物置場まで僅かに三時間で着いた。乘越小舍までの尾根は巨大な岳樺とタンネの原始林である。尨大な尾根なので熊の湯あたりの、シーゲレンデと間違ひさうである。

岳樺とタンネの交錯した中をゆつくり登つた。豫想した様に乘越小舍は完全に埋まつて何物も見へない。屋根型の隆起さへなく全く平面である。僅かに小舍横の岳樺の枝が切られて居るのでそれと判明する位のものである。携帶のシャベルで小舍の西側を掘り出す。板二三枚を外して入る。番人は早速歸つた。(春期一度道を踏めば、取入口の小舍から藥師岳の往復は可能である。それは私達の登つた道と他に藥師岳本峯より發して丸山(一九六二・六米突)に終る尾根道の二つである。後者は四月取入口小舍の番人の人達が試みて成功したと云ふことである。兩者ともに眞川奥の小舍からするよりは、なほ且つスキーには好適な尾根と思はれる。奥の小舍に入る勞力、又年々使用に耐へなくなつて行く小舍の現在よりして以上の登路は共に一考に價すると思ふ。自分達の登つた尾根は下部はブナ、上部は岳樺とタンネの原始林である。私は嘗つてあんな巨木な岳樺の林を見たことはない。雪質もこの時には上々であつた。この登路の雪崩の危險は前記の一の瀧、立石間の急坂のみである。)

小舍には東側に煙出しを作り雪の煙突を作つたが、薪を燃したのと强風のため煙がよく拔けず、その晩からはひどく眼を惡くした。併しながら幸ひガスにやられる様なことはなかつた。夜氣溫の低下は甚しかつた。

二十六日、果して快晴に惠まれた。小舍からスキーを付けて行く。藥師岳の北尾根傳ひにずん〳〵進んで行つた。高度を增すごとに大日岳から白馬岳、鹿島槍ヶ岳間の峯が迫る様な壯觀を現して來た。

案じて居たシュカブラも大したことがない。北藥師岳の肩をスキーデポーとする。クランポンをつけて進む。黑部側には一様に見事な雪庇が出て居る。北藥師、藥師本峯間の山稜は大したこともない。黑部側のカールはスキーに面白さうだ。積雪狀態が落付いて居るときはスキーに快適だらう。光次郎はスキーで頂上まで行くことにすれば良かつたと口惜しがる。何の、故障もなく、又何の技術も要せず、多年憧れの頂上に着いた。幼い頃から明け暮れ眺めた峯である。頂上の宮にくつ付いた蒼氷は素晴しい。頂上で受ける可成り强い風を黑部側の雪庇に避けて一時間近くも話し込む。

この日はアルプスは總べて晴れ渡つて居た。あの峯にも、頂きにもクライマースが押よせて居るかと思ふ

と自分達もその一人ながら愉快になる。

歸途は北藥師岳の肩から素晴しい粉雪をあげて心ゆくまでシュスファーレンを樂しむ。不愉快なシュカブラもない。矢張りスキーは高山のシュスファーレンに限るとまで思ふ。あの背影を持つたあの大斜面の中に黑く飛んだ友の姿が眼前に浮んで居る。最初の目的を達した午後は小舍の屋根の上に板を敷いてねころぶ。一日完全に晴れた。富山平野が霞の中に浮んで見える。氣溫が上昇しすぎる樣だ。

廿七日、なんとなく曇つた空模樣を心配しながら、途中ひどく惡くなる樣ならヌクイ谷を下つて直接平に出ることに決め、小舍を元通りに埋め、目標には例の岳樺にシャベルを結び付けて越中澤岳に向つた。

スゴ谷の乘越しに着いた頃から果して天候が惡くなる。越中澤岳の登りはクランポンを着けた。頂上附近からは冬の富士山で經驗するあの强風が本格的に吹きはじめた。傍目もふらずに進む。樂しみにして來た越中澤岳の北側の緩斜面もクランポンを着けたまゝぽかぽか膝まで埋れて歩いた。

ヌクイ谷側の雪庇にかくれて中食した。兎に角行けるところまで行つて止むを得なくなればヌクイ谷を下ることにしてそのまゝ進んだ。大鳶岳にかゝる頃から强風はクライマックスに達した。背負つたスキーはガタ〳〵鳴つて吹きとばされさうである。ピオレーで確保して粉雪の亂舞する尾根上に幾度つゝ伏したことか。

漸く五色ヶ原の一端に取り付いた。幸運にも嵐はやや衰へた。クランポンをスキーに代へる。風は相變らず强いが少量の降雪以外にガスを伴はなかつたからそのまゝ小舍の方向に向つて進んだ。煙で痛めた眼のために自分は兎角遲れ勝ちになる。なるべく下に降らない樣に注意しながら横切つて行く。漸く原の眞中に半分以上も露出した小舍を發見したときはほつとした。小舍の內部は殆んど全部吹きこんで居る、爐端に漸く三人の寢場所を作つた。二階はまだ幾分よい位だ。

この日は一日吹き續けたが不思議と、奧大日岳、彌陀ヶ原方面は陽光に輝いて晴天の狀態を保つて居た。立山も劍岳も見えなかつた。

廿八日、食糧は充分だし、スキーには好適だし幾日滯在しても劍岳までは縱走する豫定を遂行する覺悟は有つたが、準備して貰つた薪は昨秋の登山者のために燃され盡してあつたので希望はすべて空しくなつてしまつた。やむを得ず中の谷を平に降り天候の回復を待つて御山谷を登ることに決定する。

外はひどい吹雪である。覺悟を決めて出る。すぐに雪まみれになる。小舍は忽ち吾々の眼前から消へてしまつた。覺悟をして居たがなんだか空恐しい氣持ちになる。この上は中ノ谷を下るだけが殘されて居るのみだ。ザラ峠に向つて突進する。

可成り進んだ頃俄然光次郎が小雪庇の下に落ちた。次に落ちた自分の足下から轟然音を立てゝ雪崩れた。二番目の自分が切つた板狀雪崩らしいものである。切れ口は雪庇直下で一尺以上もある。幸ひ二人とも捲きこまれることもなく雪庇の下に腰を下ろす。

音は暫く緩いたが形はなにも見えない。三人は吹雪の中に顏見合せて呆然とした。相談の結果は確かに鷲岳側によりすぎて居るらしいと云ふことになり、今の雪崩にこりて直ちにクランポンに代へて右方よりに下つた。雪面は案外風の爲に締つて埋まらない。緩斜面を選んで下る。いくら降つても谷底らしいところに出ない。流石の光次郎も五色ヶ原をぐる〳〵廻つて居るのではないかと疑ひ出したりした。

やがてやゝガスのはれ間に獅子岳の尾根を見る。追かける樣に中ノ谷降り口に向つた。中ノ谷の上部はスキーに快適である。ボーゲン・ウント・ボーゲンでどん〳〵下る。可成り下つた。最初の瀧（先年荷擔ぎの落ちて死んだ瀧）の右側斜面を横切つた光次郎の姿を突然ガスの中に見失ふ。續いて危く瀧の上に立上つた自分が足下にデブリを發見しそしてその中に光次郎のスキーストックを發見した。瞬間にして光次郎がやられたと直感した。少し遲れたMを大聲で呼んだ。

漸々デブリの中に光次郎は自力で頭部を少し現した。二人で夢中に掘り出す。頭以外に身動きも出來なく完全にやられたが幸ひ大した怪我もなかつた。三十分位で掘り出す。（デブリは幅約二十米突、長さ四十米突位のものであつた。切れ口の厚さ約一尺位。）

光次郎を追駈ける積りで右斜面を降つたら、あるひはそのまゝ氣付かずに滑りすぎたかも知れない。それ程音もなく又早かつた。新雪上層雪崩であらう。

これ以上ボーゲン・ウント・ボーゲンで降ることは危險だ。谷底を眞直ぐに直滑降でとばす。直きに中ノ谷の瀧に着いた。瀧上部の岩蔭で始めて中食のパンを食べる。流石の光次郎も興奮して蒼い顏をして居る。パンも一切れしか口にしなかつた。未だ雪崩の落ちない瀧は全部露出して居る。輪樏に代へて右岸の上部の樹木中をからむ。

平は風もなく穩やかである。牡丹雪の中を水番小舍に着いた。光次郎の兄、水番の人々は挨拶がはりに口々にこの雪の中をよく雪崩にも會はずにやつて來たと云ふ。やられたばかりだがたうとう口に出しかねて顏を見合せてくすぐつたい笑ひをこらへた。

二十九日三十日三十一日と降り續いた。平の小舍は充分の御馳走がある。積雪は日增しに大となつた。三十日には遂に一丈二尺を遙かに超えた。毎日ストーブの傍を離れない。小舍には人と犬以外に、戸外にはかない生活をして居る雀が三羽居る。夕刻ねぐらを求めて煙突脇の窓枠に集つて居る。空模樣を見るために窓をあけるごとに驚いてとび出す。この暗い寒い夜、梢に一夜を送るかと思ふと窓をあけたことが大變雀に對して惡いことをした樣に思へて氣の毒だつた。

三十日の夜、ラヂオで中山、塚田の常念岳の遭難を聞いた。私達の心は針の木峠越えか御山谷登りを控へてます〳〵暗くなつた。

三十一日は午後からはれた。既に豫定の日數もつきたし、私達の打挫かれた氣分はとてもこれ以上續けて大きな登山をやるわけにはゆかなくなつた樣に思へた。

相談の結果、總ての計劃を放棄して針の木峠を越えて大町に出ることに決定した。夕方星が出た。總ての準備をとゝのへて寢についた。

四月一日、曇つて居たがこの機會をはづすといつ又この谷間から出られるか分らない。小舍の人達の親切を謝して出發する。滯在四日間ですつかり馴染になつた犬二匹、何處までもついて來る。遂々針の木峠の中

腹まで來てしまつた。光次郎は峠を越さしては大變と躍氣になつて怒鳴りつけるが彼等は決して後に引返さない。少しはなれたところに腰を下ろして見送つて居る。

峠の上部近くはひどく不安定な積雪狀態だつた。スキーを輪樏に代へた。そして中央部の岳樺の間を登つた。果して可成り上部に達して夏道に移らんとした刹那雪崩れた。表層乾燥新雪々崩と思はれる。粉雪を舞ひ上げながら一行の傍を崩れて行つた。

峠に着く頃から果して天候は崩れてきて雪が降つて來た。ガスが襲つて來た。峠小舍は西半分露出して居た。

休む間もなく追はれる樣に雪庇を破壞して籠川に下る。期待した立山群峯の壯觀は遂に見ることは出來なかつた。

輪樏のまゝ谷の中央を眞直ぐに降る。積雪は落付いて居たが警戒してスキーを着けなかつた。しかし流石に緊張して口數も少なく默々として下る。皆餘りに度々の雪崩の遭遇とこの峠にまつはる思ひ出に壓迫されて居たのである。

マヤクボ澤の出合からスキーを着けた。それより下部の谷々は全部既に押出して居た。デブリの爲に思ふ樣に滑らない。

祖父岳方面は青空である。そして松本盆地は春の紫雲にかすんで居る。峠を下ることは冬の世界から春のそれに進むことだつた。

谷は風もない。見返す峠はまだ暗雲に閉ざされて居る。陽ざしにスキーに附着した雪は水滴となつてスキーの表を流れる。

扇澤に着いて始めて心からの休息をとつた。畠山の小舍を過ぎるまでスキーをつけた。裾野に似た林の中を Oh. Tannenbaum を歌ひながら歩いた。總ての壓迫感から開放された。

峠はまだ暗い。しかし五龍、鹿島槍ヶ岳は夕陽に輝いて居る。それを見たとき私は總てを忘れて、新な登高心に燃え、心の中で次はあの山にと誓つたのだつた。

同行者　宮島嚴一、志鷹光次郎

臺灣の山岳漫談（一）

沼井鐵太郎

台灣の山岳について、其の高度順に從ひ、主として「山日記」の補足をしながら、其の名稱や、新しい山の位置、登山に關係した事を書きつけて見ようと思ふ。會報所載の分と重複したところもあるが、多少ともまとめる上に止むを得ない事と御許し願ひたい。

山日記には二千米以上の台灣山岳百二十五座が擧げられてゐる。これは既成地圖に記名のものを其のまゝ拾つたに過ぎないので、山名誤記の訂正や、無記名山の名稱補足は行はれてゐない。總括して今度の山日記にある台灣の山岳百二十五座の內譯三千五百米以上二十座、三千米乃至三千五百米三十六座、二千五百米乃至三千米二十四座、二千米乃至二千五百米四十五座に對し、私どもの調査は其の後得た資料をも加へ三千五百米以上名のある山二十五座、無名山二十座（寧ろ我々が名を知らない山、大抵は蕃人の名稱ある筈）、計四十五座、三千米乃至三千五百米の名のある山五十六座、無名山百六十九座、計二百二十五座、二千五百米乃至三千米の名のある山二十八座、二千米乃至二千五百米の名のある山五十八座なる數字を示す。尤も山の座數は數へ方で大分違ふので、私どもは試みに蕃地々形圖により圈線二百尺以上の差あるものを一座と看做したのである。故に若し此の見方が細か過ぎるものとし、其の半ばを取るも三千米以上百三十五座（一萬尺卽ち三千三十米以下を除けば百三十三座）となり、台灣が間違ひなしの高山國である事が分る。

更に一萬尺以上の土地が台灣全島面積の一％もある事、八千尺以上をとれば六％、六千尺以上をとれば十五％にも昇る事を考へれば、台灣の土地が高い事には論議の余地は無い樣に思はれる。〔台灣山林會報三十八號（昭和四年六月）二十二頁、伊藤太右衞門氏「面積上よりする垂直台灣の計數的觀察」參照〕

新高山（三九五〇米）

山日記本邦主要山岳高度表で第一番の新高山には（カッコ）を附して（主山（シュザン））としてもらつた方がよい。舊稱モリソン山、清朝時代の名は玉山（ギョクザン）、蕃名は阿里山蕃（ツオウ族）其の他北麓ではバットンクワン（クワン又はクヲン）といふ。今年六月筆者は關山越えをした際、荖濃溪奥のブヌン族セブクン蕃からサアデヤハ（ヤハの所强音、ハは獨逸語の ch の如き發音だつた）といふ名稱を聞いた。尤も此の方面から顯著に見えるのは新高南山、南玉山のあたりで、サアデヤハがバットンクワンと同じく新高山の總稱であるかないかは疑問である。

新高西山（セイザン）及び前山（ゼンザン）の位置は蕃地々形圖の記載が正しい。陸測圖も最初は誤記してあつたが、最近發行になつた分には台灣山岳會の見元了氏其の他の注意を入れて訂正してある。故に西山は陸測によつて三五二八米と記し、前山は三二三六米とし、又山日記の表中五四頁下から三番目の玉山（舊稱前山）の項を抹殺するべきである。是等名稱の詮議に就ては台灣山岳第二號及び第三號參照。

尙山日記の表中南玉山は五四頁五行目に擧げてあるが、これは地理學的に見て新高山のグループに包含させた方がよい樣に思ふ。第一筆者の少からず疑問とする所は其の命名である。全體玉山といふのは新高山の舊稱であるのに、南玉山と方位を示す山名ならば南山に包含せしむべきである。事實南山と所謂南玉山は隣接し、兩山間の鞍部もさまで顯著な低下ではない。又いづれの隆起を南玉山の主山とすべきか、南山・南玉山の境をいづれにすべきやも疑問になつて來る。是等の解決は今後南玉山の完全なる縱走及び新方面の登攀と共に吾人に課せられた問題である。南玉山へは昭和五年正月二日台灣山岳會の木田文治、齋藤三男、平澤龜一郎、靑木孝二諸氏及び筆者の組が南山共に探つたのが最初の試みであつたが、地圖に南玉山と記名せるピークへの登頂は時間の關係で果さなかつた（台灣山岳彙報第二年第一號、山岳第二十五年第一號の通信參照）。地圖の所謂南玉山初登の記錄者は會員鹿野忠雄君である（山岳第二十六年第三號參照）。

因に記す。新高東山へは山岳第二十二年第三號所載北田正三氏の紀行によると同氏等が初登攀である樣だ

が、氏は警察官の言を信じられたものであり、警察官は人が變れば前の記錄は保存しないし口傳もしないのであてにならない事が往々にしてある。既に新高山開拓時代東稜から登られてゐるらしい。但しこれは未發表故、北田氏の行は登山家の記錄として最初になるのである。新高主山から東山頂迄尾根傳ひは北田氏の記載によると非常に危險な樣だが、これは登山者の岩に對する經驗淺かりし爲か、文飾が過ぎた爲か、或は眞正の稜線から南方に寄り過ぎた爲か、いづれかであらう。筆者の二回の經驗、其の他の人々の感想を以ては、單に登頂丈の目的ならば強いてロープの必要を認めなかつた。尙東山へ西北のガリーから直登したのは鹿野君等が最初であり。これが台中州側登山道路から直登し得る最短距離でもある(山岳第二十七年第一號參照)。

東山は然し純然たる大岩峰である。東山並に之と主山間の北側峭壁には幾多のガリーやアレートや壁や小尖峰があり、果敢なクライマースに問題を投げてゐる。其の他新高山一帶は其の岩質が理想的には好ましからざるものとはいへ、種々の點よりして台灣で一流の「岩人の遊び場」たり得る地域と思ふ。其の意味を以つて筆者は本年二月台灣山岳會月例懇談會に於て「放射線的登行と新高山」なる演題で語り、其の大要を台灣時報七月號に揭載した。

最後に、新高山に關し台中・台南兩州、花蓮港廳三方面から當局は自動車路の測量を終つて、道路開鑿の實行を期して居る事を附言して置く。

次高山(三九三一米)

大まかな分類によつて今迄の處帝國第二の高峰となつてゐる次高山(ツキタカヤマ)は、最高所に比較的近接して南北の二峰あり、通常南の峰を絕頂又は主山としてゐるが、北峰の方が高いといふ說もある。今夏七月陸地測量部員が山頂に野營して基點測量をしたといふから、右の疑ひや、眞の標高も遠からず分明するであらう。いづれにせよ現在換算の三九三一米よりは高くなるとの噂である。

蕃名はバボー・ハガイ(バボーは峯、ハガイは崖の意なる由)、舊稱シルビア山(山岳第二十二年第三號所

載大橋捨三郎氏の記事參照)。なほ次高山北角といふ文字を使つた文獻があるが、これは前記北峰を指すものではなく、更に四キロも北のバボー・カランタックン(後述す)をいつたものである。新竹州方面から望んで呼稱したものらしいが、台灣山岳會ではかゝるまぎらはしい名稱は使はない事に決議した。

次高山は新高山に比べると登山者は極く少數で、未だ大衆の登山には適しないが、それでも人氣は南湖大山や能高・蒼萊主山連峰や、大覇尖山や大武山よりも上である。まだ登山路らしいものはなく、南麓のシカヤウ社(シカヨーと發音してはいけない)から大甲溪の一源流たるスカイラン溪を徒渉し、一氣に一萬一千尺級のシカヤウ大山を越えて八九合目の破れ小屋(山日記一五一頁參照)に泊り、二日目登頂してシカヤウに歸着するのが普通である。此の上下は下パイワン社から大武山往復と共に台灣に於ける著名山岳の登山路として最も難コースとされてゐる。

先年筆者は會員ウォルトン氏、グロッス氏等と共に次高山東尾根の下半を下りキヤワン溪畔に野營したが、非常に美しい印象を殘した。よつて爾來台灣山岳會主催の次高登山にこの下山コースをすゝめ好評を博してゐる。東尾根のアルプ紛ひの大草生地、幾つかの山麓階、海拔五千五百尺以上の廣い平坦な河成段丘を持つたキヤワン溪々谷(それは明治時代の上高地を思はせる)、清洌な麗流、谷よりの桃山の雄姿、そして東尾根上部の神祕な針葉樹林、次高山のカアル狀地形(地理學評論第八卷所載鹿野忠雄氏の論文參照)の觀望、等々々。嘗て本邦人最初の登山に取つたこのコースは、一時シカヤウからの登路發見によつて中絶されたが、再び新裝を以て登山家、愛山家の前に復活したのである。次高山は山頂そのものは女性的で比較的平凡だ。然し次高山彙一帶の日本無双の高連山地なる事、台灣中で氷雪の營力を最も受け易い地なる事、周圍特に大甲溪水源の諸溪谷が如何にも滋味溢れる秀麗な谷である事により、山の總體的趣味の對照物としては、寧ろ新高山以上といへるかも知れない。筆者等は新高山・阿里山一帶を國立公園として開發するものならば、次高山・大覇尖山・南湖大山三者相寄つて包含する地域は

絶體保存にしてもらひたいものと希望してゐる。

秀姑巒山（三八三三米）・ウラモン山（三八〇六米）

帝國第三位の高峰とされてゐる秀姑巒山は新高山の東山と北山とを間に數へれば第五位である。蕃名はマホラス（プヌン語で白髪の意）である。而して第四位（より細かに數へれば第七位）のマボラス山は蕃名ウラモンであつて、蕃地々形圖はひどい誤りをしてゐる。これは製圖の際誤つて附けたものらしいので、當時其の邊を調査した總督府殖産局山林課あたりでは氣が付いては居たが、地圖も發行された後なので、仕事をするにも誤つたまゝの地名を用ひてゐた。一般にもウラモンをマボラスとして相當人の頭に泌み込んでしまつた。昨夏會員鹿野忠雄君の實地探査によつて再び誤りが指摘されたものである。我々の意嚮は勿論、日本北アルプスの蓮華岳の例の如く、正誤したいので、山日記の表の秀姑巒山は括弧を附して（マホラス）となし、マボラス山はウラモン山（舊稱マボラス山は誤）と訂正したい。目下台灣山岳會で編輯中の新高登山地圖にもこの訂正をして置いた。

この兩山は新高山方面から見て實に堂々たる大山岳で、背後の丹大山附近の高度均齊な山脈と好い對照をしてゐる。登路は八通關から玉里へ出る道路の南駐在所（日本最高の駐在所、標高約三四二四米）を根據とし、大水窟山より稜線を辿つて行く約二日行程（野營一夜）が普通である。筆者が「台灣登山界の概觀」を本誌第二十二年第三號に書いて以來の記錄は、昭和五年春ウォルトン氏（ウラモン最高點手前より引返す）、昭和六年夏郡大方面より鹿野君（二回）、昭和七年正月台灣山岳會の中崎、武上、結城三氏の行の他、山林課の調査隊が一兩回（内一回は丹大山より縱走）行つたと聞く丈で、名山新高山附近の山々としては少々淋しい。前記中崎氏の經驗によれば、南駐在所からウラモン絶頂迄一日で往復は決して不可能では無い事が分つた。但し此の方面の登山には蕃人を遠くから呼ばなければならない不便がある。

附記、秀姑巒山、ウラモン山共文化人としての初登

は山林課伊藤技師のやうである。

南湖大山（三七九七米）

南湖大山は尾崎秀眞氏によれば南澳大山が正しい。これは領臺當時東海岸の南澳から望んで漠然と付けられた山名が、時代の變遷と共に變つたものらしい。然し臺灣音でいふと澳も湖もオウと同音に發音する故、別に訂正せず、南湖大山（南澳大山）とだけして置きたい。蕃名は西方シカヤウ蕃ではバボー・ビョンと稱する。

南湖大山のピークは西（主山）、北、東の三峰あり、東峰は山林課調査隊の吉井隆成氏一行の他には登山者は未だないが、主山と北峰は大正二年野呂寧氏以來當然屢々登られてゐる。南湖大山は臺灣山岳中最も大山らしい大山であり、雄大にして優美な景觀は、大平氏其の他の激賞されてゐるが如く、獨歩のものである。

南湖大山の登山は通常宜蘭濁水溪上流のピヤナン社を發足點としてエキジウ溪、タケジン、ブナッケイ經由、山頂へ往復、又はピヤナン鞍部へ下る、二泊の野營で登山出來る。大正十五年以來毎夏一組か二組かは登山されて來たので、此の山の通は一泊でも强行登山出來ると自信を抱くに至つた。此の山へ變つた行き方は筆者の「概觀」以來次の三回に過ぎない。

一、昭和五年春會員ウォルトン氏、グロッス氏及び臺灣山岳會の井上一男三氏がピヤナン社より正路を登り、南澳蕃地ピヤハウ社に下つた。

二、昭和四年七月總督府山林課調査隊の吉井隆成氏等は南湖大山頂より野營四夜を過してバトツノフ山、ゲロリー山、メキーホル山（七三二五尺）、ムカナン山（七〇七八尺）、三星山（七四七四尺）、メバヤン山、ヤップラサイ山、ゲヤチン山等、南湖大山脊族の長大なる稜線を歩き、最後に地圖に無記名の池、蕃名シイルン・テニワンを發見、シイルンバホ（二一〇〇米）、タイヤフ山、プラッサイ山を經て銅山駐在所に出た。

三、右と前後して南湖大山の東峰（蕃地地形圖に一二一二二尺と記せる峯）に登りマビーサン山（三一六七米）稜線を縱走したる山林課調査隊があつた樣に聞く。

四、本夏臺灣山岳會の千々岩助太郎、齋藤三男、宇佐見守(日本山岳會々員)、田口與四郎の四氏はタロコより入り畢祿山から中央尖山を經て南湖大山へ縱走した(臺灣山岳彙報第四年第九號參照)。この大縱走は大覇尖山・次高山に次いで我々同志が長年計畫してゐた嶮峻な未踏コースであつた。從來はタロコ蕃とビヤナン社方面の溪頭蕃が仇敵關係にあるので困難だつたが(現在でも然り)、リーダー千々岩氏が南湖大山を充分に研究し、南湖大山の野營地ブナッケイからは所謂サンギイドで登山者のみの行を取つたのが成功の鍵だつた。縱走自身は期待程惡くはなかつたらしいが、兎に角文化人として最初の行であり、又南湖大山で案內人夫なしの行も最初の、輝かしい記錄である。

南湖大山プロパーの雄麗無比の境と共に、若し心ある人が地圖を精細に檢するならば、その四方に派出する幾多の長大なる支脈と共の間の溪谷の廣さは、斷然臺灣一、恐らく日本一の高大なものたる事を發見するであらう。共の意味に於て南湖大山を有する事は、日本最高の新高山、第二位の次高山を有する事よりも、臺灣の誇りであるかも知れぬ。

バボー・カランタックン(三七五八米)

山日記表中南湖大山と中央尖山の間にこの山を入れる。嘗て次高山北角といふへんな名前で呼ばれた事のあつた山。蕃地々形圖シルビヤ山圖幅でシルビヤの北凡そ三キロメートルの所にある一二四〇〇尺の峰。蕃名は新竹州竹東郡のテントン社、パスコワラン社、メントユー社等の蕃人による。初登の記錄者は昭和五年五月の會員マレー・ウォルトン、グロッス兩氏及び筆者の一行であると思ふ。

中央尖山(三七一五米)

中央尖山は大覇尖山と共に臺灣山岳中、尖山の代表者、絕巔標高は或は南湖大山の上ならむかとの說あり、山名は測量當時野呂寧氏の命名、蕃名はタロコ蕃はボクスイサラガ(ボ又はグ、サ又はセ)、シカヤウ蕃はブシガガ、トロック蕃はデュギャック・ムクオーコ(デュギャックはタイヤル一般のルギヤフ〔峯の意〕のな

まりならむ)。

中央尖山の岩は絶頂附近丈がかたく、下は崩壞し易い。之によつて登攀者は大霸尖山や新高東山程好感を持てないさうである。南及北の絶壁斷崖は物凄いが、南湖大山へは東のピークへ登つて北走下する稜線を行くので、急は急だが危險はないさうだ。今迄登頂は文化人として最初の臺北一中及び鹿野君等の行(昭和三年、山岳第二十五年第三號參照)、第二回の警察官の行(登頂はせずとの說あり)、第三回のウォルトン、グロッス、井上氏等の行、及び第四回畢祿山よりの縱走がある丈である。大霸尖山が昨年あたりから毎夏二三組宛登られるに比し、淋しいものだが、その北隣の南湖大山とて、登山者の人氣は案外に少ないのが不思議な位だ。

シミタ又はバボー・ムトロップ

(三七一二米)

中央尖山と關山の間にこの山を入れる。

蕃地々形圖シルビヤ山圖幅でシルビヤ山の北々東、大霸尖山及び桃山に至る山脈上の一座で一二二五〇尺の記載あるもの。この初登頂は會員マレー・ウォルトン、ケー・シー・グロッス兩氏及び筆者の三名が石戸巡査部長及びシカヤウ社蕃人等と共に南方次高山方面から、昭和五年五月に成したもので(山岳第二十五年第三號英文欄のウォルトン氏の稿、同第二十五年第二號一七〇頁の筆者の通信及び臺灣山岳第六號の記事參照)、其の時私達はハパノラウ又はハパナラウと聞いた、勿論この峯筋より東はピヤナン社蕃人の狩獵區域でシカヤウ社蕃人は山を知らなかつた。

大霸尖山方面からの登攀は昨夏會員北田正三、宇佐見守、臺灣山岳會の井上一男氏等が新竹州の蕃人を連れて登つたのが最初である。シミタとは此の時に私が初めて聞いた名稱であつたが、正しく山名なりや崖名なりや判然しなかつたので、當分の內シミタ山と山の字を附記しない事と約束した(臺灣山岳彙報第三年第六號參照)。然るに今夏臺灣山岳會の縱走隊によつてシミタは潛伏なる意味を有し、新竹州竹東郡テントン社、パスコワラン社、メントユー社の蕃人等がバボー・ム

トロップといふ事を確めた。但し未だピヤナン社蕃人について現地調査を行つてゐないので、當分標題の如く、シミタ又はバボー・ムトロップと併稱する事にする。

この山の西側卽ち次高山方面からのコースも、岩と密林とが交互して容易と輕く言ひ得ない所だ。見たばかりでは最西端のピークも一寸登れさうに思はれないが、これは西北の斜面から第二ピークとの鞍部めいた所に登つて登頂した。東端に行く程惡くなつて終に直北の凄絕な斷崖を覗く危峰に立つ。これは最高點の少しく東と思ふ。次の低い岩峰は大霸尖山方面から遠望して瞭然たるものだが、その峰迄私共は行つてから、峯筋は多人數で長いアプザイレンは時間もかゝるし危くもあるので岩峰南側のルンゼに下り岩の根元を廻りつゝ稜線を捕へやうとしたが、他領に來たシカヤウ蕃人の憶病と混亂を統率する能はずして終に遠くキヤワン溪源頭に下り着き、縱走を中止したのは殘念であつた。

昨夏縱走を果した最初の組（北田、宇佐見、井上氏等）によれば、桃山（モモヤマ）の山脈との分岐點〔竹東蕃人によればバボー・プシュランといひ、約三四五五米の地點〕、近時三叉點の通り名になつてゐる）から小岩峰を越え、筆者等のアプザイレンで下らんとした長い裸の岩稜は南側に避けて登つてゐるやうである。三叉點とムトロップ頂上の間が大霸尖山・次高山間の最も險惡な場所で、大霸尖山登攀に劣らぬ所であり、斯くして大霸尖山・次高山の山脈はそのスケールの大いさ及び惡絕的な點に於て昔時の槍・穗高間尾根以上といはれてゐる。

蕃路（路とはいへ蕃人が狩獵の爲に通る冒險的のトラックに過ぎない）も、かういふ惡場は稜線を避け南側の岩の根元、又は岩と岩との間を巧みに避けて通つてゐる。今夏の縱走隊や測量や調査の職業的登山隊も皆かうして蕃路に從つてゐるのである。ピヤナン社蕃人の蕃路はなほ之より下に通つてゐるものもある樣で、昨夏臺北高校の一隊は桃山方面から大分下を廻つて次高山に行つてゐる。

序でに言つて置くが、シミタ又はバボー・ムトロップを通つて大霸尖山・次高山のトラヴァースを遂行した組は、前記の昨夏七月はじめ北田氏等の行を最初とし、

次が昨夏七月末より八月にかけて臺灣總督府鐵道部の有志横田、今井、堺、田内、高橋五氏の逆コース縱走である。この組は高連山地と蕃地に於ける經驗淺く、研究準備の不足等よりして種々問題を惹起したのであるが、そのいはゞ無茶な山行も、逆コースとしては最初の行、バボー・カランタックンあたりから案内人夫なしで大覇尖山迄行くを得た記錄等、少なからぬ業績を臺灣登山界へ投じてゐるのである。第三回は山林課調査隊の本年初夏の行である。而して第四回は前記の今夏臺灣山岳會の行である。此の外に昨夏臺北高校の組はシミタは避けたが、桃山から入つてその西方の岩峰ヤボランに登り、大覇尖山に往復してから、北田氏より一足先に次高山に達してゐる。陸地測量部員は本年大覇尖山と次高山に測量に行つてゐる事は分つてゐるが、ヤボランやシミタ（ムトロップ）に登つてゐるかどうかは疑問である。なほ極く最近十一月山林課の二隊が一は大覇尖山より次高山迄他は其の逆を歩いてゐるが、途中のコースはやはり惡場の尾根は避けて行つてゐる樣である。

關山（クワンザン）（三六六七米）

關山は臺灣で一萬二千尺級の有名な山の未踏峰として登山家其の他の注目した高山だつたが、昭和五年五月山林課測量隊の登山によつて領臺當時既に日本人によつて登られた形跡ある事が分つた（臺灣山岳第五號及び臺灣山岳彙報第三年第一號參照）。然し此の山は未だアマチュアの登山家には登られてゐない。之は主として附近の蕃人が最近迄歸順しなかつたからである。今年六月筆者は公務で新設の關山越道路を越えたが（會報第十七號參照）、其の時關山越の最高點鞍部が關山の北方八キロメートルの遠方を通過してゐる事及び之より關山への稜線が崩壞し易き岩峯多く蕃人も通過しない事を知つた。登山の余裕は作ればあつたのだが、天候不良の爲中止し、高雄州側からウハノシン山稜線を越えて關山に直登しようと思つたが、之も雨の爲全然中止した。其の後登山だけの目的で入らうと計畫してゐたが、去九月突如大關山蕃害事件（大關山は駐在所名）なるものが起つて未だに犯人の蕃人は不明であ

り、一般の入蕃は禁止されてゐる。

臺灣山岳第五號に書いた關山への登路は筆者の聞き違ひで、山林課の一隊は實は臺東廳側の東側支脈を登つたのである。

關山の蕃名はマパオック、但し之は荖濃溪流域が現在ブヌン族セブクン蕃の棲息地なるにも拘らず、ツオウ族タッパン社の狩獵區域だつたので、ツオウの名稱であるといふ。狩獵區域の境は今秋臺南・高雄兩州當局の仲介によつて、楠梓仙溪を以てする事に和解した。

大水窟山（三六四五米）

相當の標高を持ち乍らすぐ隣に秀姑巒山のやうな大岳をひかえてゐるので、パッとしない不運の山だ。文化人の初登は明治四十一年志田氏。秀姑巒山、ウラモン山へ普通に登山する際必ず通る山である。昭和五年夏、三田登高會の大賀、後藤氏等はシンカン山登山をすましてから新高山に到る途中、其の筋の許可が得られなかつた故で、秀姑巒山、ウラモン山行の目的で居乍ら、大水窟山だけで引返してゐる（登高行第八號參照）。

バットアノーミン（三六一三米）

山日記高度表中に大水窟山と蒼萊主山北峰との間にこの山と次のランゴスタウラを補つてもらふ。

バットアノーミンは蕃地々形圖シルビヤ山圖幅でシルビヤ山の南西六キロメートルの所にある一一九二五尺の山で、シカヤウ蕃の稱呼。文化人として最初に登つた記錄は昭和六年七月會員鹿野忠雄君がシカヤウ蕃人と共に少しく南方の稜線に取りついて登り、それより次高山に到つたのがそれである（臺灣山岳彙報第三年第五號參照）。シカヤウ社から次高山への登路からよく見える山で、スカイラン溪からこの山脈への直登が憧憬される。

ランゴスタウラ（三六一一米）

蕃地々形圖關山圖幅の東端にある一一九一五尺の山、ブヌン族セブクン蕃の稱呼。目下關山越道路が出來てこの山の山腹を通つてゐるので、臺東廳側の溪頭駐在所又は向陽駐在所から比較的簡單に登られる。警

察官の間では向陽山といふ新稱を用ひてゐるが、筆者等は成るべく蕃名を正稱として行きたい。蕃人以外で最初に登頂したのは山林課の吉井隆成氏の一行である。氏等は昭和五年四月下旬から二旬を費してシンカン山、南双頭山、雲峰、ヒボボス山をへてランゴスタウラに登り、次いでブラクサン山に行つてその探險的登山を終つたのである。

蒋萊主山北峰（三六〇五米）

どうして蒋萊北峰とか北山とか言はないのか聊か不審であるが、蒋萊主山連峰だけはかういふ呼び方になつてゐる。明治四十四年蕃務本署で製版した二十萬分一蕃地圖（秘の字あるもの）に蒋萊主山は合歡山と共に各々の姉妹峰の記名はない所から見ると、其の後測量の人々によつて名稱の分家が行はれたのではあるまいかと思はれる。蕃名はトロック蕃でカリヤノーミン（ノ又はモ）、タロコ蕃でデュギャック・キリビオンと聞いた。文化人の初登は大正二年の探險隊（野呂氏を含む）、東合歡山方面からである。其の後タロコ討伐が終り、大正七年二回目に陸地測量部員が登り、次いで昭和四年四月同じく陸地測量部員が登つてゐる。東北のトボコ側からの登山は大正八年五月の陸測隊が最初の文化人の記錄で、昭和四年八月には臺北一中の登山隊がトボコ側から登つて合歡山方面に向つて下りた。尙昭和五年夏には慶應山岳部の人々が合歡側から登り蒋萊主山方面へ向つて縱走してゐる。

蒋萊主山北峰及び其の連峰は山容峭拔な點から將來登山家の注意を惹く事が少くないであらうと思ふ。

東郡大山（三六〇五米）

この山は中央山脈からは西に外れ、標高の割合に人氣殆どなき高峰である。初登の記錄も比較的新しく大正十五年殖產局の高野鋼治氏である。其の他は昭和六年鹿野忠雄氏の行が知られてゐる許りだ。同氏によると蕃名は郡蕃でハハアシ、𥳑蕃でカカアシといふ。

大雪山（三六〇〇米）

大雪山といへば先づ北海道の夫れを思ひ出す。暑熱

の臺灣にしては奇名と思はれるかも知れないが、抑〻雪山とは次高山（次高山彙又は次高連山といつた方がよいかも知れぬ）の古名である。次高の山々は臺灣で最も雪量の多い山で、年によつては十二月から五月迄は始終雪を戴いてゐる事がある。なほ、雪でなくてもよい、露出した岩面の光るのを支那式に形容したのではないかとの説明もある。大雪山の名稱は既に明治四十四年の蕃地圖（前記）にもシルビヤ山（次高山）の西方に明記されてゐる。蕃名はサラマオ蕃でツプサンといふ樣だ。文化人の初登は大正四年六月十七日竹内警部、次いで蕃務本署の齋藤武彦氏、いづれも大甲溪々谷からの登頂であつた。次高山からの縱走は伊藤太右衞門氏、吉井隆成氏等が最初で昭和二年初冬、それから昭和四年の夏臺北高校のアマチュア登山隊が次高山から縱走して行つてゐる。以後は殖産局事業の爲屢々登られてゐる樣である。

キシュン山（三五八八米）

山日記大雪山の次に之を入れる。蕃地々形圖シルビヤ山で大雪山の北東約三・五キロの地點にある一一八四三尺の山。初登の記錄は前記次高山・大雪山縱走の際、卽ち昭和二年である。キシュンは勿論蕃名である。

大覇尖山（三五七三米）

邦内無双の嶮山たる大覇尖山（蕃名パーパック又はパッパクワカ）は筆者等の昭和二年夏の初登頂前に大正五年六月に伊藤太右衞門氏、財津氏等が大岩塊を廻り、一行中の石田氏は單身南東稜の中段オーヴァーハンギング・ロックの下迄攀ぢた。これが登攀の試みの第一回であつた。第二回の試みは昭和二年登頂そのものを目的とする臺北高校の一隊だつたが、其の未經驗な若者の組は南面西端に近きチムニーを中段上迄登攀しただけて引返してしまつた。此の組が去つて間もなく南東稜を目指して筆者等の初登攀がなされたのであつた。

第二回の登頂は昭和五年十一月二十四日山林課調査隊の日高、長谷川、坂倉、アバオナグイ四氏が桃山方面から來つて、樹幹を南東稜オーヴァーハンギング・ロ

ックに立てかけて登つた。第三回は同年十二月三十一日臺灣山岳會員中崎大三郎、浦上郡太郎兩氏の一行、第四回は昭和六年四月臺灣山岳會の井上一男、高尾勝夫、田榮藏、臺北高校の小林邦彦、本村正二、山崎愼氏等の一行であつた。兩回とも新竹州井上溫泉方面からであるが、第三回は警察官の同伴なく蕃人のみを連れ登頂は登山家のみ行つた最初の冬山の記錄、第四回は春の登山として又蕃人が最初に登頂した記錄として銘記すべきものである。兩回とも登攀線に多少のヴァリエーションを行つてゐる（臺灣山岳第六號參照）。

大霸尖山が賑はつたのは昭和六年の夏からで、先づ七月會員北田正三、宇佐見守及び井上一男氏等の大霸尖山・次高山間の殆ど完全なトラヴァースが始めて遂行され（「山と溪谷」十六年三十六頁參照）、之と前後して臺北高校船曳實雄氏一行の桃山・大霸尖山・次高山のトラヴァース（所謂シミタの斷崖は通過せず）、それから臺灣山岳會員見元了、大宮三郎氏等及び臺北商業學校生徒一行の大霸尖山登攀あり、八月になつてから總督府鐵道部の横田太郎氏一行の次高山・大霸尖山の逆コース縱走があつた。以上の內北田氏は單獨大霸尖山南面中央のチムニー（筆者も昭和二年南東稜が駄目ならこのチムニーをと觀察してゐた）を初登攀して南東稜を下り、他の同じ組の人々及び他の組はいづれも南東稜からの上下であつた。

其の後も今夏初めは山林課調査隊及び陸地測量部員の登山によつて、新竹方面から大霸尖山に到る蕃路も明かとなり、南東稜の惡場にも再び自然木の梯子が架けられ、次高山迄のコースも通過の困難を減少した。臺灣山岳會の佐々木舜一、河南宏（カンナン）、古平勝（コタヒラ）三、清水善次郎、桑子政彦、山河友次、荻坂剛、福山伯明（福山氏は大霸尖山のみ）諸氏の一行は植物調査採集及び寫眞撮影を主とする Scientific expedition を大霸尖山・次高山の縱走に始めて行ひ（山林課共の他の調査測量隊も斯るエキスペディションの一種ではあるが）、臺北一中の一隊は檜山から往復二日で大霸尖山登攀の强行を敢てした。又、本年十月、十一月には山林課の調査隊は少くとも二回大霸尖山次高山間を通つてゐる。

以上の如く大霸尖山及び之より次高山又は桃山への

山稜は最早探險時代＝初登時代は過ぎたのである。所謂「聖なる稜線(クレスト)」の小部分を除いては未踏の地はなくなつて大衆に親しまれ得る可能性を確立したのである。

今の所大霸尖山に登るには次高山又は桃山から縱走するに非ざれば、新竹州新東郡の井上溫泉を蕃地の第一夜に明かして檜山駐在所を經由して行くのが最も便利である。縱走とても勇敢無比の新竹州下蕃人を連れる方が好ましい。この峰の登攀丈なら新竹市から往復五日又は六日で足りる。次高山迄の縱走なら更に一兩日を增して大甲溪上流シカヤウ駐在所に到り、以後二日又は三日で東西いづれの鐵道線にも出る事が出來る。

最後に筆者として言ひたい事がある。それは臺灣山岳第五號（昭和五年九月發行、定價一圓五十錢）十七頁に筆者の書いた句の事である。「聖なる稜線(クレスト)、大霸尖山＝次高山の眞正のトラヴァース(縱走)、果して何人が共の榮譽を荷ひ、共の眞美を語り得るだらうか。」これは實際讀む人＝登山意識明瞭なるマンメリイ風の登山家を惱ましし誘つたものである事を聞きもし、又しかく書かれてあるものを見もした。たしかに筆者は自身初登頂の次の年の春にトラヴァースをするべく、自らの爲に書いたやうなものであつた。而して昭和五年の春にウォルトン、グロッス兩氏と共に次高山からバボー・ムトロップ迄行つた時、烈々たる意志は持ち乍ら、シカヤウ蕃人の無智恐怖と警察官の統御徹底せざりし爲(筆者等はタイヤル語を語り得ず、又彼等蕃人に對し何等の權限もなかつた)、並びに常の登山と違つて臺灣總督府の賓客の格だつた兩英人に對する先導役としての責任上、かの横田氏一行の二の舞を演ずる事を避けたのである(臺灣山岳第六號四四及四五頁脚註參照)。

又、或る人は筆者の「聖なる稜線」前後の用字法を云々した。然しこれは前言する如く自らに言つた言葉であつた。只不用意なりし事は結果に於て論ずる余地がない。と同時に筆者は先輩田部重治氏が、かの有名なる「秩父の印象」(大正五年六月)なる名文の最後に於て「しかし西澤、石塔澤の二つは未だ人跡未踏の地である。誰かよく共の神祕を開くべき最初の人であるだらうか。」と書かれた類句を思ひ出す。畢竟山は自ら

登り自ら樂しむべきもので、他人に語り或は書いたりするものではないかも知れない。

雲峰（三五六九米）

最近迄兇蕃地帶と目されてゐたラホアレ一派の未歸順セブクン蕃棲息地を覗きこむ著名の高峰である。蕃名はセブクン蕃はチンカボンといふ。文化人の初登且今迄唯一の登山は昭和五年四月山林課調査隊の吉井隆成氏一行である。所謂大關山事件が落着したなら、關山越道路が完成してゐる今日、關山一帶の中央山脈や、新高山脈の南面山等と共に登山家の屐足を延ぶべき山の一つであらう。山容は中々立派である。

ヤボラン又はバボー・タラガユン（三五六七米）

山日記雲峰の次に挿入してもらふ。蕃地々形圖ピヤナン社で桃山の西にある一一七七二尺の山。西側は段狀の岩壁で甚だ日本的ならざる怪峰に見えるが、登降さまで困難ならず、桃山稜線、大霸尖山稜線、次高稜線の合する所謂三叉點（バボー・プシュラン）から往復が出來る樣である。勿論東側桃山の方面からは比較的樂に登頂出來る樣である。文化人の初登はピヤナン方面から昭和六年夏豪北高校の船曳氏一行であらう。西側斷崖からの登攀は同夏北田、井上、宇佐見三氏の一行が最初である。其の後の登頂は有つたかどうか疑問である。大抵其の後の縱走隊はこの峰を省略し、又桃山と大霸尖山を結ぶコースも皆が皆この峰の北側山腹を通過してゐる樣である。

ヤボランの蕃名は昭和二年始めて筆者等が聞いた。其の後此の名稱はピヤナン社方面でも呼ばれてゐる樣にも聞き、又人によつてはジュボランとも聞いた。此の表音文字の違ひはよく例のある事である。タラガユンの名は今夏始めて佐々木氏等がテントン社、メントユー社、パスコワラン社等竹東郡蕃人から聞かれた名稱である。尙此の他、昭和五年の山旅で筆者等はピヤナン社蕃人からバコアユンなる名稱を聞いた事があるが、確かではない。

ヤボラン又はジュボランなる山名は次高山の南稜中

にもある事を注意して置く。

尙、ヤボランは臺北附近大屯火山彙一帶から望んで甚だ特徴ある山容を明示してゐる。

マリガナン（三五六七米）

山日記蒋萊主山の前に挿入。蕃地々形圖郡大社でウラモン山（舊稱マボラス山）東四・五キロにある一一七七〇尺の山。マリガナンは又、ウスマリガナン、又はウラカバンともいふ由（鹿野君による）。文化人の初登は昭和五年山林課調査隊一行が丹大山・ウラモン山縱走の際に行つてゐる。登山家としては昭和六年九月七日鹿野忠雄君が最初の登頂である（本誌參照）。

蒋萊主山（三五四四米）

タロコ蕃の蕃名デュキャック・クンリーボ。文化人の初登は明瞭でないが、大正九年乃至十三年の間に陸地測量がなされてゐるから、其の頃か、或はもつと前に野呂寧氏が登られてゐるかも知れないさうである。其の後山林課調査隊の黑澤愼介氏が行つたと聞くが、之もはつきりしてゐない。筆者が嘗て霧社で調べた當時トロックの巡査部長をしてゐた板橋氏は能高越の方から往復したと聞いた。登山家として恐らく最初の人は臺北高校の船曳實雄氏（臺灣山岳會員）であらう。昭和三年夏能高駐在所から蕃人と共に强行往復し、蒋萊主山附近ではザイルを使つてゐる。

海拔三五〇〇米以上の臺灣高山に就て其の名稱、位置、初登、登路等の漫談的說明をした事以上の如くである。緣遠いと思はれる臺灣山岳、然しそれは決して明治時代の日本アルプス程不便なものではない。往復十日の汽車・汽船の旅を見込んで置けば內地から來て充分新境地の山旅をする事が出來る。嘗て筆者が書いた「臺灣登山界の概觀」時代から見ても今日は大分事情が變つて登山に便利になつて來てゐるのである。社團法人臺灣山岳會は高踏的なる登山家の集りであるばかりではなく、登山を主とする遊子に對して官憲との間に立つ有力なる仲介者である事を附言して置く。

——（昭和七年十二月三十日）——臺北にて

遭難顚末一束

富士山に於ける土屋勇氏の遭難報告

内田勇三八、土屋勇、後藤宗七、渡邊良太郎、福澤億之助、内田勇四郎

昭和七年十一月廿六日、曇ー雨ー夜快晴氣溫甚高し。

内田兄弟、土屋、福澤の四名先發す。新宿（六・二三）吉田（九・三〇）ー大石茶屋（一一・〇〇）ー五合目（三・〇〇）大石茶屋附近より積雪あり、五合目積雪量約八〇糎なり。

天候ー午前十一時頃より霧雨降り、午後二時頃には相當の雨量となりしも、午後四時頃全く止む、風は西北の弱風なり。日沒と共に風稍々烈しく雲霧全く去りて、滿天に星の輝きを見る、されど氣溫著しく高く、午後八時に至るも八度にして軒の滴音夜半に至る迄續けり。

雪質ー前數日の晴天の爲め良く緊り居りし雪は、降雨の爲め、全く濕潤軟雪と化し、スキーを穿たざれば膝を沒する程度に落込み歩行困難なりき。内田（兄）午後四時五合五勺附近に至りて觀察せしに、雨は相當上方迄影響を與へしものゝ如く思惟せり。

午後十一時勤務の都合上後發せる後藤、渡邊兩君、深雪を冒して五合目に到着す。

廿七日　曇ー小雨ー夜晴

約二千四百米突の高度に於て靜穩なる雲海をなし、上方は薄曇にて雲高く、時々陽光を見たり。眺望よし。頂上を除きては北西の微風にして氣溫比較的高し。午後三時頃より雲海亂れ、午後四時に至りて小雪となりしも夜に入りて止む。

午前四時五十分五合目出發。雪質は氣溫高き爲め堅硬なるクラストを形成せず、五合五勺附近迄は時々膝近く迄雪中に沒する事ありたり。夏季登路に從つて登高す、六合目附近より漸く堅く、歩行安易となれり。七合三勺附近に至りて鐵柵道の處々に積雪の氷化せるを認めたれば、全員シュタイグアイゼンを穿つ午前八時なり。八合目迄は處々に蒼氷を見たるも概して雪質良好なり。天候靜穩にして殆んど風なく、脚下の雲海上には八ヶ岳、甲斐駒ヶ岳より遠く北アルプスの連嶺を望み得たり。聽ては崩る可き天候なるも、激變なく、五合目歸着の豫定時刻迄は充分靜穩を保つ可しと思惟せり。

七合五勺附近にて第一回の食事を攝る。氣溫高く手袋を脫し

て寫眞の撮影をなし得る程なりき。八合目着午前九時半。少憩。八合目以上は雨の影響を認めず、雪質はシュタイグアイゼンに最も適當せる狀態なり。風亦殆んどなく登高容易なれば、ザイルを使用せず。

頂上久須志神社着午前十一時。

氣溫零下八度。火口壁上に出づれば風强し。壯大なる奇觀に接して一行の元氣愈々旺なり。午前十一時三十分頂を辭し、夏道の側の長大なる斜面を眞直ぐに下る。堅硬なる凍雪面に混へて稍々軟き部分ありたり。シュタイグアイゼンの下に雪塊附着する事なし、八合目歸着午前十一時五十分。少憩す。

蒼氷の部分もなく、岩礫もなく、傾斜も比較的緩にして(約二十五度位ならんか)歩き易ければ、積雪期登山者が屢々下降路に擇ぶ大澤(吉田町の通稱にして夏季砂走りの道なり)を下る事とせり。午後零時十分土屋、內田(兄)、渡邊、福澤、內田(弟)、後藤の順にて、八合目小屋より斜めに大澤に下れり。殆んど無風狀態にて、氣溫比較的高く、特に寒氣は覺えざりき。スカブラは全然なく、太陽、雨の影響を受けたる雪面は平滑にして適當の硬度に凍化せり。處々小部分なれども、雪質異り、クラスト薄く踏めば靴を沒する處あり。愼重に下る。

約標高三二五〇米邊迄斜めに下りたる時、先頭にありし土屋は、如何なるはずみなりしか、クラストの薄き部分に入りて靴を雪中に沒したる拍子に身體の安定を失ひ、前にのめらんとするを耐へしも、遂に橫に倒れたり。顚倒と同時に彼はピッケルを以て滑落を防がんとし、約一、二間程滑りたるとき、良くピッケルを雪中に突き立てたり。されど不幸にも手離れて、ピッケルのみ空しく雪上に殘れり。斜め上にありし一同は爲す術もなく、滑落し行く彼の姿を唯呆然として凝視するのみなりき。瞬時にして彼の姿は七合目附近の岩頭の露出せる急斜面の後方に見えずなりぬ。時に十二時二十分なり。

後藤をして直に滑落痕を辿りて下らしめ、內田(兄)他の三名と共にプリズムを以て彼の姿を求めつゝ山稜上を下る。呼べども答なし。七合目附近の急斜面下にて滑落痕消えたり。プリズムを以つて山稜上より尋ぬれば、稍々下方の雪上に血痕を認む。後藤それを辿りて急行し、シュタイグアイゼンを付せる靴(左)及靴下を發見す。約標高二五五〇米附近六合六勺小屋の西方四、五十米の等高線上に至りて、雪上に彼の姿を發見す。一行中の慶應醫學部生福澤、內田(弟)直に檢診せしも既に空し、顱頂骨複雜骨折を以て卽死せしものと斷定す。午後一時なり。渡邊、內田(弟)を遭難急報の爲め、直に下山せしめ、他の三名は遺骸を六合五勺小舍へ運び、折柄下山し來れる日大山

岳部藤田、廣田兩氏の助力を得て、小舍内に安置す。此の頃より篠立ち込めて天候險惡となれり。午後三時半急報に依りて、五合目より五合目小屋主、池谷、登山者、森、高橋、伊藤、福島、拓大山岳部、豐吉、渡邊、河野氏來援す。直に丸太橇を急造し諸氏の助力に依り小雪降り初めし中を五合目小屋に下る。午後六時小舍着。夜人夫堀内來る。

廿八日晴午前八時、慶應山岳部、三井、渡邊(榮)兩氏來る。午前十一時、令弟武滿氏、慶應山岳部、渡邊(英)、谷口、金山、中村四氏來る。午後一時、一同遺骸を護りて山を下り午後二時馬返着。遺族、吉田町有志並に友人一同に迎へられて納棺す。自動車にて吉田町を經て午後十時土屋家に着す。

附記　今回遭難に際し、御盡力下されし諸氏に厚く感謝の意を表す。其の事情原因の如何に拘らず斯の如きアクシデントを惹起したるは、自らの足らざるに基くものにして、深く遺憾とす。

(内田勇三記)〔會報再錄〕

菅沼に於けるドイツ技師の遭難報告

處女スキー地として意外な盛況を見せた日光湯元溫泉南間ホテルに同宿中のスキー客獨逸製鋼會社技師ゲオルグ、アイディング氏は、今春一月二日少し早や目の書飯を濟ますと共に夫妻連れ立つてカメラ一つを持つた輕裝でホテルを出たが、其の日の午後〇時半頃金精峠下の第三ゲレンデ(金精平)附近で夫妻が峠の方へ向け谷筋を登つて行つたのを見た人があつたのを最後として消息を斷つに到つた。

翌日になつても歸らない處に不安が募り、夫妻の友人クライッファー氏の如き非常に心配して、捜索隊の派遣方を希望し始めた。自分達も焦慮の結果、南間主人に地元から捜索隊を出す事に就き意見を徵した所、外人客中には從來無斷で外泊する實例は澤山ある、彼樣な場合地元として何時も捜索隊を出したが、其の都度關係者が心配して居た旨を告げても却つて取越苦勞を冷笑される位で何等の感謝に接した事がない。

今度も恐らく西澤金山か丸沼方面で遊んで居るに違ひない。殊に夫妻共非常にスキーに堪能だから心配の要はない。外人はかゝる點極めて氣輕で日本人とは少し異る所がある。心配をする必要は未だあるまい、と云ふ理由で警察署には勿論地元の誰にも此の行方不明事件は公表されないで居た。一方友人のクライッファー氏は夫妻の部屋に遺されて居るルックサック、多量の食料品、旅行用具等から推して、夫妻は嘗つて不用意に日歸り以上のスキーツアーに出た例が無い。山登りや岩登り

が好きだが其の時は充分に準備をして出かける。しかるに今度はカメラ以外に一片の食料品も持たずルックサックも殘してある。殊に自分に對して無斷で出た所を見るとホンの近所に散歩氣分で出たのであらう。所がもう二十時間を經過して居る。キット何處かで二人共遭難して居るに違ひないと捜索隊出動を希望して止まない。遭難か無事か、不安な空氣が此の事を知れる限りの人々の心を暗くして三日の日が暮れた。一刻の猶豫もなり兼ねる狀態に在るので、合議の結果外人夫妻が二日晝以後所在不明の旨を告げ、且つ同宿者の援助を求めるポスターを食堂に掲示した。

地元旅館からも經營者の參會を求め席上南間主人から右外人の行方不明を發表し、且つ考ふる所があつて〔其の後南間氏より直接聞く所によればあの場合警察署に報告すれば直ぐに捜索隊を出さなくてはならないそれによる營業上の打擊損失を顧慮したので後の非難は甘んじて受ける事を覺悟して發表報告を差し控えたと云ふのである〕今迄通知をしなかつたと云ふ事を附け加へた。協議の結果金精峠を越えて丸沼方面が最も有望視されるので第一班を之に當て、金精峠から南方の笈吊岩、白根方面を第二班、西澤金山方面を第三班が捜索する事に決定した。

捜索隊のメンバーは有志として東京美滿津運動具店の伊東虎夫氏、工業大學の西田一雄氏、ブンテン夫妻、ノークス氏、及び自分と同伴の早大、近藤昌、越後三俣の關幸策の八名に、地元から釜屋旅館主人小林愛之助氏が參加し別に人夫二名が輪カンジキで從ふ事になり、出發は四日未明と決定した。以上の如き經過を辿り夫妻が消息を斷つて以來卅四時間後に捜索隊が編成されたのである。

捜索實情

四日早朝捜索隊出發に先き立ち西澤金澤方面には外人の入つた形跡の無い事が確められたので、第三班を中止して第一班に繰り入れ一、二班が出發と云ふ所へ、突然日光警察署から釜屋に電話で外人が菅沼附近で遭難して居る旨報告して來た。一同は杞憂が現實になつた事を悲しんだが、夫人のみは無事であると云ふ事を知り得たので、全員を一隊として現場に急行する事になり午前八時五十五分湯元を出發金精峠に向つた。

二時間後には峠着、峠からは遭難者のシュプールに注意し始めた。峠を下りた菅沼湖畔清水附近では夫妻の歩いたものと推定されるシュプールが、南岸の夏道を辿らず反對に夏ならば唐松草や、とりかぶとの美しく咲き亂れるあの草原を横切

つて北へ向つて居るのを見出した。

此處にア氏が徒に死を急いだ跡を追つて菅沼の北岸を捜索しつゝ進み、午後二時四十五分遂に菅沼西隅の八丁瀧落口の水電監視小舍に僅々一町餘の北方で、アイディング氏の遺骸が湖岸の急崖(水電用として水を丸沼に落した爲めに目下湖岸線が四五米低下した爲めに出來た)を滑り落ちて湖中に氷結し、顏、手、靴が露出して居る慘狀を發見した。是より先き救ひを求めに大尻沼に下つたア氏夫人の急報により、追貝の巡査部長が醫師、人夫を同伴ア氏夫人と共に程なく現場に來着し、直ちにロープで引き上げ、檢死の結果前額部の外傷は、致命傷では無く饑餓、疲勞、寒氣による凍死であると檢案された。水を飲んだ樣子の無い所から見ても溺死でない事は事實である。此の悲慘な作業を現場に見守る夫人の淋しい姿に同情の涙を禁じ難きものがあつた。

遭難に到る顚末

ア氏夫人に現場附近で聞き得た所と前後の事情を綜合推定するに、二日の午後金精峠を越えた夫妻は峠の向ふに良いゲレンデがあると聞き菅沼湖畔に下りた。しかるに清水の北方平地で歸路を誤り溫泉岳中腹を彷徨して居る內に再び菅沼湖畔に出た。止む無く北岸の急崖の上をスキーを擔いで終夜沼尻の方へ辿る內に、折柄の吹雪(大したものではないと思ふ)の上に猛烈な寒氣と疲勞と饑餓が襲ひ來り、半醒半眠の狀態で步行中、ア氏は午前三時半頃湖面結氷上に足跡らしきものを發見、これを確めようとして下つた所、不幸にして結氷が破れて全身水に浸つて終つた。夫人も共力して漸く引き上げるや、寒氣の爲め衣服は氷結しア氏は次第に知覺を失ひ始めた。此處にスキーを殘して夫人のあらゆる看護を受け乍ら、ア氏は湖岸を這つて進み僅か數丁に一時間を費したと思はれた頃、再び湖中に轉落するに到つた。墜落と同時に息絕えて夫人一人の力では最早や到底引き上げる由もなく、茲に夫人は唯一人未知の雪中を八丁瀧に沿つて下り六時間を費して、漸く大尻沼の水電監視小屋に急を報ずる事が出來た。夫人が湯元を出發以來夫君の死を報ずるに到る迄前後實に二十四時間に亘り、一片の食物をも口にしては居ない、其の體力と意氣、寔に謂ふ所を知らないのである。

後記

ア氏夫妻はスキー技術には堪能であつたが日光附近の地理には通じて居ない。其の上案內者を雇はず僅かに陸測二十万日光圖幅のみを賴りに、磁石、食料、マッチ、ランプ、防寒具等總ての用意を忘れ、しかも冬の午後になつて峠を越した事に遭

難の近因があるものと思はれる。しかし一方處女スキー地としての奥日光は宣傳未だ行き渡らない最初の年に既に滿員の盛況を見て居る。これは湯元が既に有名な溫泉場であつたのにもよるが何と云つても東京から僅かに四時間程の近くに在り、しかも素晴しい乾粉雪と豐富な雪量、變化に富むゲレンデ(特に林間スキーに於て優秀)と高峻山岳を周圍に廻らすと云ふ稀に見る豐な天惠が、今後益々多くの内外登山家スキーヤーを此の地に惹き付けるに相異ない。これに對して地元として充分な用意があつたと云へるだらうか。此の不幸な犧牲者の靈に對しても又今後同樣の事件を未然に防ぐ爲めにも、冷淡なる打算觀念を捨て日光山岳會あたりと共力して地元民にスキー並びに冬山案内の技術を習得せしめるは勿論、組織ある組合を結成し設備待遇の改善にも盡力せられる事が急務であらうかと思ふ。

(塚本閑治記)

藏王山に於ける柏源一郎氏遭難顛末聞書

峨々溫泉に於ける聞書

昭和八年一月十四日、山麓遠刈田より藏王山に始めての登山者一名峨々溫泉に向つて登山せる旨峨々に電話ありし爲め、峨々溫泉の若衆一人は途中不動瀧小屋邊まで迎へに降り同道して溫泉に着す。

一月十五日、青根溫泉を見物す。此の際柏氏は單獨行を主張せしも、途中弘法茶屋より濁川への降道「十八曲」に於ける不安と、峨々溫泉主竹内直也氏は所用の爲め青根滯在中なる爲めと、郵便物受取の爲めに、竹内氏宅より若衆一人同道して此の日青根まで往復す。歸途普通二時間位の所を四時間以上を要したり。

一月十六日、柏氏單獨にて東北帝大の藏王ヒユッテ邊りまでスキーにて登る。

一月十七日、柏氏單獨にて峨々溫泉を午前七時出發刈田岳に向ひたるまゝ其の後の消息を斷つ。

其の日の天候、午前十時頃までは先づ晴れたりと云ふことを得べし、雲はあれども非常に高く峨々よりは邊りの山頂は眺められたり。風なく靜穩なり。十時過ぐる頃より雲低く垂れて山頂を包み始む。此の日恰も峨々の若衆一人遠刈田より登りたり。彼は清水原にて午後零時頃ミゾレと共に風吹きしが不動小屋邊りまで登りし頃にはミゾレは全くやみ、風風ぎたれどもガスの爲めに眺望は賽の河原の下邊までしか利かず。それより上は朦々とせり。其の日は曇天に暮る。

柏氏出發の模樣ー出發に際して上ノ山方面に降るか或は、高湯に降るか言明せずして、先づ刈田岳まで登りて後決定すると稱したり。此の時竹内氏宅の若衆は、爐邊にて、今年は小島さんの三年忌、三枝さんの七年忌に當る爲め歳廻り惡しければ、一人で殊に始めての山の且つ山越は見合せるべきことを說き、或は案内者と共に越すべきをすゝめたれども、柏氏は自分は今迄二十年以上、夏冬を通して廣き範圍にわたり登山の經驗を有し、常に單獨行をなし、地圖と磁石とを充分信賴してコースを定め得る自信ある由を答へて、且つ自分は妻子ある身であり、第一遭難をせし際の事を考ふれば、峨々溫泉はもとより、山麓地方の人々に非常なる迷惑をかける事になるを以て、決して無謀なることは爲さゞるべき事を云ひて出發せり。

一月十九日、柏氏安着の通知を待ちつゝ三日間(山形側よりの通信は普通三日間を要す)を峨々溫泉の人々は過して、此の日朝竹内氏は東京の柏氏宅宛安着の問合をなす。殆んど之と前後して柏氏宅より「まだ峨々に本人滯在せるか」との照會電報ありたれば、竹内氏は直ちに「十七日出發せり」との返電をなし、之に次ぎて柏氏宅より「高湯にも居らぬ行先知らせ」との電報に重ねて「搜索賴む」との依賴ありたれば、竹内氏は直ちに大河原警察署に山形方面に於ける柏氏の情報探知を依賴せり。

引續き山上の惡天候の爲めと種々なる交涉との爲め數日を經過したり。

一月二十四日、山の天候稍良好なるを見て峨々溫泉の若衆四人はスキーにて搜索の爲め刈田岳に登る。頂上より上ノ山方面に向ひ降れるシュプールを發見して之に從ふに途中に於て該シュプールは消失せり。引返して熊野岳方面に向ふ内に始め一人のシュプールあるを見て之に從ふ間に、數本のシュプールが入り亂れ且つ方向は熊野岳より降れるものなることを確めたり。然る間に天候は眺望利かず、風强くなりたれば四人は此の日不敢取下山することに決して滑降す。

一月二十五日、柏氏の親父市川玉造氏は前以て東京出發に際して、宮城縣警察署に搜索依賴の通知を發し、此の日大河原及び白石警察署に到り更めて又搜索依賴を申出られたり。大河原警察署は宮城縣警察署の依賴により前以て青根に來り情報を聞き大河原に歸りたる處なりしなり。

市川氏及び本人の弟君一名は二十五日大河原警察署員と共に青根に登り、土地の消防隊の内冬期登山可能の者を以て搜索隊を組織することにせり。

一月二十六日、朝本人の親父市川氏及び弟君來峨、警察署員

は其の日午後青根より峨々着。

一月二十七日、青根より警察署員一名、消防十二名スキーにて峨々着、遠刈田より警察署員一名、消防隊六名峨々到着。

此の日山上吹雪にて捜索隊出發不可能。

一月二十八日、全員を三班に分ち

第一班　上ノ山方面

第二班　高湯方面

第三班　刈田峠、パラダイス附近

の捜索を行ふこととなして峨々を早朝出發せしも、賽の河原より以上は吹雪の爲め登行不可能にて全員一先づ峨々に引返す。市川氏及び弟君は此の日到底捜索不可能なることを考へ歸京、捜索隊全員も雪解の候を待つことゝし解散下山す。

峨々出發當時本人の服裝其の他

上衣、茶褐防水レインコート地製品

ズボン、黒ラシヤ長ズボン、其の下端を臀錠にて二ケ所をしめる樣にす

下衣、　ジャケツ二枚を重ぬ

スキー、ヒッコリーアメ色塗地

アザラシ、ゾーム張着用

兩杖、　臺灣棕榈樣黑色材

帽子、　スキー帽

ルックサック内容物大略

一、手札型野外用組立カメラ、同用三脚

一、下衣としてのシャツ一、二枚、地圖、磁石、其の他

食糧一、ニギリ飯三個（二個にて充分なる事を本人が云ひしも竹内氏宅にて一個を加ふ）

一、パン若干

峨々温泉に於ける柏氏、氏は兩三年前に神經衰弱の故を以て職を退き遊食中の者にて竹内氏宅の人々とは話すことを避けるが如き態度にて、尋ねられる時に僅かに答へるが如き模樣なり。それによれば氏は二十年以上も北海道、上、信、越の山岳に夏冬の經驗あり、概ね單獨行動を採れり、而して山行には地圖と磁石によりて所定のコースは確實に決行出來得る自信を有せしが如し。遠刈田よりの登り及び青根見物の歸途に於ける氏のスキー熟練の模樣より考ふるにスキーは餘り長き經驗はなきが如し。

高湯温泉に於ける聞書（山形館にて）

遭難の通知に接して種々捜索方法に就きて協議せしも、高湯には冬山に經驗深きスキーの出來る山案内無き爲め、如何とも

出來ざりし由、極めて簡單なる答のみ得ることを得たり。

後　記

柏氏宅より安否の照會を高湯に發したることより考ふるに、氏は東京自宅出發に際して、高湯へ山越えする意志ありたることを推量し得べし。然るに峨々出發に際しては、何等の決定的意圖を漏らさずして行けるが爲めに、前記の三方面を主として搜索する考へなりしも今日迄全山的搜索不可能なる狀態なり。其の後二月三日、白石營林署員六名峨々溫泉より上ノ山越をなしたり。其のコース附近には何等柏氏の跡らしきものを認めざる事よりすれば、同方面に彼氏降れりとするならば、左方横川の深谷に迷ひ込みしか或は右して千人澤に思はずも入り込み脱出不可能になりしか、其の何れにするも、雪解後に於ても搜索極めて困難なる所なり。又高湯方面に降る考へにて熊野に登らんとして馬の背の强風に突風に左へ右へと吹き付けられお釜への斷崖より墜落せることも考へ得らるべく、或は熊野岳の降りに際して少し右を採りて方向を誤りホウ澤に入れるか、又は少し左方に降りて地藏岳との間の澤に入りしか、或は地藏西南面の密林中に於て彷徨し遂に疲勞の極立つことを得ざるに至れるか、其の何れとするも夏季に於てさえ密林中の搜索は容易ならざるべく、屍体發見は極めて困難なることならむ。而れども冬季一度雪に埋もれたらばその遭難の場所が何處なるも雪中埋沒者は到底發見不可能なるべし、これが夏季人の交通すべき場所ならば意外の時に於て發見は容易なるべし。

考ふるに此の度の遭難は地勢を知らざる未知の山に單獨に而も冬季天候の極めて急變し易き藏王山に登れる事が第一原因なり。柏氏は何故に峨々より案内を賴まざりしか。客に對して强制的に案内者を伴はせしむることは又は登山を禁止せしむることは旅館として不可能なる事なれども、斯かる遭難例の往々發生する今日、危險性多き山麓の旅館に於ては何事かの方法によりて、此の度の如き無謀的登山者なからしむる樣具體的手段を相當の權威を以て採らるゝことを希望するものである。

附記―柏源一郎氏は三月十二日、山形高校生によりて藏王、馬の背附近に於て凍死せるを發見された。　（額田敏記）

會報

會務報告

十二月一日定例理事會

出席、小島、高頭、木暮、鳥山、茨木、松方、角田、田中、中原（委任）伊藤、槇、神谷

一、山小屋に關する報告　從來の山小屋委員會を改めて新委員會を組織す。資金募集の方法其他に就ては追つて協議す。

一、學生有志晩餐會の件　學生の會員が主となりて晩餐會を開き親睦を計る件承認。

一、利用者少なき爲め明年度より日曜日は圖書室を閉室する事に決す。

一、明年度豫算の件　原案承認

一、新入會員會費延納の件並に會員の家族入會に入會金を免除するの件を役員總會に附議する事とせり。

昭和八年一月二十日臨時役員會（山小屋の件）　於三會堂

出席、小島、近藤、高頭、茨木、福島、角田、黑田、松本、額田、松井、槇、神谷、木暮、鳥山、浦松（山小屋委員）松方、渡邊、爪生

一、山小屋建設費金六千圓を計上、基金以外の金額募集方法につき協議す。

一、會員より一口金二圓とし寄附を求むる事。

一、基本金の一部を借入れ建設費にあて、追つて返却のこと承認。

一、爪生氏より小屋設計圖及び工事豫定につき說明あり。

一月二十日定例理事會

出席、小島、高頭、木暮、茨木、松本、神谷、黑田、福島、松井、額田、角田、浦松、田中

一、一九三三年度山日記の件　形式內容其の他大體に於て從來の方針に從ふ事。

一、「高山深谷」の件　高野氏を主とし新に委員會を設ける事とし交涉は茨木氏に一任。

一、登山經歷表の件　研究調査係に於て近日中に草案作成の事。

二月九日定例理事會

出席、小島、高頭、木暮、冠、鳥山、槇、茨木、角田、神谷、松本、福島、黑田、松井

一、「山岳」第二十八年第一號報告　一二のものを除き原稿大

體集る。約一五〇頁。

一、「高山深谷」の件　最近委員集合の上具體案作成の筈。

一、會計報告　鳥山氏より事務引繼に關し報告あり。

一、「山岳」並に「會報」の廣告を廣告代理業進恒社に依頼する事に決定。

一、山小屋の件　山小屋委員會の報告あり。尙近日槇、角田現地調査に赴く豫定。

理事々務分擔決定

昭和八年度事務分擔左記の如く決定す。

庶　務　田中、槇、松本、福島

會　計　神谷、松本

編　輯　伊藤、茨木、松井、黑田、福島

會　報　額田、角田

圖　書　伊藤、黑田、松井

研究調査　福島、額田、黑田、田中、浦松

山小屋　角田

山日記　黑田、額田、神谷、角田、松井

關西事務一切　中原、津田、高橋

會則の細則一部變更(昭和八年度より實施)

本會々則の細則一、「會費其ノ他ニ關スルモノ」に左記條文を加入す。

「毎年一月一日ヨリ八月三十一日迄ノ入會者ニ限リ其ノ年度ノ會費ヲ二ケ月間延納スルコトヲ得、但シコノ適用ヲ受ケントスル者ハ其ノ旨入會申込ト同時ニ申出ヅベシ」

細則一、「會費其ノ他ニ關スルモノ」の中ロニホにある「十一月末日」を「九月一日」と改む。

昭和七年度會員大會

十二月十日午後五時より赤坂三會堂に於て開催す。

小島會長の挨拶の後、鳥山理事より會計報告、槇理事より庶務報告、松方理事より山小屋、山日記等に就て報告あり六時半終了。

午後七時よりは恒例の講演會に移り、松方理事の外國の山小屋、角田理事の日本の山小屋並に澗澤に建設すべき本會の山小屋に關する幻燈併用の興味深き講演あり、午後十時閉會。

當日參會せられたる會員は左の如くである。

本郷　常幸　加藤　保二　福島　昌夫　齋藤　雄三
飛川　維之　櫻井　信雄　島田　巽　谷本　光彦
茨木猪之吉　戸塚　武彦　市野瀬善四郎　吉田　竹志
太田耳動子　澱　信　美濃島　巍　田中　正男
飯塚篤之助　塚本　繁松　田中　菅雄　石塚秀次郎
木暮理太郎　高橋良之助　吉田喜久治　額田　敏
岩田　一二　木村　一男　原田　恭雄　角田　吉夫
大澤　照貞　百瀬舜太郎　行方　沼東　佐野喜三郎
神谷　恭　津田　周二　采野善次郎　今西　錦司
黒田　正夫　澤　智子　名古屋常治　黒田　孝雄
渡邊　漸　松方　三郎　C. H. Archer　槇　有恒
小島　久太　鳥山　悌成

第五十七回小集會記事

十一月二十五日午後七時より、例の如く三會堂に於て開催。會員三田幸夫氏に「冬のクル溪谷の登山の話」、會員小川登喜男氏に「外金剛集仙峯に就て」と題する御講演をお願ひした。三田氏は二時間に亘り、多年の蘊蓄と貴重な經驗を傾けられ、小川氏も一時間餘極めて熱心に經驗談を話された。小川氏は、金剛山に對する一般的說明をされた後、昭和七年八月に於ける一週間の同氏等の登山の精細と、金剛山の岩その他に關する經驗、觀察等を明快に話され、我々に金剛山の正確な概念と、良き參考とを與へられたが、氏の講演概畧は、「會報」第二十一號に掲載されてあるからこゝには省畧する。

三田氏の講演概要は次の如くである。

先年アルバータ登山の時のガイド、ハインリッヒ・フーラーが、二〇年前ブルースに伴はれてクルに行き、ゲーパン山登山を試みた時の話に、同地方には高さは餘り高くないが面白い良い山があるといふことであつた。それが今度クル溪谷に先づ行く動機となつたのであつた。調べてみると、冬でも交通は比較的便利であることを知る。先づヒマラヤンクラブのゴーレー氏の紹介で、その友人でクルに果樹園を經營するキャプテン・ペノンに同地方の模樣を訪ね、人夫その他のことを依頼する。

一人ではあるが試驗的にスキーを使ふこととし、其

の他の道具と共に日本より取寄せた。

ダーヂリン附近のシャーパー族が、ポーター・ガイドとして、エベレスト、カンチンジャンガ登山に優れた技術を有することを認められたので、それを使ふべく交渉したが、二人でなければ行かぬといふ事なので、經濟的理由からこの方は中止した。

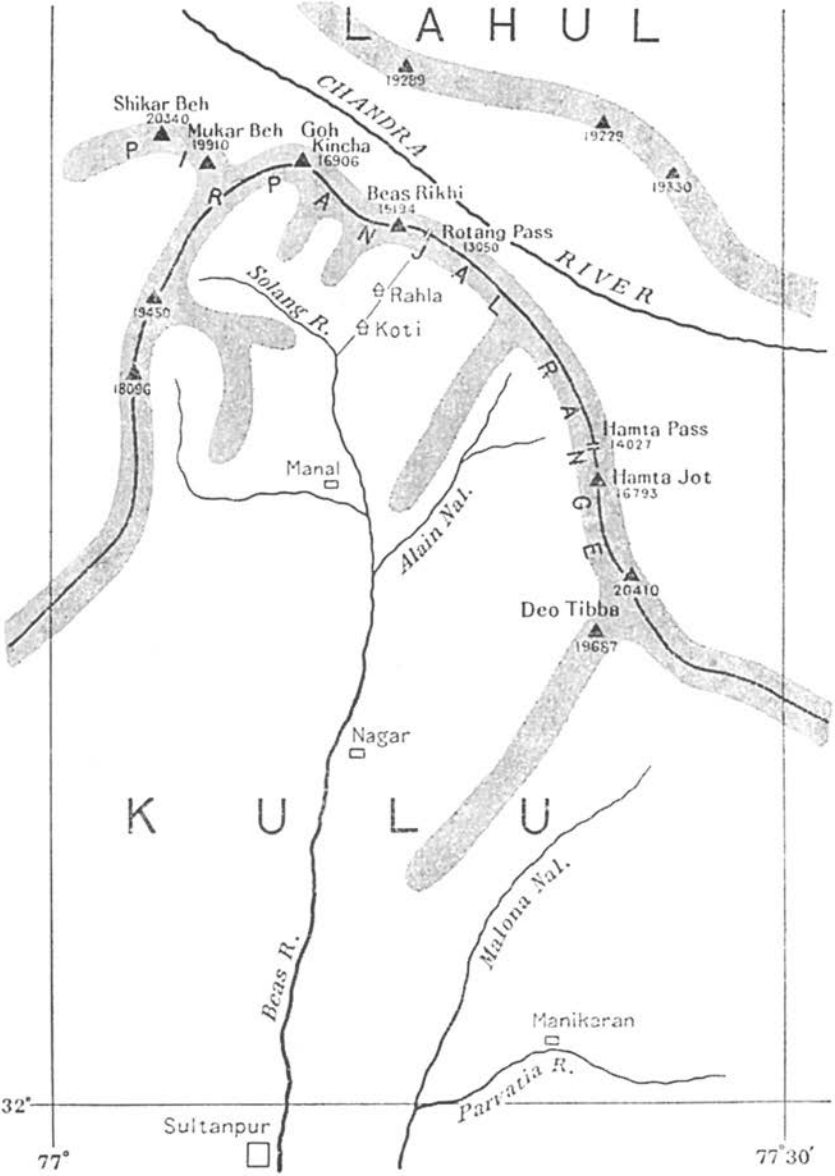
一九三一年一月十四日、カルカッタ發。荷物は四貫目平均のカバン九個。冬季登山用具、テント二張、スリーピングバッグその他。またクーリー用の防寒具十二人分(靴、眼鏡、ジャケツ、靴下、毛布等)を用意せり。

カルカッタ——一二〇〇哩——アムリッツァー。ここより輕便鐵道一〇〇哩でカタンコット。更に登山鐵道一〇〇哩でジョギンナガール。ここからクル舊王國の首府サルタンプール迄自動車を通じ(一二〇哩)、二日間の行程である。ロータン峠に源を發するビアス河がこのサルタンプールを流れてゐる。ブルース一行は夏クル方面よりロータン峠を越して、マウント・ゲーパンを試み、フーラーは三回これを試みたが失敗した。この間六ケ月を費してゐる。

サルタンプールは人口五〇〇、開けた村である。クル王國の王様や宰相に面會して非常に愉快な經驗をした。この地で食料品を買ひ、又奥のガイド達の出迎へをうけた。幸ひその年マナリ村(插圖中 Manal は Manali につき訂正す)のベノン氏がトラック道路を作つたのでそれを借りてマナリ村まで半日で到着した。

マナリ村も人口約五〇〇。住民は夏は耕作、冬は羊毛を紡いだりして暮してゐる。ベノン氏のバンガローに滯在す。人夫はなか〳〵得られなかつたが、漸くギルーなる案内(四十位の獵師、この邊の谷をよく知るといふ)とコック一人、人夫九人を傭ふ。最初、ロータン峠に續く山、ビアスリッキを登る豫定である。夏ならばこの峠はチベットへ行く旅行者がよく通るところであるが、冬季の登山はこれが最初である。

一月二十一日マナリ村出發、コティ村を經てラーラのレストハウスに行く。その間九哩終日を費す。降雪あり。これよりロ峠迄六哩。ここを根據として天張を次第にすすめる豫定を立つ。(以下の登山記は「登高行」第八年にあり。)


LAHUL
CHANDRA RIVER
19289
19229
19330
Shikar Beh
20340
Mukar Beh
19910
Goh
Kincha
16906
PIR PANJAL RANGE
Beas Rikhi
15194
Rotang Pass
13050
Solang R.
Rahla
Koti
19450
18096
Hamta Pass
14027
Hamta Jot
16793
Manal
Alain Nal.
20410
Deo Tibba
19657
Nagar
KULU
Malona Nal.
Beas R.
Manikaran
Parvatia R.
32°
Sultanpur
77°
77°30′

翌二十二日、案内他二人を伴つて出發す。快晴。足を傷めたので、ルンチ（靴下、山羊の毛で厚く編んだもの）プラー（ワラヂ）を用ひたが、極めて工合がよい。他は皆靴を用ふ。三十分位登ると暴風となる。但し天氣は良好。ビアスリッキは比較的容易に登れさうに觀察された。峠の下二哩アラニ溪の入口に、雪崩の危險なき處（風當り强く積雪なき場所）を見出し、天幕と食料二三日分を置く。（土人はチャパッテーと稱する食料と羊の燒肉を用ひるが、これは凍らぬ爲め頗る良い。）

翌二十三日コティ村よりのクーリー來る。一行はその日出發、薄曇、風無し。マリの石小屋を經て、ロ峠に午後三時に到着した。氣溫零下十八度。キャンプに適當な處見當らず、爲めに下山に決す。その頃より少しづつ生ぬるい風が吹いて來て天候惡化す。マリ着、野營したが、夜中降雪あり、翌朝下山したが吹雪となり、途中にて非常に困難を來し、再び雪中に野營。翌日、空が晴れたので出發し、九死に一生を得て漸くラーラに歸着することが出來て、この登山を終つた。

尙、同氏の經驗による感想、今後の注意等を極めて興味深く附言された。

當日の來會者は左の如く、盛會であつた。

（司會者　伊藤記）

交野　武一　松井　榮一　加藤　恭平　磯貝藤太郎
加藤　泰安　坂江　善治　吉田　竹志　田口　一郎
川崎　吉藏　佐々木延峯　安田登茂次　名古屋常治
大熊　保夫　田中　正男　角田　吉夫　黑田　孝雄
磯野　計藏　中屋　健一　大野　精七　小林　義正
神谷　恭　松本　善二　島田　巽　木暮理太郎
櫻井　信雄　松方　三郎　田中　菅雄　澤本　辰雄
飛川　維之　小島　久太　渡邊　八郎　斯波悌一郎
澤　智子　多賀　富藏　荻島　雄二　小原　勝郎
塚本　繁松　福島　昌夫　長澤　佳熊　伊藤秀五郎
茨木猪之助　飯塚篤之助　外會員外二十名

第五十八回小集會記事

昭和八年二月二日午後六時より、赤坂溜池三會堂に於て、神谷理事司會の下に開催、左記講演及び小型映畫（九ミリ半）が催された。

「秩父と其の山村」　原　全敎氏

秩父の溪谷とその山村に、非常な執著と、熱情を籠めて研究して居らるゝ原氏は、其の主脈は申すに及ばず、地圖上には到底現はすことの出來ない樣な、極めて小さな尾根、小澤に至るまで、徹底的に歩いて居らるゝことを聞いて、その蘊蓄の一端を講演して戴いた次第である。

その要旨は、秩父山塊は古くから人文に深い交渉を持ち、それだけに數多くの口碑、傳說を藏し、亦その山村の人情が、未だに、實に意外に思ふ程醇朴であること、そうして此の純眞な人情美を透して觀た秩父こそ、最も美しい秩父の風景であらうと論じられ、彼の幽玄な黑木に蔽はれた森林美や、溪谷美も、勿論秩父の美を構成する重要素ではあるが、これだけでは到底秩父の美を考へることは出來ないと、秩父山村の人情美を强調せられた後。

奥多摩泉水谷の小舍に於ける、大蛇――蚤――人との間に起つたグロテスクな事件、和名倉山（地圖の白石山）を繞る瀧川谷と大洞川に笛吹川の水源を成す東澤や西澤にも劣らぬ、惡場のあること、尙其處に懸る瀑布、深淵に殘る、山人遭難の遺跡に就いて語られ、又最近雲取山の小舍に現れた、三峯神社の御眷屬（狼）の話、而かも夫れが馬の樣に大きかつたこと等、この他多くの傳說、奇談は綿々として盡きず、すつかり聽集を魅了して仕舞つたが、時間がなく中止せられたのは殘り惜しかつた。

「山の映畫」九ミリ半　會員　塚本閤治氏近作

塚本さんの映畫、それは山の好きな人々にとつて大きな魅力であらう。これは一度でも氏の映畫に接した人々の、等しく受ける感じである。

昨年も二月の小集會で拜見したが、夫れから恰度一ケ年、其の間隨分多くの作品があることを耳にしては、最早や我慢が出來ず、御無理を希つた處、早速快諾せられたことは、洵に感謝に堪えない。

氏は映畫に先だち、豫め用意して來られた略圖に依つて、映畫の解說をせられたことは、非常に有難かつた。殘に今年一月日光菅沼に於ける、獨逸人アイディング夫妻の遭難事件は、偶然氏が湯元滯在中の出來事

で氏は捜索隊のリーダーとして、大いに救援に努力せられたので、詳しく眞相を知ることを得たことは幸であつた。

先づ映寫順に記せば、

△五月の富士山……一卷（七年五月作）

岳麓一帶は既に翠々しい新綠で、瞭爛目も醒めんばかりの富士櫻、それを透して仰ぐ崇高な銀嶺、夥だしい殘雪に埋もれた登山路、山頂の素晴らしい展望、舊火口壁に無數に垂れ下がる大氷柱、八合目邊りからの壯快なシュテム・ボーゲンは全く息づまるやうな感激を覺えた。

△上越國境の雪……二卷（七年五月作）

笠ヶ岳、蓬峠、大源太、仙ノ倉、三國峠に到る晩春のスキー登山の映畫で、笠ヶ岳から谷川岳、一ノ倉の岩壁を眺めた壯觀は、若い岳人の心を、强く惹きつけずには措かない。

△新雪の苗場山……一卷（七年十二月作）

新雪に蔽はれた針葉樹の美林、處女雪に映る影と光の階調、懷かしい山小屋の煙、廣大な山頂の銀盤等々不尠スキーヤーの心を惹く。

△一月の奥日光……一卷（八年一月作）

之こそ前述菅沼に起つた悲劇で、アイディング氏遭難の報に驚く日光湯元、救援隊の編成から菅沼にI氏の凍死體發見、引揚げ作業までの情況が、餘りにもまざ〳〵と銀幕に映し出されて、觀る者をして暫し暗然たらしめた。此の外朝鮮金剛山へ行かれた折の作品があつたが、時間が無く割愛せられたことは惜しかつた。

右の外會場には、穗高池ノ平に建設の豫定である、本會山小屋の模型、寫眞、敷地設計圖等多數陳列せられたが、非常に良い參考となつた。

當夜は近來稀れに見る盛會で、左記の如く來會者百十數名に及んだことは寔に欣びに堪えない。

（司會者　神谷記）

磯貝藤太郎　吉澤　一郎　加藤　泰安　高橋　康彦
飯塚篤之助　安田登茂治　山口　清秀　交野　武一
櫻井　信雄　中村　太郎　岩崎京二郎　飛川　維之
坂江　善治　小林　義正　島田　巽　山村　孝三
矢島　幸助　伊藤　一郎　村井　榮一　原田　恭雄

塚本　閣治　鹿野　忠雄　吉田　竹志　住　廣造
田中　正男　村越　匡次　高頭仁兵衞　加藤　保一
木村久太郎　中村　貞治　本多　友司　多賀　富藏
木暮理太郎　吉田　次男　田中　菅雄　額田　敏
野口　未延　星野光之助　武田　久吉　濃　信
井上　良則　木村　一男　戸塚　武彦　小島　久太
槇　有恒　山崎金次郎　山根　雅雄　角田　吉夫
伊藤秀五郎　小竹　弘　長嶋　春雄　松方　三郎
小平　潔　黑田　孝雄　吉田　直吉　伊藤朝太郎
櫻內　敏雄　澤　智子　斯波悌一郎　笈川　一
宮地　貞穎　澤井德太郎　茨木猪之吉　神谷　泰
松本　善二　外に會員外五十一人

合計　一一六人

「山岳」投稿規定

一、投稿は何人も自由とす。日本山岳會員たると然らざるとを問はず。
一、原稿の採否は理事會に於て決定す。
一、原稿は返却せざるものとす。
一、別刷所要の向はその旨原稿に朱記せられたし、その費用は筆者の負擔とす。
一、原稿にはその梗概を付せられたし。
一、紀行には概念圖を添付せられたし。
一、寫眞は光澤印畫紙に燒付けられ度、裏面或ひは別紙に說明記入を乞ふ。
一、校正は編輯者に一任せられたし。
一、地名及び外國語は特に明確に書かれ度、地名には振假名を附せられ度し。

原稿蒐集所
東京市芝區琴平町一、不二屋ビル、三〇七號室
日本山岳會編輯所

原稿用紙所要の向は前記編輯所宛て申込みあり度し。

日本山岳會々則

第一條　本會ヲ日本山岳會(Japanese Alpine Club)ト名ツク

第二條　本會ハ山岳ニ關スル科學、文學、藝術其他一切ヲ研究シ以テ健全ナル登山氣風ノ振興ヲ期シ且ツ會員相互ノ連絡親睦ヲ圖ルヲ目的トス

第三條　本會ハ前條ニ掲ケタル目的ヲ達スルタメ左ノ事業ヲ爲ス

(1) 機關雜誌「山岳」ノ發行、又時宜ニ依リ臨時又ハ定時ノ出版物刊行

(2) 其他登山者ノ爲メ適宜ノ事業

第四條　本會ハ毎年大會及小集會ヲ開ク

第五條　本會ニ左ノ役員ヲ置ク

會長一名、副會長若干名、評議員十五名以内、理事十五名、監事二名以内

第六條　會長ハ本會ヲ代表ス　但シ會長ニ事故アル場合ハ副會長之ニ代ル

第七條　會長及副會長ハ役員總會ニ於テ役員ノ内ヨリ之ヲ推薦ス、會長及副會長ノ任期ハ三ケ年トス　但シ役員トシテ任期滿了シタル場合ハ會長副會長トシテノ任期滿了前ト雖モ交替スルコトアルヘシ

第八條　評議員ハ本會ノ重要會務ヲ審議ス

第九條　評議員ハ本會發起人ノ總テト元役員タリシ會員中ヨリ評議員會ノ推薦セル者ヲ以テ之ニ任ス　發起人以外ノ評議員ノ任期ハ三年トス　但シ重任ヲ妨ケス

第十條　評議員ハ互選ヲ以テ常任評議員若干名ヲ選任ス

第十一條　常任評議員ハ評議員會ヲ代表シテ會務ニ參與ス其任期ハ三年トス

第十二條　理事ハ別ニ定ムル細則ニ依リ候補者中ヨリ會員ノ投票ヲ以テ之ヲ選任ス其任期ハ三年トシ、理事定員數ノ三分ノ一ヲ毎年改選スルモノトス

但シ引續キ重任スルコトヲ得ス

第十三條　監事ハ評議員會ニ於テ會員中ヨリ之ヲ推薦ス其任期ハ三年トス　但シ重任ヲ妨ケス

第十四條　役員總會ハ評議員、理事ヲ以テ組織ス

第十五條　役員總會、評議員會及理事會ノ議長ハ會長之ニ當ル　但シ會長ニ差支アルトキハ副會長之ニ代ル

第十六條　役員ハ任期滿了後ト雖モ後任者ノ就任スル迄ハ其

任務ヲ行フモノトス

役員ニ缺員ヲ生シタルトキハ前各條ニ依リ夫々之ヲ補充ス補缺役員ノ任期ハ前任者ノ殘任期トス

前項ノ場合ニ於テ特ニ補缺ヲ必要トセサルトキハ次ノ改選期迄之ヲ行ハサルコトヲ得

第十七條　役員總會、評議員會及理事會ハ會長之ヲ招集ス

第十八條　役員總會ハ役員二分ノ一以上評議員會ハ評議員二分ノ一以上理事會ハ理事二分ノ一以上出席スルニ非レハ議決ヲナスコトヲ得ス

第十九條　役員總會、評議員會及理事會ノ議決ハ出席者ノ過半數ヲ以テ之ヲ定ム可否同數ナルトキハ議長ノ決スル所ニ依ル

第二十條　役員ハ總テ無報酬トス　但シ其職務ノタメ必要ナル實費及旅費ヲ給與スルコトアル可シ

第二十一條　本會ハ會員ヲ分チ左ノ三種トス

一、通常會員　會費年額六圓ヲ納ムル者

二、終身會員　一時金百圓以上ヲ納メタル者

三、名譽會員　役員會ニ於テ推薦シタル者

右ノ二、三ニ該當スル會員ハ爾後會員籍ヲ有スル間ハ會費納付ノ義務ナキモノトス

第二十二條　本會々員タラントスル者ハ會員二名ノ紹介ヲ以テ申込ムモノトス、入會許可ノ通知アリタルトキハ入金金五圓ニ會費ヲ添ヘ拂込ムモノトス　入會許可ノ通知アリタル後一ケ月以内ニ右ノ手續ヲナササル者ハ入會ノ許可ヲ取消サル可シ

第二十三條　入會ノ許否ハ理事會ノ決議ニ依ルモノトス

第二十四條　本會會則ノ變更ハ役員總會ノ決議ヲ以テ之ヲ定ム

第二十五條　前條ノ決議ハ役員三分ノ二以上出席シ其出席者三分ノ二以上ノ同意ヲ得ルコトヲ要ス

第二十六條　本會ハ適當ト認ムル地方ニ支部ヲ設クルコトヲ得

支部規則ハ役員總會ニ於テ之ヲ定ム

細　則

一、會費其他ニ關スルモノ

（イ）會費ハ毎年二月末日迄ニ納付スヘキモノトス

（ロ）毎年一月一日ヨリ八月三十一日迄ノ入會者ニ限リ其年度ノ會費ヲ二ケ月間延納スルコトヲ得　但シ此適用ヲ受ケントスル者ハ其旨入會申込ト同時ニ申出ス可シ

（ハ）毎年九月一日以後ノ入會者ニ對シテハ其年度ノ會費ヲ免除ス

（ニ）本會ハ會員ニ會員章ヲ交付ス會員章ヲ紛失シタルモノ

ハ實費ヲ以テ再交付ヲ受クルコトヲ得

(ホ) 本會ハ機關雜誌「山岳」ヲ毎年發行シ毎號一部ヲ本會會員ニ頒布ス　但シ毎年九月一日以後ノ入會者ニハ頒布セス

(ヘ) 毎年九月一日以後ノ入會者カ其年度ノ雜誌「山岳」ノ頒布ヲ希望スルトキハ更ニ一ケ年分ノ雜誌代ヲ納ムルコトヲ要ス

(ト) 本會會員ハ別ニ定ムル所ニ依リ本會所藏ノ圖書ヲ閲覽スルコトヲ得

(チ) 會員ニシテ退會ヲ欲スルトキハ其旨事務所ニ必ス書面ヲ以テ申出ツヘシ

(リ) 會員ニシテ本會ノ體面ヲ毀損シ又ハ會費納付ノ義務ヲ怠リタル者ハ理事會ノ決議ニ依リ除名ス

(ヌ) 本會ハ既納ノ金品ヲ一切返付セス

(ル) 團體加入者ノ代表者交付シタル場合ニハ新舊兩代表者ノ連署ヲ以テ代表者變更届ヲ提出スヘシ

(ヲ) 本會集會室及圖書室ヲ東京市芝區琴平町一番地不二屋ビル三階三〇七號室ニ置ク

(ワ) 海外旅行其他ノ理由ニヨリ十二ケ月以上、三十六ケ月以下ノ間不在トナル場合ハ、會員ハ其ノ理由、不在期間等ヲ詳記シ、取扱手數料金貳圓ヲ添ヘ事務所ニ届出ツル事ニヨリテ、不在會員ノ取扱ヲ受クル事ヲ得、此場合ニハ不在期間ハ會員章ヲ返納スルニ及ハス、會費納付ノ義務ナキモ本會ノ出版物ノ頒布ヲ受クル事ヲ得ス

二、理事選擧ニ關スルモノ

(イ) 理事定員十五名ノ内三名ハ之ヲ關西在住ノ會員中ヨリ選任ス

(ロ) 役員總會ハ理事改選又ハ缺員補充ノ際ニ會員中ヨリ候補者ヲ推薦スヘキモノトス

(ハ) 會員中十名以上ノ推薦ニヨリ會員中ヨリ一名ノ候補者ヲ擧クルコトヲ得　但シ一候補者ヲ推薦シタルモノハ他ノ候補者ヲ推薦スルコトヲ得ス

(ニ) 理事候補者タルヘキモノハ入會後滿三ケ年ヲ經タルコトヲ要ス

(ホ) 團體ノ代表者タル資格ニ於テ會員タルモノハ候補者タルコトヲ得ス

(ヘ) 候補者ノ氏名ハ豫メ本會ヨリ全會員ニ通知シ投票ヲ求ムルモノトス

(ト) 候補者ノ數カ改選又ハ補充セラルヘキ定員ノ數ヲ超過セサルトキハ投票ヲ要セサルモノトス

(チ) 改選ノ際五名ノ内一名ハ關西在住ノ理事トス

(リ) 投票ハ記名連記投票トス

昭和八年四月十日印刷
昭和八年四月十五日發行

【定價金貳圓】

編輯兼發行者　東京市牛込區市ヶ谷仲ノ町二十八番地　黑田孝雄

發行所　東京市芝區琴平町一番地不二屋ビル内　日本山岳會
振替口座東京四八二九番

印刷者　東京市神田區表猿樂町二番地　中村修二

印刷所　東京市神田區表猿樂町二番地　株式會社開明堂東京支店

著作權所有

發賣所　東京市神田區表神保町　東京堂
東京市牛込區富久町十四　進恒社

『山岳』廣告取扱所

到達し得た最高度

人類が曾て上昇し得た最高記錄は、ピカール教授の氣球によつて作られ、その貴重なる幾多の研究撮影を行なつた「ライカ」は、寫眞機の曾て運ばれた最高度の記錄と云へませう。

人類が曾て踏み得た最高の地は、スマイス氏の隊によつて登攀されたヒマラヤのカメツト峰で、二萬五千余呎の呼吸すら困難なる嚴寒の高所に於て、「ライカ」は尙よく完全にその使命を果しました。

而してこの「ライカ」はまた、人類が曾て到達し得た寫眞機製作技術の最高の精密、完全さをもつ完璧無比なる小型萬能カメラであります。

「ライカ」は發賣後數年にして旣に九萬個以上の普及を見、あらゆる方面のあらゆる要求を十二分に滿足させる結果その使用家は益々激增するのみであります。

ライツ社日本代理店
シユミツト商店
東京市日本橋區室町三丁目二
大阪市北區中之島二丁目十三

ヒマラヤの旅

長谷川傳次郎著

著者が死線を突破して撮影せる世界的稀覯本

山岳愛好者座右必携の國際的決定版

「ヒマラヤの旅」は……世界の屋根に於ける**素晴らしい山旅の紀行と寫眞集の二重奏**から成る快著である。裝幀・印刷・製版ともさすがと、うなづかれる……此の著に收められた同氏の大旅行は、二部に分たれてゐる。最初は**カイラス巡禮**で、ヒマラヤを横斷してチベットに入り、幾多の艱苦をなめて遂に聖峰カイラス一週の目的を達したのであつた。…氏の此の時の旅行はその筋の眼をかすめてなされたもので、英領印度中の最高峰ナンダデヴイ山群の麓を經て歸印したものである。第二のものは巨峯**ナンガパルバット行**である。此の山行に於て氏はナンガパルバット山塊の一安峰の雪尾根に取り付き、標高二萬フイートを越える山稜からルツパル大氷谷を隔てて日のあたりに主峯を仰いだのだつた。…如何にヒマラヤのスケールが桁ちがひに大きいかは素破らしい寫眞が物語つてゐる……氏が日本人として二萬フイートの標高をふんだ第一人者であることは事實である。…しかもそれは詩人としての心と美術家としての眼とをもつて追及された**世界の驚異**である。……（**藤木九三**・昭七・一〇月大朝所載）

美術として觀賞するに堪える寫眞帖であり、文學として愛讀するに足る地理書である。寫眞約二百面、豐富な材料のなかから存分に選拔されたものに相違ないことは細心な變化ある編輯によつて一目瞭然である。（**佐藤春夫**・昭七・九月東日所載）

再版絶對不可能

奉仕的廉價版拾二圓 菊倍判 送料五十七錢

東京驛前丸ビル・振替東京三四

中央公論社發行

MIZUNO MOUNTAIN GOODS

山の用品は美津濃へ

四季常に山の用品が取揃つて居ます。

特に 1933 年度新製美津濃登山靴とル

ツクサツクは自慢の逸品で御座います。

大阪　淀屋橋
東京　小川町
神戸　元町通

美津濃

名古屋大須門前
京　都　四條通
大阪南　日本橋

OSAKA TOKYO KOBE KYOTO NAGOYA

『あゝ、實にいゝ心地だ！
山で知るサロメチールの快よさ！』
擦り込んで一休みすれば、清爽なる快感と共に
痛みも疲れも氣持ちよく徐々に消えてゆく……。
「リュックサックにサロメチール」それは打み、挫きに或は疲勞回復に必携藥とされ、旅行、登山の一常識である。
一管のサロメチールがあれば、疲れた足で
強行する如き心配もなく、心ゆくばかり旅
の愉悦を享藥し得る。
山に、旅に…必携の
スポーツ藥
サロメチール
一円と 五十錢と 藥店にあり